

カルバリー・チャペルの特徴

聖書と聖霊のバランス

カルバリー・チャペル・ムーブメントの原則

チャック・スミス

Calvary Chapel Distinctives by Chuck Smith

目次

はじめに

神が、神に仕える働きに人を呼び出される

第一章 神が考えておられる教会のモデル

第二章 教会を治める制度

第三章 聖霊によって力を受ける

第四章 神のやり方で教会を建て上げる

第五章 恵みの上に恵みを加えて

第六章 神のことばが優先される

第七章 イエス・キリストはすべての中心

第八章 キリストのからだ「教会」は、天にまで昇る

第九章 聖霊によって始まった

第十章 愛が最優先される

第十一章 バランスを求める

第十二章 信仰によって冒険する

はじめに

いったい何が、Calvary Chapel(以下カルバリー・チャペルと表記)と他の、聖書を信じている福音派との違いをもたらすのでしょうか？ その理解を深めるために、神が私たちのフェローシップに与えてくださった働きの特徴を理解することは良いことです。もしカルバリー・チャペルが、通りの向かい側にある教会とまったく同じであるのなら、両者はひとつになった方がよいでしょう。しかし、もし神が両者に与えてくださる特徴に相違があるのなら、神はそれぞれの特徴を生かそうとして、ご自分の広いご計画の中に置かれたのです。また、私たちの信仰とその実践のあり方について、多くの面で似ている教会が存在するのも事実です。私たちは、キリストのからだからはみ出したわけではありません。その一方で、神はカルバリー・チャペルの働きにおいて素晴らしいバランスを与えてくださいました。このバランスという点で、カルバリー・チャペルは他と比べて、多くの面において違いが見出されるのです。

多くの人々が聖霊の賜物とその働きは、今日でも実際に存在すると信じています。しかし彼らの多くは、聖書の教えを強調しないだけでなく、聖霊の体験に導くガイドラインとして聖書を見てはいません。一方で、多くの人々が聖書の教えを強調するのですが、聖霊の賜物が今日でも与えられることについては分かち合いません。カルバリー・チャペルでは、みことばを教え、聖霊の働きに心を開いています。このバランスこそがカルバリー・チャペルの特徴であり、だからこそ祝福された特徴ある神のムーブメントとなったのです。このバランスを理解するために「なぜ神は私たちのグループを存在させ、成長させたか？」という全体像を知り、その上で聖書の原則を理解することが大切なのです。

以上のように述べたからといって、すべてのカルバリー・チャペルが瓜二つというわけではありません。私は、神が私たちにシンプルな原則を与えてくださった上に、非常に多様なあり方をも創造して下さることにいつも驚きを覚えています。私たちには目が二つ、鼻が一つ、口が一つ、そして耳が二つ与えられているにも関わらず、なんとひとりひとりには違いがあることでしょう！ 人々は、それぞれに違った気質や感情によって表現を作り出しています。しかし、神はすべての人々を愛しておられ、感情的に豊かな人も乏しい人も愛しておられるのです。神はすべての人々に、神ご自身との関係を持って欲しいと願っておられるのです。そのために、神はそれぞれ特徴ある教会を創造されているのです。ある教会は感情的に豊かな人々にアピールし、ある教会はまじめで儀礼的なものを好む人々にアピールしているのです。神は、いろいろな人々に近づき祝福したいと願っておられるのです。神は、それぞれの特徴を楽しんでおられるようです。その幅広さのゆえに、感情豊かな人々から儀礼的なスタイルを好む人々、その中間に位置するすべての人々の必要が満たされるのです。神のご計画の中で私たちにそれぞれ特徴ある持ち場を与えてくださるのです。しかし、私たちは自分がどこに当てはまるのかを理解しなければなりません。「『カルバリー・チャペルの特徴』と呼んでいるものが何なのか？」を理解することが非常に大切なことです。「何が私たちのフェローシップをユニークなものにしているのか？」という素朴な問いかけをするとき、この幅広いキリストのからだのどこに位置するかをよく理解することができるのです。

神が、神に仕える働きに人を呼び出される

「この名誉は自分で得るのではなく……神に召されて受けるのです。」(ヘブル 5 章 4 節)

カルバリー・チャペルの特徴について知るまえに、ミニストリーにとって大切な二つの事柄、「あなたは神から呼び出されたのか」、また「それに対して心から応答したのか」という点についてじっくりと考えてみましょう。

もしあえて、ミニストリーに欠かすことのできない本質的な要素を挙げるなら、それはまず最初に、神から呼ばれたという自覚が絶対に必要になるということです。つまり、神によって選ばれ、神に仕えるために呼ばれたという確信があるか？ ということです。聖書は「神から呼ばれたこと、選ばれたことを確かめなさい。」と言っています。あなたは、神ご自身によってミニストリーに呼ばれたと確かに信じていますか？ これはとても大切なことです。なぜなら、ミニストリーは職業を選択することとは違うからです。

これは神からの呼びかけによるのです。では私たちは、どのように神ご自身から呼ばれたことを知るのでしょか？ ミニストリーに呼び出されたという自覚は、選択の余地があるというのではなく、必ず必要なものです。

パウロはその自覚を次のように表現しています。「もし福音を宣べ伝えなかったら、私はわざわざいだ。」(I コリント 9 章 16 節) またエレミヤは、困難なことが何度も起きたので、彼は自分の口を閉じることに決めました。彼は牢屋に投げ込まれ、命までも脅かされました。だから彼は決めたのです。「もうだめだ、やめる。」そして彼は言いました。「私は、『主のことばを宣べ伝えまい。もう主の名で語るまい。』と思いましたが、主のみことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて燃えさかる火のようになり、私はうちにしまっておくのに疲れて耐えられません。」(エレミヤ 20 章 9 節) ミニストリーに呼び出されるとは、これだけの自覚が要求されるのです。なぜなら、ミニストリーはすべてが魅力的とは限らないからです。それどころか非常に困難な時期を通過することがあります。ペテロが書いたように「愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、……」(I ペテロ 4 章 12 節) 私たちが理解しなければならないのは、たとえ神ご自身があなたを呼び出されたとしても、その召命自体が神によって徹底してテストされるということです。あなたは、どれだけ自分が神から呼び出されたことに対して確信がありますか？

私がミニストリーに呼び出されたと感じたとき、その目的に備えて学校に行きました。しかし、私は学校での学び方に困難を覚えました。なぜなら、私ははやく学校の外に出て主のために仕えなければ、と感じていたからです。いつも私は「イエス・キリストを知らないために世の中の人々が滅びようとしているのに、教室で教科書を読んでいる場合だろうか？」と思っていました。世の中は私を待っている、と確信していたのです。ですから、学校を卒業して初めて仕える働きの場を得たときのショックは相当なものでした。世の中は私を待ってはいなかったのです！ それからすぐに試練がやって来ました。経済的にも霊的にも苦しくなりました。私が期待していたミニストリーの成果である実を見ることはなかったのです。すぐに結果を出して興奮を味わうことを期待していたのに……。

逆に、経済的にじり貧になるばかりです。そこで私は家族を養うために、またミニストリーを続けるために、副業から収入を得ることを余儀なくされました。私が所属するミニストリーからは十分なサラリーを貰えませんでした。それからの十七年間、自分と家族を養うために副業の仕事をしていたのです。このような状況はとても辛いものです。なぜなら、私は神から呼ばれたと確信していたのですから。それにも関わらず、本当に私は呼ばれたのだろうか？ と疑問を抱くことがありました。また、あるとき私は神に向かって、私を呼び出される職種を変えてくださいとも願いました。私は次のように言いました。「神よ、ビジネスマンに変更してください！ ビジネスの世界のほうが気楽でうまくいきそうに思えます。事実、私は楽に稼いでいるじゃないですか。主よ、私はよいクリスチャンのビジネスマンになれると思います。そうすれば、どこかの教会や誰かのミニストリーをサポートできます。」私が本気で逃げようとしたにも関わらず、神はそれをお許しにはなりません。このような試練の中にあっても、神に仕えるというビジョンは私の心の内で燃え続けていたのです。だからこそ、まず神ご自身から呼ばれた自覚がなくてはならないのです。大切なのは以下の素朴な質問に自身で答えてみることです。「神は本当に私をミニストリーに呼ばれたのだろうか？」

神から呼ばれた自覚とともに必要なのが、心に決めて主に応答することです。牧師としての資質の中で、イエス・キリストの權威に対して、心に決めて応答することほど大切なものはありません。自分自身の野望や、欲求や、意志・意欲によっては決まらないのです。ただ神ご自身の意志によって決まるのです。私は、人生を神に明け渡しています。もし、私が主に心から応答するならば、神のことばと、神ご自身と、他者に対して仕えることになるのです。

ミニストリーのために必要な態度を身につけるには、イエスのことばを思い出さなければなりません。イエスは言われました。「あなたがたも知っているとおおり、異邦人の支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。しかし、あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。」(マルコ 10章 42—44 節)まず仕える働きについて本質的なことを理解する必要があります。そもそも、ミニストリーはあなたが仕えられるためではなく、あなたのために人々が給仕するわけでもなく、あなたが牧師だからといって、誉められるためでも尊敬されるためでもないのです。そうではなく、あなたが仕える側なのですから、たとえ無理をしてでもあなたが人々に仕えるのです。

「なんてだらしないんだ、この牧師たちは！」これは最近、私が牧師たちの会議に出席したときのことで、私たちが集まっていた場所に、彼らはコーヒーカップとコーラ缶持参で現れました。もちろんコーヒーカップとコーラ缶を持参しても全く問題はありません。私が驚いたのは彼らがそれを床に置きっぱなしにしたことです。彼らが去った後、私一人で残したコーヒーカップとコーラ缶を拾い集め、その講堂を掃除しなくてはならなかったのです。誰かがそれらを足に引っかけて倒せばどうなるかは明らかです。私はカルバリー・チャペルの牧師たちが、この施設で働いている人々に対して悪い模範を残すことがいやだったのです。このように、多くの人々がミニストリーを他者に仕える機会としてではなく、自分に仕えてもらう機会として捉えているのです。「きっと誰かが私の飲み残したものを拾うだろう。私は牧師先生だからな。」と考えるのは、ミニストリーという言葉に矛盾しているばかりでなく、聖書が教えていることにも逆らっているのです。

以前の私は、家の中で服を脱ぎ散らしていました。あるときついに私の妻が言いました。「私はあなたの奴隷になるつもりはないわよ！ 自分の服ぐらい自分でハンガーに掛けなさい。なんで私があなたの服を拾いまわってハンガーに掛けなければならないの？」私は彼女の言ったことを考えてみました。そして彼女が正しいことを認めたのです。これは私にとって重要なレッスンとなりました。私は、支配するために呼ばれたのではなく、仕えるために呼ばれたのです。

裏切りによって捕縛され、十字架がご自分に迫る直前、イエスが弟子たちとともに最後の晩餐を迎えられたときの事です。イエスはタオルを腰にまわって弟子たちの間を歩き回り、彼らの足を洗われたのです。そして、彼らに質問されました。「イエスは、彼らの足を洗い終わり、上着を着けて、再び席に着いて、彼らに言われた。『わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。』(ヨハネ 13章 12—14節)ペテロが言ったように「あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。」(1ペテロ 2章 21節)「ミニストリー」という言葉は、本当は「もてなす」とか「奉仕する」という意味です。私たちは、使用人として呼び出され、使用人として存在するのです。何よりもまず主のために、そして主の子どもたちのためにです。

これは私の個人的な意見ですが、喫煙という趣味趣向は、この世の中でもっとも不潔なものの一つだと思います。彼らはタバコ臭いだけでなく、そのにおいをあたりにまき散らしているからです。喫煙者は近寄って服のにおいを嗅げばすぐにわかります。彼らの家に入ってカーテンのにおいを嗅げば、目まいがするほどです。これだけでも不潔なのですが、それより質が悪いのはタバコの吸い殻をポンポン捨てることです。吸い殻を捨てた後に、靴で吸い殻を地面に擦りつけるのです。そうやって歩道を汚して立ち去るのです。人々が教会に来るときにタバコを吸いながら来るのを見かけます。彼らは教会に入る直前に、タバコを靴で地面に擦りつけるのです。いったい誰が吸い殻を拾うと思っているのでしょうか？

子どもから大人になる過程で、私は母から、けっしてタバコや吸い殻には触らないようにと教わりました。今でもタバコを触るとき、汚いという思いが突き上げてきます。教会の地面から吸い殻を拾い上げるたびに、子どもころから染み込んだ汚いという感覚がこみ上げてくるのです。「ああイヤだ。」それでも教会の敷地はいつもきれいにしておきたいので、吸い殻が落ちていると拾います。しかし私は頭の中で、誰ともわからない相手に向かって、不満と文句を言いながら拾っていたのです。そして「汚くて、臭くて、まわりの人のことなんか考えない、だらしない、思いやりのない人々だ！」と思っていたのです。

そのとき、主が私の心に語られたのです。「あなたは、誰に仕えているのか？」私は「あなたにです。」と答えました。主は「だったら、ぶつぶつ言うのをやめなさい。」と言われました。苦い思いを抱きながら仕えるなということです。むかつきながら働くなということです。もし私がタバコを捨てた相手に苦い思いを抱いて仕えていたら、むかつきながら働くしかありません。しかし「主よ、今からあなたの教会の敷地をきれいにします。」と思うのであれば、吸い殻を拾い集めてごみ箱に入れ

るのに内心むかつきながら働くといったことはなくなります。なぜなら主イエスのためにやっているのですから。人から同意を得るためではなく、ただ主のためにやります。

聖書が言っているように「あなたがたのすることは、ことばによると行ないによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。」(コロサイ 3 章 17 節)

ミニストリーにおいて、これ以上に大切な態度はありません。私たちは主に仕え、働くのです。しばしば人々は私たちの気に障ることをしたり、けっして感謝できないようなことをします。彼らはいろいろと要求するのです。要求するばかりの人々とともにいることは不愉快なものです。

あなたが「彼らに仕えなくてはならない。」と思うならすぐに挫折を味わうことになります。しかしあなたが「主に仕えよう。」と思うなら、あなたは仕える働きをこなすことができるでしょう。たとえ、どのような仕える働きであれ、まず最初に主に向かってやらなければなりません。報酬を与えてくださるのは、他ならぬ主ご自身なのですから。

けっして人々から賞賛を得ようと思っではなりません。あなたに「ありがとう、あなたがいてくださるから助かるわ。」と言ってくれるのを期待してはなりません。そんなことはまれだからです。私が入り込む人々のために仕えて、仕えて、仕えたとしても、私が仕えるのを止めてしまうと、彼らはひどい仕打ちで返すことがあります。すべては、主に向かってやるという内なる態度を身につける必要があります。つまるところ、仕える働きとは、主ご自身に仕えるものであることを知ってください。そのとき、あなた自身の報酬を受けるのです。いつでもこのことを忘れてはなりません。私はイエス・キリストの使用人です。主イエスが私のご主人なのです。主こそが、ミニストリーに報いてくださる方です。主の御前に正しい態度をとると心に決めて、人々に仕える必要があります。主のためにやるのです。

私たちは、主イエスに対して心に決めて応答し、神の民に仕えるだけでなく、神のことばに対しても心に決めて応答しなければなりません。聖書は、神の靈感によって書かれ、まちがいのない神のことばであることを信じない人がいるなら、その人とミニストリーとは何の関係もないと私は考えます。悲しいことに、現在アメリカでは五十パーセントの牧師や働き人が、この基準に達していないと思われまふ。なぜ彼らは、自分が信じてもない本から教えるのでしょうか？

もし、あなたが聖書は神の靈感によって書かれたと信じるなら、そのままを教えるのが義務です。どんな方法であれ聖書を知ってください。そして、聖書に心から応答しなさい。パウロがテモテに言ったように「あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。」(Ⅱテモテ 2 章 15 節)

あなたは、聖書をどのように学ぶかについて教えてもらうことはできますが、聖書を学ぶ道のりは、けっして終わりがありません。私自身、今日に至るまで、神のことばに心から応答することと、神のことばを学ぶことを心に決め続けてきました。それはほかでもない神から認められるためにやっていることなのです。

第一章 神が考えておられる教会のモデル

「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。」(マタイ 16 章 18 節)

カルバリー・チャペルでは、新約聖書の使徒の働きを教会のモデルとしています。キリスト教の歴史は、多くの場合悲しみと痛みを伴った失敗の連続だと私たちは確信しています。教会という旗印のもとで、イエス・キリストの御名のもとに、多くの恐ろしいことが行なわれてきました。

私が、大学での授業に出席したときの事です。教授が私のことをクリスチャンだと知ると、よく耳にするキリスト教会史の問題を厳しく追及しはじめたのです。それに対して、私は次のように答えました。「キリストを信じるという事を、不完全な教会の歴史だけで判断するのはやめてください。キリストを信じることは、ただキリストによってのみ判断されるべきではないでしょうか？ イエスが何と言われ、どのように教えられたかご存知ですか？ 『あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けるから。』この教えに関して何か問題がありますか？ イエスは『互いに愛し合いなさい』と言われました。これに関して何か反論はありますか？ 『受けるよりも与えるほうが幸いである。』とも言われましたが、何か異論はありますか？」イエスの基本的な教えを語るとき、疑い深い人たちでさえ、そこに問題は見出せないのです。彼らが問題ありとする批判は、実はクリスチャンだと自称する人々がキリストの御名のもとに行なったことに対してなされているのです。

ヨハネの黙示録の中で、イエスはアジアにある七つの教会に対して、彼らの問題を語っておられます。使徒ヨハネがまだ地上で生きている時代においてさえ、イエスは教会に悔い改めを呼びかけて、彼らの中に存在する致命的な欠陥を指摘されました。イエスご自身や使徒のものとは明らかに違う教えが忍び込み、すでに教会の中に腐った種が蒔かれていたのです。紀元一世紀が終わる頃には、グノーシスや、アリア系の土着信仰の教えが教会の中に入り込み、教会はすでに衰退していたのです。また聖職者の階級制度が進化し、複雑な教会組織の制定がすでにこの頃に始まっていました。黙示録の中でイエスのご自身の不快な思いを、使徒ヨハネを通して表明しておられます。

これは最初の教会の基礎が据えられてから、六十年も経っていない時期に起こったことなのです。ということは、教会が腐って生ぬるくなるまでにそれほど時間がかからなかったわけです。主はいつでも彼らを口から吐き出すことができたのです。このような教会の実態は、イエスに吐き気をもよおさせたのです。教会の歴史を眺めるとき、現在も少しも向上していないように思えます。逆に教会は、道徳や倫理に関して悪化の一途をたどっているようです。主が七つの教会に語られたことは、そのまま現代の教会にも当てはめることができます。

教会の歴史を見直してみても、よいお手本を見つけることはできません。それは人間の歴史を見ても人間は堕落しているので、神の願いと意図をそこに見出すことができないのと同じです。そこには神の願うあり方を見出せないのです。教会についてもそのまま言えることです。神が願っておられる教会は、教会史の中にお手本を見つけることはできないのです。

あるべき姿の教会は、新約聖書の使徒の働きの中にあります。これは力みなぎる教会です。この教会は聖霊によって導かれ、聖霊によって権威を与えられた教会です。この教会が、よい知らせである福音をこの世に示したのです。パウロはペンテコステの出来事から三十数年後に、コロ

サイの人々に手紙を書きました。「それらは、あなたがたのために天にたくわえられてある望みに基づくものです。あなたがたは、すでにこの望みのことを、福音の真理のことばの中で聞きました。この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」(コロサイ 1 章 5—6 節)初期の信仰者たちは、福音をこの世に力強く表わしていた教会を体験したのです。

使徒の働きを記録を見ると、私は、神が意図していた通りの教会をそこに見ることができると信じています。聖霊によって満たされ、聖霊によって導かれ、聖霊によって力を与えられた教会のモデルを見るのです。この教会こそ、聖霊ご自身が教会の運営とミニストリーを方向づけておられるものです。

初代教会は、どれほど聖霊に依存していたのでしょうか？ 聖霊は以下のように語られました。「『バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい。』と言われた。そこで彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、送り出した。」(使徒 13 章 2—3 節)パウロは聖霊について、以下のような表現を使っています。「聖霊と私たちは……決めました。」(使徒 15 章 28 節)「ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。」(使徒 16 章 7 節)これらの男たちは、聖霊によって導かれ、聖霊によって案内され、聖霊が向かわれる方角を探し求めていたのです。

使徒の働き四章で彼らが厳しい迫害に直面したとき、どのように祈って神の助けと導きを探し求めたかを見ることができます。聖霊が新たに彼らの上に臨み、彼らは出て行って神のことばを大胆に語ったのです。

初代教会は、四つの基本的な機能を果たしていました。使徒の働き二章四二節に「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」と書いてあります。信仰者のつき合いを成長させるには、以上の四つの基本的土台が据えられなければなりません。もし私たちリーダーが人々に向かって、断固として神のことばを実践するようにと促すならば、使徒の教えを教え、キリストのからだにおいて集まり、つき合うことを勧め、パン裂き(聖餐式)に参加することを促し、実際に祈るように指導するのです。そのとき私たちは、神がすべての必要を満たしてくださることを見るのです。

たしかに主は、使徒の働きに登場する教会の必要をすべて満たしていただきました。そして「主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。」(使徒 2 章 47 節)のです。けっして忘れてはならないことは、数を加えるのはあなたの仕事ではないということです。それは主の仕事なのです。

あなたの仕事は群れを養い、世話をして愛し、彼らがよく世話をされているかどうかに関心を払うことです。これは小さな群れであればあるほど当てはまることです。主は言われました。「よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」(マタイ 25 章 21 節)主は、あなたがわずかなものに忠実にならなければ、多くのものをお任せにはなりません。「ああ、千人くらいこの教会にいればいいのに！」とか「五千くらいいいればなあ。」などと思ってはならないのです。あなたの教会にいる、たとえそれが八人であっても十人であっても彼らに仕えるのです。忠実に彼らに仕えなさい。

誠実に彼らを養いなさい。そうすれば、主ご自身が主の目によいと思われることに従って、日々救われるべき人々を加えてくださるでしょう。教会のサイズは、あなたが気にする問題ではありませんし、それから後、どのような状況においてもあなたが気にすることではないのです。

さて、現在出回っているほとんどの「教会〇〇プログラム」を見ると、そのプログラムの目標は教会に人数を加えることであるのがわかります。それらすべての教会成長プログラムやセミナーが、どのように教会に人数を加えるかについての説明を試みているのです。実は、教会を成長させることはとても簡単なことです。あなたは「どのように教会を成長させるか」というセミナーのために二万円の参加費を払う必要はありません。人々の興味を神のことに向けさえすればよいのです。そして、人々の関心を祈りに向けるのです。彼らが互いにつき合うように促し、パン裂き(聖餐式)に参加するように促すのです。そうすれば、主が日々救われるべき人々を群れに加えてくださるでしょう。

私がある教団に属していた頃に行なったことで、もっとも賢いことの一つは、人数を数えることをやめたことです。その教会の廊下の壁には日曜学校の今週の出席率、先週の出席率、そして一年前の出席率を示す表が貼られていたのです。この教会ではいつも「あたま数」が強調されていたのです。人々は常に出席表を気にしながら教会に通っていたのです。「先週の日曜日とくらべてどうだったかな?」「なんで今日の人数は少ないんだろうか?」「昨年と比べてどうだったかな?」「今日、みんなはどこにいるのかな?」常に人々は人数に興味を示しました。人間のあたま数を数える罠に、なんと陥りやすいことでしょう。こんなことはやめましょう! ただそこにいる人々に目を留めて「今日、主は私が仕えるためにこの人たちをここに連れて来られたのだ。」と、明確に理解しましょう。彼らに対してあなたのベストを尽くしましょう。そして心から彼らに仕えましょう。こつこつと仕えるのです。あなたが忠実な世話人であり、そのことが判明するとき、主はもっと多くの人々の世話をし、関心を払い、仕えるために、あなたのところへ連れて来られるでしょう。だから、神があなたのもとに連れて来られた人々に対して誠実でいなさい。

新約聖書の使徒の働きをみると、教会が善意で始めたプログラムに関して問題が起こったことがわかります。ギリシャ文化の影響を受けたやもめたちが、差別を受けたと感じたのです。つまり彼女たちは、ユダヤ文化の影響を強く受けたやもめたちのほうがえこひいきされていると思ったのです。そこで彼女たちは使徒のところに苦情を持って来ました。使徒たちは次のように言いました。「私たちが神のことにあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。」(使徒 6 章 2—4 節)

ということは、初代教会においては、神のことが祈りとともにミニストリーの中で最も大切な働きだったわけです。彼らは神のことが教えること、つき合い(コイノニア=親しい交わり)、パン裂き(聖餐式)、そして祈りに、彼ら自身のすべてを捧げていたのです。「主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。」(使徒 2 章 47 節)教会が、神が願っておられるような姿になると同時に神の願いを行なっているときに、救われる人たちを教会に加えてくださるのです。

使徒の働きの中で、神が教会のために使われた男たちとは、自分自身を主イエス・キリストに

完全に明け渡していた人々でした。彼らは自分の賞賛を求めていたのではなく、イエス・キリストにだけ栄光を帰す人々です。ソロモンの回廊で生まれつき足なえの人が癒され、群衆が彼を見に集まってきたときペテロは言いました。「イスラエル人たち。なぜこのことに驚いているのですか。なぜ、私たちが自分の力とか信仰深さとかによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち、私たちの先祖の神は、そのしもべイエスに栄光をお与えになりました。」(使徒 3 章 12—13 節) ペテロでさえ素晴らしい奇蹟が起こった直後でも、主ご自身の栄光や手柄を横取りすることはしなかったのです。そもそも奇蹟を行なわれた方であるイエス・キリストを人々に指し示して、栄光を帰すべき方に返したのです。

栄光を神にお返しすること自体が初代教会の目的だったのです。神が使われた男たちは、自分自身の栄光を求めていない人々でした。今日、人々は自分が成功して有名になるため、つまり栄光を得たいためにどれだけあくせくしていることでしょうか。この事実が私の心に重くのしかかるのです。彼らはいつでも自分自身にスポットライトが当たるように、またカメラに写るように自分の居場所を移動させるのです。しかし、イエスは自分を高めようとするのであれば、自分を低くしなさいと主張されました。「だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。」(マタイ 23 章 12 節)

イエスのことばに従って神の国のために生きることにしましょう。栄光や賞賛をイエスに返すことに努めなさい。そうすれば主があなたをお使いになるでしょう。私は常日頃から、神に対して私を使い続けてくださるよう祈っています。パウロも同じことを願っていました。コリントにいる信者に向かって、彼は次のように書きました。「私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者(英語では見捨てられた者)になるようなことのないためです。」(I コリント 9 章 27 節)

成功とは、えてして危険なことです。もし神があなたの仕える働きに成功を与え始められたなら、あなたは成功していなかった時期よりも多くの危険を抱えることになります。以前のあなたは、これといって目立たず誰にも認知されていない十名程度の集まりを、どうにか苦勞して成功させようとしていたわけです。そのような状況の中で、あなたはひざまずいて神に助けを求めなければ一歩も進まなかったはずです。あなたが賞賛されるような機会はほとんどありません。しかし、成功が訪れ始めたら本物の危険がミニストリーに訪れるのです。人々があなたに注目し始めるときこそ、いとも簡単に手柄を横取りしたり、賞賛を受けたりする状態に陥りやすいのです。これこそが、超特急の速さで神の油注ぎを失わせる道なのです。聖書に次のように書いてあります。「高く上げること(自分を売り込む＝英語ではプロモーション)は、東からでもなく、西からでもなく、荒野からでもない。それは、神が、さばく方であり、これを低くし、かれを高く上げられるからだ。」(詩篇 75 章 6—7 節) 現在において「出世・昇進」という言葉は、あたかもゲームのような響きすらしてきます。多くの牧師は彼らの時間とエネルギーを、教会や彼ら自身の宣伝のために費やしているように思えます。しかし本当のプロモーションは神ご自身から来るのです。だから気をつけてください。

新約聖書の使徒の働きは、私たちに教会としての模範を示してくれます。この教会は聖霊によって導かれ、みことばを教え、一致を展開させる教会です。それこそがフェローシップであり、コイノニア(信仰者の親しい交わり)なのです。この教会は、パン裂き(聖餐式)をとともに受け、一緒に

祈る教会です。その他のことは神の働きであり、神ご自身がなさることです。神が、日々教会に救われる人々を加えてくださるのです。

第二章 教会を治める制度

「また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。」(エペソ 1 章 22 節)

私たちが新約聖書を読むとき、教会を治める制度については明確な定義は見当たりません。それでも新旧約聖書の中には、三種類の制度が登場します。三つのうち二つは新約聖書の中に登場します。そして残りの一つは、教会の歴史の中で発展してきたものです。第一の統治制度は、監督制、言い換えると全体を見守る者によって治められるものです。ギリシャ語の【エписコポス】がそれに当たります。テモテへの手紙第一、三章一節の中でパウロは以下のように書いています。「『人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである。』」といことばは真実です。」

テモテの手紙には監督としての資質が詳しく書かれています。「ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう。——また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。」(1 テモテ 3 章 2—7 節)

第二の統治制度は、神が複数のリーダーたちに与えられた賜物によって機能するもので、ギリシャ語で【プレシビテロス(長老制)】と言います。使徒の働き十四章二三節には次のように書いてあります。「また、彼らのために教会ごとに長老たちを選び、断食をして祈って後、彼らをその信じていた主にゆだねた。」

新約聖書は、私たちに監督制の確立と長老たちの任命を明確に教えています。これら二つの教会を治める制度は、それぞれの性格自体の相違のゆえに対立しやすいように思えます。監督によって治められる教会がいいのか？ それとも長老たちから構成される役員会によって治められる教会がいいのか？ 監督制かそれとも長老制か？ この二種類の制度についてさまざまな論議が何度も繰り返されてきたので、現在両サイドを代表する教団が存在するほどです。エписコパル(監督制=聖公会)は監督制を採用しています。この教団は主教によって治められ、またプレシビテリアン(長老派教会)は長老たちから構成される役員会によって治められています。これら両教団が存在するということは、教会を治める制度について、決定的に正しい教えはないことを明らかにしています。これら両サイドの教団は、それぞれの観点から妥当な主張をしています。

多くの時代を経て、第三の統治制度が現れました。それは会衆制度というものです。私は会衆制度が選択肢の中に含まれるとは信じていません。なぜなら聖書のどこを開いても、会衆が正し

かったという事例はひとつも見当たらないからです。会衆は神の考えと願いに従わず、いつも他国のようにわれわれを治める王が欲しいと、頑固に要求したのではなかったでしょうか。私は聖書の中に、会衆の決定により、物事がうまく機能した事例を見つけることができません。だからといって、聖書の中で会衆が主導権をとろうと企てたケースがないわけではありません。出エジプト記十六章二節を見ると「そのとき、イスラエル人の全会衆は、この荒野でモーセとアロンにつぶやいた。」と書いてありますし、民数記十四章一節から三節にかけて「全会衆は大声をあげて叫び、民はその夜、泣き明かした。イスラエル人はみな、モーセとアロンにつぶやき、全会衆は彼らに言った。『私たちはエジプトの地で死んでいたらよかったのに。できれば、この荒野で死んだほうがましだ。なぜ主は、私たちをこの地に導いて来て、剣で倒そうとされるのか。私たちの妻子は、さらわれてしまうのに。エジプトに帰ったほうが、私たちにとって良くはないか。』」とも書いてあります。それに対して民数記十四章二七節を見ると、神はモーセに向かって「いつまでこの悪い会衆は、わたしにつぶやいているのか。わたしはイスラエル人が、わたしにつぶやいているつぶやきを、もう聞いている。」と言われたのです。ですから会衆の多数決によってグループの方針が決定される教会の牧師は、悩みの種に事欠くことはありません。会衆制のもとで仕える牧師は、つぶやきと反抗的な態度だけを会衆の中に発見することでしょう。

以上三種類の教会を治める体制を、今日私たちは見ることができます。繰り返して述べると監督制、長老制、会衆制の三つになります。

一方で、旧約聖書の中に神の民を治めるモデルが存在します。この体制は初期イスラエルの歴史の中で神が確立されたものです。それは、神によって人々が治められる体制です。初期イスラエルの歴史において、イスラエル民族には、神によって治められる体制が与えられていたのです。

しかし、この神が治められる体制にも終わりを告げるときが来ました。それは会衆が神によって治められることにうんざりして、神に対して代わりに王制を要求したからです。民は言いました。「私たちは、私たちを治める王が欲しい。周辺諸国並みの体制を整えたい。」サムエルは、民が王制を要求するのを聞いてがっかりしました。

さて、神ご自身が治める体制のモデルを見てみましょう。神が治める体制のもとには、モーセという人間がいました。モーセが神のもとに、採用すべき指針と方向性を尋ねに行ったのです。モーセはこの地上においてイスラエルの民のリーダーでした。彼は、神からイスラエルが採用すべき指針や方向性や法律やルールを受け取る者として認められていました。彼は、民からは民と神との関係をつなぐ者と見なされていました。あるとき民が言いました。「私たちは神に近づくのが怖いんです。神はすさまじくて恐ろしそうですから。私たちは火と雷をこの目で見ました。ですから、あなたが行って神と話をして神が何と言われたかを私たちに教えてください。そしたら神が言われたことに従います。それと言にくいことですが……、やはり私たちは一緒に行くのは遠慮しておきます。あなただけで行ってください。」以上のやり取りから、民はモーセが神ご自身によって導かれていたことを、認めていたことがわかります。そこでモーセ一人が神に近づくことになり、神から受けるものを受けて民のところに戻って、何と言われたかを分かち合ったのです。

モーセのもとで、民衆の個人的な問題についての要求は驚くほどありました。人々は彼に、自

分たちの抱えている問題を相談するために毎日順番に並んだのですが、その列の最後に立った人がはるか彼方に見えるといった具合でした。彼らはどんなに小さな問題であっても、モーセのもとに相談にやって来ました。これは問題を聞いたモーセが、訴えた者と訴えられた相手との間に入ってどのように解決するかを示すためでした。「彼らに俺の鋤を貸してやったのに、返してくれないんだ。」といった調子で、この状況が朝から晩まで続いたのです。モーセの舅であるイテロはこの様子を見て言いました。「ちょっと、息子よ。こんなことを続けていたらおまえさんが倒れてしまうよ。これは、おまえさんだけの手には負えないことだ。果てしなく並んだ人々の問題を解決するなんて……、これだけ多くの人々の面倒を見ることはおまえさんには無理だよ。」そこで主はモーセに、イスラエルの民から七十名の長老たちを選び、会見の天幕という場所に連れてくるように言われました。神は、この七十名の上にモーセに与えた神の霊と同じ霊を注いだのです。それはこの七十名が、膨大な数のイスラエル民衆が持って来る個人的な問題に解決策を示し、イスラエルを治めることができるようにするためでした。もし民が持ってきた問題が長老の手に負えないときには、彼らはモーセのもとにその問題を持って行きました。そしてモーセは神のもとに行き、問題の核心を明らかにしていただくのでした。(出エジプト記 18 章 13—27 節参照)

以上の長老たちに加えてモーセを支えていたアロンと祭司たちがいました。彼らはイスラエル民族の霊的な面(神と民との関係)、例えばいけにえを捧げることやその儀式の準備などを監督していました。七十人の長老たちとアロンの下に、イスラエルの会衆は位置していたのです。これが神がイスラエル国家に確立された人々を治める制度です。

今日、以上の制度を一部変更した組織構造が教会の組織の中に見られます。私たちはイエス・キリストを教会のからだの頭として位置づけています。教会はキリストのもので、彼こそがすべての権限を持ち、責任を負っておられるのです。ですからモーセが神に近づいたように、私たち牧師は、キリストに近づいて主が示す方向性や指導を受け取る必要があります。主が支配しておられることを人々がわかる方法で、私たち牧師は、常日頃からイエスとの接触を頻繁に重ねながら教会を導いていかなければなりません。私たちがそのようにしているなら、たとえ問題が起きたとしても「それではその問題のために祈ります。」とか「この件に関して主の知恵を求めてみます。」または「ともに主の導きを探し求めてみましょう。」と言えるのです。私たちもモーセのように、教会の中に長老たちから構成される役員会を持っています。その長老たちはまず私たちとともに祈るために、そして教会に対する主の導きを探し求めるために存在しています。

さて、牧師であるあなたに注意して欲しいことがあります。それは、あなたの探し求める長老が祈りの人でなければならないということです。そして、長老候補者はあなた自身が教会の牧師として神から油注がれ、任命されたことを認めている人でなければならない。パウロは、テモテに「だれにでも軽々しく按手(指名)をしてはいけません。」(I テモテ 5 章 22 節)と言いました。権威と権限を行使できるポジションを与える前に、できる限りその人を正確に知るべきです。

たとえばこれは結婚に似ています。結婚してしばらく経たないと、あなたの妻の本当の姿を知ることはないのです。多くの場合、結婚した後に驚かされるのがたくさん出てきます。また、あなたが覚えておかなければならないのは、教会員の数が増え始めて教会が力を持つとき、つまりあなたが成功し始めたときに、得てして問題が起こるということです。権力に魅力を感じる多くの人々

がいます。彼らが銀行に多額の献金が預金されているのを知ったとき、教会への発言権と影響力を獲得しようと狙い始めるのです。

あなたは、神と調和している人を長老としなければなりません。またその人は、神があなたを呼び出して、その教会の牧師として任命されたことに気づくことができる人でなければなりません。それらの男性は、神があなたを導いておられることに関して、その神の導きを教会の中に浸透させるために、牧師であるあなたを支えて働く人です。優れた役員会は、神からあなたに与えられたミニストリーにとって素晴らしい財産の一つになるでしょう。私は神に感謝しています。ここカルバリー・チャペル・コスタメサでは、すばらしい役員男性たちに恵まれています。私たちは役員男性を、土曜の夜の祈り会や徹夜祈禱会の中から探しています。私たちが探しているのは祈りの人です。私たちが求めているのは、神と神の意志を探し求めている男性たちです。そして神は、私たちにそのような男性たちを与えて祝福してくださいました。私は神に感謝しています。

さて、本物の長老はただ「はいはい」と言うイエスマンではありません。しかし彼らは、聖霊に自分の心を明け渡している人でなければなりません。彼らは問題の衝撃を和らげ、問題が深刻になるのを防ぐ役割を私とともに担ってくれているのです。彼らの仕事は、会衆と広く接点を持つことです。会衆はあらゆる問題を長老たちに持って行くのです。多くの場合、長老たちは素朴に「これがこの教会の方針です。ですから私たちはこのようにこのことを行います。」と対応します。長老の対応は、これ以上の線を越えることはありません。ときどき、長老たちが私たちとのミーティングに質問を整理して持ってきます。例えば「この問題を私に持ってきた人がいるのですが、あなたはどう思いますか？」という質問です。私は場合によってはそのような問題に「うーん……。何も思いが浮かばないなあ。主がどのように考えておられるかを求めてみましょう。」と答えるのです。しかし多くの場合、彼ら自身でその問題に対処してもらうことにしています。

私がまだ若い牧師としてアリゾナのツーソンにいた頃(私が二番目に牧会した教会)、定例の七月四日(アメリカ合衆国独立記念日)のピクニックをレモン山で開くことになりました。さて七月のツーソンは三十度を越える暑さが続きます。ですからレモン山に登れば暑さを避けることができるわけです。レモン山の上にある州立公園はピクニックには最高の場所です。トイレ、飲み水、テーブルに子どもの遊び場とすべて完備されています。教会としてのピクニックを開くにも最適の場所です。私たちは、例年そこで互いに素晴らしい交わりを過ごしました。さてある夏の定例ピクニックのことです。ピクニックの日が近づいた頃にある教会員が言いました。

「私が所有している一エーカー(約一二四坪)の土地がレモン山の上にあるんですが……。州立公園で世の中の人たちと混ざってピクニックするよりも、われわれだけでその土地でピクニックができたら素晴らしいと思うんです。」その教会員に対して私たちは次の質問をしました。「飲み水の設備はありますか？」彼は「いいえ」と答えたので、続いて「トイレはありますか？」と聞くと、それに対しても「いいえ、ただ一エーカーの土地があるだけです。」と言うのです。実は彼の土地は州立公園からさらに八キロメートル離れた場所にあったのです。それでも彼は黙ることなく「断食するのはどうだろう。」と逆に提案してきたのです。さて、人々の前でこのような霊的な提案を持ち出され、これまた霊的に誤解を与えずに断ることができる牧師がいるでしょうか？

教会のある人々はこの提案について話し合った結果、日帰り断食祈禱ピクニックのアイデアに

喜んで賛同しました。「その一エーカーの土地は、私たちだけの貸し切り状態で使えるんだ。これは素晴らしいときとなるに違いない。」といった調子です。

しかし教会の中の違うグループの人々が言いました。「飲み水の設備がないところに私たちの子どもを連れて行くことはできない。それに、いったい誰が子どもたちの世話をしてくれるというんだ。われわれ大人が断食祈禱しているときに、子どもたちは何をしていればいいんだ？ トイレすらないときている。もしあなた方がそこに行くのならわれわれは行かないことにする。」彼らは本当の霊的状态を露呈しました。このように会衆の中で鋭い意見の対立が起こったのです。

恒例の素晴らしい夏のピクニックは、この対立によって沈没しかかかっていました。両サイドの人々が私のもとにやって来て「チャック、独立記念日のピクニックはどこに行くんですか？」と言うのです。そこで私は、私よりはるかに多くの経験がおりになる、主からいただいた知恵によって「この件は役員会のメンバーによって決めてもらいます。」と言いました。役員会では、満場一致で州立公園に行くことに決まりました。その決議の結果を持って人々のところに行き「役員会は州立公園でピクニックを開くべきだと決定しました。」と伝えました。だからこそ、私は「断食祈禱会を開こう」と主張した霊的なグループに向かって「とてもいいアイデアだと思うよ。一日かけて断食して祈るのは素晴らしいだろうね。いつか私たちだけで断食と祈りに行けると思う。けれどもピクニックに関しては役員会のメンバーは州立公園に行くのがベストだと思ったみたいだね。」と言うことができたのです。

この件に関しては役員会のメンバーが決めたので、私は中立としてどちらのサイドに対しても仕えることができたのです。この場合、役員会が対立の衝撃を和らげる役割を負ったのです。しかも素晴らしい緩衝機能を果たしたのです。なぜなら人々は、牧師であるあなたに対立することもなく「これは牧師が決めたことであって私はこの決定には賛成しない。」と言うことはできないからです。役員会が決めたことによって、彼らが私にとってクッションの役割となってくれたのです。

神が示される「教会を治める制度」のモデルは、まず牧師が主によって支配されるものです。そして会衆は、牧師は教会をリードするために、神ご自身が油を注いで任命されたことを認める必要があります。それに長老たちが加わって初めて教会を指導し、方向性を与えるものだと私は信じています。さらに以上の制度を十分に機能させるために、神から任命された牧師を手伝う牧師たちがいるのです。彼らは、日常における人々の霊的な必要に仕えるために存在します。以上のように素晴らしい教会の制度が構成されているときには、牧師のあなたがお雇い牧師になることはありません。しかし教会が長老派のような教会組織によって運営され、役員会が支配しているような教会において、牧師がお雇いの立場になることは非常に危険なことです。その牧師は、役員会・評議会(セッション)によって雇われたのですから、同じやり方で役員会・評議会によって解雇されることもあり得るのです。以上のようなやり方のもとでは、ただのお雇い牧師になってしまうのです。

これは会衆制度のもとでも同様に起こることです。牧師が教会のかしらである主ご自身から任命されたのではなく、むしろ会衆によって雇われるのです。からだのかしらであるイエス・キリストご自身から指名されたのではなく、その代わりに彼は選挙により選出されたり、役員会や評議会によって選ばれたり、会衆の「シャンシャン総会」によって選ばれたりするのです。ここでも同じこと

が繰り返されて、その牧師はお雇いになるのです。私はだれでもお雇いの立場では、本当に良い働きはできないと思います。

「だれもが執事になるべきだ。」これが私の個人的な信念です。執事にとって重要な働きとは「助けること」です。彼らは教会の施設の管理をするためにいます。また彼らは会衆の必要に応え、病人を助けるためにいます。最も悪い行動は、ある人々に対して、人々の中に上下関係を意識させるような役職名を発行し始めることです。これは危険なことです。

あらゆる教会のリーダーシップの霊的な資格について、次のようなことばがあります。ユダは祝福の部分でこう言いました。「あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、……」(ユダ 24 節) 私がキリスト・イエスの中にとどまるときのみ非難されることはないのです。それでも神の栄光に照らし合わせると、私たちすべての者が罪を犯した者であり、神の栄光の基準には到底達することのできない者であることに変わりありません。もしだれでも「自分はミニストリーにとってふさわしくない」と気がついたのなら、パウロが言ったことが理解できるはずです。「すべての聖徒たちのうちで一番小さな私に、この恵みが与えられたのは、私がキリストの測りがたい富を異邦人に宣べ伝え、……」(エペソ 3 章 8 節) つまり彼はこう言っているのです。「私はすべての聖徒(信仰者)の中で最も小さな者だ。本当は私には使徒と呼ばれる価値などない。なぜなら、私は神の教会を迫害したからだ。」彼は他の手紙の中でも「この恵みは罪人のかしらである私に与えられたのです。」と言っています。パウロは、彼の立場(使徒)はただ神の恵みによって与えられたことに気がついていたのです。彼がコリント人への手紙第一、十五章十節で「神の恵みによって、私は今の私になりました。」と言った通りです。彼は、キリストの中にとどまりさえすれば非難されることがないことに、本当に気がついていたのです。ということは、教会における牧師やリーダーの最も大切な資格は、キリストの中にとどまることです。この状態にあるなら、私たちは非難されることはないのです。

しかし、もしある人がキリストにとどまっていなかったら、またそれとは逆に肉によって歩んでいるなら、彼は監督の立場にとどまることはできません。肉によって歩むことは、そのまま実際の日常生活に反映されます。主のために効果的に仕えている者を、サタンは破壊するために探し求めています。私は、私を含めてすべての者がいつでもつまずく可能性があると思っています。イエスがペテロに「シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」(ルカ 22 章 31—32 節)と言われた通りです。

ペテロはそれに対して「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」(マタイ 26 章 33 節)と答えました。つまり彼はこう言っているのです。「みなの方があなたを見捨てても、私は決してあなたを見捨てません。私はあなたのためなら死ねます。」彼の自信は、すべての面において聖霊に依存しなければならないと気づくために、こっぴどみに粉砕される必要がありました。それは彼の人生において避けては通れないものでした。それは彼だけではなく、私たちすべての者が取り扱われなければならないものです。いまだに自分を信頼するという分野の問題が取り扱われていないなら、主はゆっくりとですが、はっきりその問題を見せてくださいます。

私たちの内側にあるものを絞り出しても、私たち自身には何ひとつできないことを教えてください。パウロが「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。」(ローマ7章18節)と言った通りです。ですから主は、私たちだけは例外だと思ったときに、あなたがつまづくことをいつでもお許しになります。このレッスンは、すべての面で主を信頼することを教えるためにあるのです。

私たちが肉の思いの領域に一步踏み出して、肉の思いに従って生活することを決めるとき(自覚・無自覚を問わず)、たとえそれがどんな奉仕の立場であっても私たちはそこから身を引かなければなりません。しかしもう一方で「非難することがない」「欠点がない」という言葉を文字通りに受け取るなら、すべての者が自分の荷物をまとめて車の営業販売か何かに転職するしかありません。私は悔い改めることが、先に述べた両者の矛盾を解く鍵だと信じています。真実なる悔い改めの後には赦しがあります。そして回復が始まるのです。しかし悔い改めとは、本当に罪(的外れ)から離れ、以前の生き方を変えるほどの真実な悔い改めでなければならないのです。

私が観察するところ、長老会(セッション)によって物事が決まる教会は、多くの場合、本当に必要な牧師を捜しているのではなく、ただのお雇い牧師を捜しているのが実情です。彼らが抱えている牧師についてのイメージとは次のようなものです。「牧師はわれわれのテンポに合わせて踊れる人……われわれが彼を操れて、われわれに応答している限り、まあ、あなたはよい部類の雇人でしょう。しかし自分だけで何かを始めてみなさい……。そうすると話は変わってくると思ってください。」

私たちがカルバリー・チャペルという教会に来る前のことです。私はコロナという町で、ある家庭集会から成長して出来上がった単立教会を始めました。その家庭集会に関わっていた男性たちが「コロナ・クリスチャン協会」という法人を設立しました。彼らが法人をつくり、人々が献金を持ち寄って基金を築きました。それは主に、私がコロナでラジオ番組を始めるためでした。設立した人々は、その法人の役員になりました。そこで、私たちがラジオ番組を始めるやいなや大勢の人々が番組を聞くところとなったのです。

私が望んでいたことは、私が仕えていた教団を去って単立教会として独立することでした。そこで私は彼らの勧めに従って、実際にコロナで教会を始めたのでした。私たちはコロナ・クリスチャン・センターを始めたのです。それは神の祝福によって出来たことです。私はそれまでと変わらずニューポート・ビーチに住んでいたので、日曜日になるとコロナまで車で通っていました。

私たち家族は日曜日をまる一日コロナで過ごし、夜になってから帰宅するといった調子でした。さて、ある日曜日のことです。私たちは間借りしていたアメリカ行政会館のホールにある椅子を、一列ごとに並べる代わりに丸く円を描くように並べたのです。そこは講壇も取り除いたので、いくつもの椅子によって描かれた大きな円があるだけでした。さて、人々がホールに入って来て椅子に座ると、まるで家庭集会にいるような雰囲気になりました。決まり切ったようにピアノやオルガンに合わせて、歌集から三つの賛美歌を歌うのではなく、私たちは感じるままに歌いました。私が伴奏なしのコーラスをリードしたのです。その後、私たちは導かれるままに祈り始めたのです。その祈りは互いの問題を持ち出して、円を描くように座った人々がそのために祈るといった具合でした。それから私は打ち解けた雰囲気の中、座ったまま聖書を教えたのです。

私はこの集会在聖霊に導かれていたこと、また非常に力強かったことを感じました。何と云えばいいのか……胸がわくわくするような感じでした。その晩、それまで一度も人前で祈ったことがない人々がそこでは導かれて祈っていたのです。多くの人々の心が触れられ、動かされました。しかし役員会のメンバーは、その集会后に特別役員会議を招集したのです。翌朝、彼らは私を呼び出していったい何を考えてやったのか、二度とあのような集会を開いて欲しくないと言ってきたのです。そのとき私はこう思いました。「やれやれ、こんどこそ一生を捧げてここで仕えられると思っていたのに、そうはならないみたいだな。こんな制約のもとではやれない。どうしても私は聖霊の導きに心を開かなければならない。」

そこで私たちがカルバリー・チャペルに来て、教会の内規を作る段階になったとき、長老によって定められる制度は作りませんでした。その教会制度に関する内規は監督制度に近い形態になりました。神が考えておられる教会のモデルは、まず神によって支配された牧師が長老たちに支えられ、イエス・キリストご自身の考えと意志が何であるかを理解することにあると、私たちは信じています。また牧師を手伝う牧師たち(副牧師・伝道師・スタッフ・働き人等)は、以上の趣旨を実行するために働くのです。

第三章 聖霊によって力を受ける

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」(使徒 1 章 8 節)

つぎにカルバリー・チャペルを他の教会と明確に区別できるものは、聖霊に関する私たちの立場です。私たち信仰者はその歩みの中で、聖霊によって力を受ける体験をすると信じています。その体験は、人が回心したときに聖霊が内側に住まわれることとは明らかに異なった体験を指します。パウロがエペソの人々に、彼らが信じたとき、または信じた後に「聖霊を受けましたか？」と聞きました。どの訳の聖書にも、明確に聖霊による体験があること、そしてその体験は救いにおけるものとは明らかに異なることを教えています。

ピリポがサマリア地方にキリストを宣べ伝えに行ったとき、多くの人々が信じて洗礼を受けました。エルサレムの教会は、サマリア人が福音を受け入れたことを聞くとペテロとヨハネを送り出しました。「ふたりは下って行って、人々が聖霊を受けるように祈った。彼らは主イエスの御名によってバプテスマを受けていただけで、聖霊がまだだれにも下っておられなかったからである。」(使徒 8 章 15—16 節)ここでも、聖霊の体験は回心とは明らかに区別されるものとして記されています。

使徒の働き二章で人々は言いました。「『兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか。』』と言った。そこでペテロは彼らに答えた。「『悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。』』(同 2 章 37—38 節)また、パウロはダマスコに行く途中で回心しました。しかし、アナニヤが来て彼の上に手を置いたのは、パウロの目が見えるようになって聖霊を受けるためでした。

私たちは聖霊によって力を受ける体験があること、またそれは回心する体験とは区別されるべきものであることを信じています。聖霊と信仰者の関係には三種類の関わり方があると認められ

ます。それぞれの関わり方をギリシャ語では【para(パラ)】、【en(エン)】、【epi(エピ)】と表わしています。

ヨハネの福音書十四章でイエスは弟子たちに言われました。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」(ヨハネ 14章 16—17 節)この中で「ともに」という言葉が【para(パラ)】にあたります。これは「そばに」という関係のあり方を示しています。そして「うちに」という言葉が【en(エン)】、これは英語の【in】に相当します。「あなたがたのうち(内)におられる」の「内」という意味です。

私たちは、聖霊は回心よりも前に人とともにいてくださると信じています。聖霊がその人の罪を示すのと同時に、罪に対する唯一の解決はイエス・キリストにあることを理解できるようにして下さるのです。いつも聖霊は「罪」と「義」と「やがて来るさばき」がいったい何であるかを明らかにしてください。また私たちは聖霊を受けるそのときに、イエスがその人の罪を取り去ってくださると信じています。そして誰でも自分の人生を支配しコントロールしていただくために、イエスを心の中に招くとき、聖霊がその人の「内」に住まわれると信じています。聖霊はキリストのもとに連れて行くために私たちとともにいてくださり、私たちがキリストのもとに来ると、私たちの内に住み始められるのです。

パウロは言いました。「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。」(I コリント 6 章 19—20 節)またパウロはエペソの人々に向かって言いました。「また、酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。」(エペソ 5 章 18 節)ですから、すべての新しく生まれた神の子は、その人の内に聖霊が住んでおられると信じています。新しく生まれた者は、みことばの指示に従って自分の肉体を聖霊によってコントロールしていただくために、絶えず聖霊に満たされるために、自らを明け渡します。

また私たちは聖霊が信仰者のいのちの中に、罪と肉の欲求とに打ち勝つ力を与えてくださると信じています。私たちは聖霊によって歩むようにと教えられているのであって、肉の欲求のままに歩めとは教えられていません。だれでも聖霊によって歩むなら、肉の欲求を満足させることはないのです。聖霊は肉の欲求に打ち勝つ力であり、私たちの墮落に傾く本性に打ち勝つ力を与えてくださる方なのです。聖霊は私たちのいのちの中にある力、私たちがキリストの御姿に一致させる力なのです。「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」(II コリント 3 章

18 節)私たちは、イエスを受け入れるときに、「内」に来られる聖霊のダイナミックな力を見るのです。聖霊は私たちの内側で、私たちがイエス・キリストの御姿へと変わるために働いておられるのです。

聖霊には上に記した二つの関わり方とは明らかに違う三つ目の関わり方があると、私たちは信じています。使徒の働き一章八節に次のような約束があります。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。」この関係のあり方は聖霊があなたの「上に」来られるときのことを指し示しています。【epi(エピ)】というギリシャ語は「上に」とか「覆いかぶさる」という意味です。私は「溢れ出る」という訳のほうがいいと思います。なぜなら三つ目の聖霊による体験は、聖霊ご自身が私たちの外に向かって流れ出て行かれるものだからです。私たちはもはや聖霊によって満たされるだけの器ではなく、周りの世界に触れるために外側に向かって流れ出る水路となるのです。これこそが聖霊の目的であると信じます。前に述べた、私を変え、キリストの御姿へと形造る聖霊の働きはほかでもない私のためにあります。「上に来られる」という体験は、具体的な結果を生み出す聖霊のダイナミックな力を私たちに与え、私たちを力強いキリストの証人とするのです。これこそが神の御計画なのです。聖霊が私の外側に向かって流れるとき、私は神の道具となり、神ご自身が私を通して私の周りの世界に触れることができるのです。私から、ダイナミックな聖霊の力が流れ出て行くのです。

聖書にイエスが弟子たちに息を吹きかけて「聖霊を受けなさい。」(ヨハネ 20 章 22 節)と言われた箇所を見つけることができます。私はイエスが「聖霊を受けなさい。」と言われたときに、彼らは聖霊を受けたと信じています。

ある人々は「それはただの象徴にすぎないんだ。」と言い放ちます。いったい聖書のどこに「これは象徴にすぎない。」と書かれているのか示して欲しいものです！なぜヨハネは「イエスはここではただ象徴的なことをなされた。」と言わなかったのでしょうか？聖書のどこにもそれが象徴的な出来事だと解釈できる箇所を見つけることはできません。弟子たちがイエスの息を受けた瞬間に神の霊によって生まれ変わったのだと私は信じています。

そしてイエスは弟子たちに向かって「父が約束されたものを受けるとまでエルサレムに留まっていなさい。」と言われました。「ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」(使徒 1 章 5 節)主は次のようにも言われました。「しかし、聖霊があなたがたの上に【epi(エピ)】臨まれるとき、あなたがたは力(ダイナマイトの語源デュミナス)を受けます。」(使徒 1 章 8 節)彼らが効果的に主に仕えるためには聖霊が溢れ流れることが必要だったのです。

以上の体験こそヨハネの福音書七章で、イエスが仮庵の祭りの大いなる日に言われた内容を指していると信じます。その日、イエスは立ち上がって大きな声で叫びました。「だれでも渴しているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」(ヨハネ 7 章 37—38 節)すぐ後にヨハネはコメントを書いています。「これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ注がれていなかったからである。」(同 7 章 39 節)先に述べた「上に臨まれる」という体験こそが「聖霊のバプテスマ」「聖霊が溢れ流れること」を指しているのです。聖霊が溢れ流れるとは、どのような体験を指すのでしょうか？それは生ける水が激流となって、信仰者自身のいのちから流れ出るようなものです。

一方では聖霊によって満たされる体験があり、もう一方では聖霊が溢れ流れる体験があるので

す。聖霊を受ける体験も力強くダイナミックなものです。私という存在を通して聖霊が溢れ流れ、周囲の人々に触れ、変化を与えるという体験こそなくてはならないものです。

イエスは聖霊に関して三つの約束をされました。聖霊は「あなたとともにおられる」「あなたの中に住まれる」「あなたの上にあなたを覆いに来られるときにあなたは力を受ける」ということ——つまり聖霊は、私たちが回心する前は私たちのすぐ横におられるのです。聖霊ご自身が罪について、義について、さばきについてのイメージの誤りを認めさせます。あなたの罪を指し示すのです。あなたをイエス・キリストに引き寄せ、イエス以外に罪を解決してくださる方はいないとはっきりと示してくださるのです。あなたが心を開くのであれば、聖霊があなたの内側に住まれるのです。内側に住まれた聖霊があなたをイエス・キリストの御姿へと近づけるために力強く働かれるのです。クリスチャンとしての生き方を助け、キリストの御姿に近づくことを助けられるのです。あなたにはできないことをしてくださるのです。

パウロは次のように言いました。「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」(Ⅱコリント3章18節)また彼はこのようにも言いました。「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」(Ⅰコリント6章19—20節)「救い」という神の働きによって、私たちのからだは神の神殿になったのです。聖霊は私の内側に住まれ、イエス・キリストの御姿に達するまで変えてくださる力があるのです。

主の願いは、私の人生を通して主が流れ出ることです。水がコップに注がれることと、コップから溢れ出ることは区別する必要があります。つまり聖霊があなたの内側に注がれることと、溢れ出るようになることは区別されるのです。後者の体験は、ミニストリーのために不可欠な作用を指します。イエスの弟子たちでさえ聖霊の力を受けるまで、ミニストリーに関わることを許されませんでした。「彼らといっしょにいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。『エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。』」(使徒1章4節)父なる神の約束とは、聖霊の大きな力を指しているのです。これは、【epi(エピ)体験】、つまり「上に臨まれる」という体験なのです。

この体験は通常「救い」とは区別されます。しかし救いと同時に起こることもあり得るのです。例えばコルネリオたちの場合がそうです。ペテロが語っている最中に聖霊が彼らの上【epi(エピ)】に臨み、彼らは異言を語り始めました。使徒たちは「神が、コルネリオたち(異邦人)に聖霊を注がれたのだから……。」と言って水で彼らに洗礼を受けさせました。(使徒10章参照)

ですから、回心して聖霊が内側に住む体験とは区別される聖霊体験があると、私たちは信じているのです。ある人々はこの体験を「聖霊のバプテスマ」と呼び、またある人々は「聖霊によって満たされる体験」と呼びます。聖霊が溢れ出る体験には違いありません。あなたは、コップを水で満たすことができます。あなたが水を注ぎ続けると水は溢れ出るのです。溢れ出る体験は、満たされるだけの体験とは異なります。溢れ出るのは聖霊ご自身です。人々は「聖霊の賜物」と呼び、また「聖霊の力の体験」とも言います。何と呼ぶかは、さほど大切なことではありません。重要なことは、それがあなたの内側にあるかということです。私たちは神学的な名称について議論することもでき

ますが、この体験をことばで表すなら「私たちの内側の最も深いところから、生ける水が激流のごとく外側に向かってほとぼしる」といった表現になります。つまり、この体験を何と呼ぼうとそんなことは取るに足らないことです。最も大切なことはミニストリーになくなくてはならない力の体験についての質問です。素朴に答えてみてください。「あなたは、それを持っているでしょうか？」

第四章 神のやり方で教会を建て上げる

『『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』と万軍の主は仰せられる。』(ゼカリヤ 4 章 6 節)

つぎにカルバリー・チャペルを他の教会と明確に区別できるものは、カジュアルなスタイルです。私たちは、霊的に過度で上げさなヤラセには巻き込まれないようにしています。肉の欲に訴えて人々を過度に扇動したり、会衆の中で威勢よく叫んだりもしません。私は主イエス・キリストと聖霊がすべての根幹になると信じています。私たちは「もし主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなし」ということを信じています。ですから私たちが感情を煽ったり、プレッシャーをかけたとしても何も達成することはできないのです。私たちは素朴に聖霊の働きと、ご自分の教会を建てると言われたイエス・キリストに信頼を置いているのです。

もし私たちが教会は主の教会であること、主が教会を建てられること、そして主が御業を成し遂げられることに完全に信頼を置くのであれば、私たちがやるべきことはただ主を信頼し続けることです。私はただ素朴に主の働きを見届けるだけです。そうすることによって余計なプレッシャーから解放されます。浮き足立って何かを始めたり、不健全な重圧に苦しむこともありません。なぜなら神の御業が達成されるのは私の責任ではないからです。繰り返しますが、これは主の教会なのです。以上のことはとても大切だと信じています。もしあなたが自分自身で教会を建て上げる負担と重圧を背負うことになれば、その途端に、それは自分にとっては重すぎると気がつくのです。そして、あなたは常に自分で企画を考え出し、自分自身の力で人を奮い立たせ、その結果、気がついたときには無理矢理に人々を操作している自分を見出すのです。これは、カルバリー・チャペルのスタイルではありません。

一九六九年のことです。私たちは教会があった所から近いサンフラワー通りとグリーンビル通りが交差する場所に、一エーカー(約一二二四坪)の土地を購入しました。以前、そこには古い学校がありました。私たちは校舎を解体して、その建材で小さな教会堂を造りました。古い建材を利用したので、椅子までついて四万ドルで会堂を建築することができました。二年も経つと、その会堂は私たちには狭くなりました。そこで毎日曜日には三回の礼拝をするようになりました。

会堂の外側にある中庭には五百席分の椅子を並べました。人々は駐車する場所を求めて、数百メートル離れたLAタイムス社のビルから、さらに数百メートル向こうのフェアビュー通りに至るまで、路上駐車するありさまでした。私たちは、この時点でどうにかしなければならなかったと思っていました。

ちょうどその頃、現在のカルバリー・チャペルの所在地が、一区画まるごと売りに出されています。私たちの教会に、不動産業を営んでいた男性がいました。彼はこの十一エーカー(約一万三

千五百坪)の土地を購入するために、共同購入を希望する参加者を募りました。彼らの計画では、購入したらすぐに転売して利ざやを稼ぐつもりでした。それは投機目的の購入でした。

一方、彼らは土地の利用方法をいくつか企画していましたが、サンタアナ市当局は、その土地利用に関する提案をすべて却下したのです。彼らには、この土地の代金三十五万ドルの支払いの期日が迫っていました。しかし彼らは、この土地の所有者である女性に、毎月払っていた土地購入代金の利息すら払えなくなり、その土地の購入資格を失ったのでした。

その不動産業者の彼が私のところにやって来て、教会でその土地を購入するように勧めたのです。私の反応は「十一エーカー(約一万三千五百坪)の土地をどうしろって言うんだね？」というものでした。それに対して彼は「購入した後に、いつでも半分の土地は売却できるから大丈夫です。」と言うのです。すると、私たちの集まりに来る別の男性が「私たちは、あの土地を三十万ドルで購入することができると思う。」と言うのでした。私は「そんなのは、ばかっている。彼女が三十万ドルでその土地を手放すわけがないよ。だって、彼女に提示した三十五万ドルのプロジェクトが流れたばかりじゃないか。なんでその彼女が、私たちに三十万ドルでその土地を売却しなければならないんだろう？」すると、彼は言いました。「それがねえ、私が聞いたところによると、彼女は購入希望者たちが支払っていた利息を使って、物件にかかる税金を納めていたらしいんだ。彼らが利息を支払えなくなったので、彼女も税金を払えなくなったようだ。もう、彼女も八十歳に近いし、いろいろと現金が必要らしい。だから、三十万ドル現金一括払いだったら、彼女はウンと言うと思うよ。」

私が「それはいい話じゃないか。だけど、いったいどこから三十万ドルもの現金を手に入れるというんだ？」と言うと、彼は「もし、この物件を三十万ドルで取得できることになったら、銀行から半分借りればいい。銀行から物件の五十パーセントを借りる。教会には預金が六万ドルある。そして、残りの九万ドルは一年なら私が無利子で貸します。」でも私は「そうだねえ……、でも彼女は、こちらの提案を受けつけないと思うんだが……。」と言いました。それに対して彼は「教会として、彼女に話を持っていってもいいでしょうか。許可してもらえますか？」と言うので、私は「もちろん。」と答えました。何日も経たないうちに、その彼が電話をかけてきて「ちょっと聞いてください、チャック。彼女が受け入れてくれましたよ。」と言ったのです。それを聞いた私は「それはすごい！でも、えらいことになったもんだ……。」と思ったものです。

ちょうどその頃、フェアビュー通りの延長工事が終了し、サンフラワー通りまで車で行けるようになりました。私はよく小さな会堂があった場所から、購入した土地があるフェアビュー通りとサンフラワー通りが交差する所まで運転して行きました。私がある交差点で左折しようと信号待ちをしていると、私たちが購入する広大な土地が目飛び込んで来たので、私の頭はパニックを起こしました。私は思いました。「神は、私たちにとてもよくしてくださっている。今までのローンはすべて返済してるし、誰にも何も借りはない……。それどころか、銀行には六万ドルの預金があるんだ。教会は黒字だし、すべてがうまくいっている。それなのに、借金して土地を購入することになった……。この群れの人々を、こんなことに巻き込んでいいんだろうか？俺は何をやっているんだろう？俺の頭はどうかしてるのかな？」

このことを整理して考えようとすればするほど、冷や汗が出て来るのでした。すると、主が私の

心に語りかけてくださいました。「これは、だれの教会だろう？」私は答えました。「あの……これはあなたのものです。」そこで、主は言われました。「だったら、なぜあなたは破産を恐れているんだ？」私は思いました。「なぜ私は恐れているんだ？ 破産するのは、私ではなくて主ご自身のはずだ。なのになんで私は恐れているんだろう？」すると、主が言われました。「いったい誰がこの問題を起こしたのだろう？」私は答えました。「あなたです。あなたが、あんなに大勢の人々を教会に来るようになさったのです。あなたが、もっと広い場所を確保する緊急課題をくださったのです。」神は、私に「これはわたしの教会であり、わたしの問題である。」と請け合ってくださいました。主ご自身がこの問題を造り出されたのです。私の肩の重荷は取り去られました。それからというもの、私が例の交差点で信号待ちをしながらその広大な土地を眺めても、恐れを感じなくなったのです。私はいわゆる頑固な石頭だったのです。このように、私の心が主の思いに対して開かれるには、いくつかの段階を経なければなりませんでした。

私たちの集まりは主の教会であるという気づきは、私を重荷から解放してくれました。私ひとりで重荷を担がなくてもよいのです。それがわかったので、私はリラックスしていられます。これは主の教会なのだから、主が世話をしてくださるのです。イエスは言われました。「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。」(マタイ 16 章 18 節)主は「あなたはこの岩の上にわたしの教会を建てます。」とは言われませんでした。私たちは、これは主の教会であり、主ご自身が「わたしが建てる」と言われたことを、いつも覚えている必要があります。主イエスはペテロに対して「あなたはわたしを愛しますか。」(ヨハネ 21 章

16 節)と、質問されました。ペテロは「はい。主よ。私があなたを愛することは、あなたがご存じです。」と答えたときに、イエスは「行って、わたしの教会を建てなさい。」と言われませんでした。「わたしの羊を牧しなさい。」と言われたのです。つまり「群れの人々によく対応し、彼らの世話をしなさい」と言われたのです。人数を加えるのも、教会を建て上げるのも主の仕事なのです。私の仕事は、羊を愛して彼らの世話をし、彼らをよく見守って育てるために糧を与え、よく対応することです。そして主ご自身が教会を建て上げられることと、救われるべき人々を加えてくださることを信じることこそが、私の仕事なのです。

私たちが気づいたことは、あなたが奮闘して何かを得たのなら、あなたは得たものを維持するのにも奮闘しなければならないことです。あなたがごり押しと圧力によって何かを得たのなら、逆にあなたはいつも気が抜けないという強迫観念にかられるのです。もし、プログラムが人工的に企画され製作されたのなら、その後の管理・運営は骨が折れることになります。

ずいぶん前のことですが、私はある教団に属していました。そこでは、私が教会を発展させなければならないというプレッシャーを抱えていました。私は勧められるまま、提示されるままに、いろいろな方策を試していました。そこには、教会成長プログラムや競争がありました。私は教会を建て上げるために、すべての方策を試してみました。そこで最初に学んだことは、いったん無理をして獲得したものは、その後も無理をしてそれにしがみつけないなければならないということです。逆に、あなたが無理せずに得たものは、それにしがみつかなくてもそれはそこにあるのです。もしそれが主の働きならば、もし主がそれをされたのなら……主は救われるべき人々を加えられます。いったんそれが理解できれば、もはや無理をしてまでそれにしがみつくなければなりません。無理

をしてまで獲得したものを維持しようとするれば、あなたは牧師として虚脱状態に陥るでしょう。あなたがこれだと思っていたものが、逆にあなたを苦しめるのです。それがあなたを捉えて地に叩きつけるのです。また、それがあなたを常軌を逸した行動の中に引き込むのです。つまり、あなたは無理をして得た大勢の人々を、こんどは彼らが去らないように無理をしてまで引き止めようとする事になります。しかし、それはまさに骨の折れる話です。

アメリカ中を見まわすと、私たちは教会成長プログラムによって出来た大きな教会があることに気がつきます。しかし、プログラムは回転させ続けなければならないのです。そのプログラムを回転させるためには、常にあなたが油を差し、グリースを塗り続けなければなりません。あなたが気を抜いたその瞬間、すべてが空中分解するのです。そうしたら、プログラムを回転させるために、あなたが無理をして注ぎ込んだエネルギーと宣伝努力のすべてが泡となり、あなたを打ちのめすのです。今日、多くの特大教会がありますが、同時に多くの疲れ切った特大教会のリーダーたちがいるのです。なぜなら、彼らは自分で作り上げたものが失われないように、無理をしてまでそれを回転させようと努めるからです。

無理して得るということは、何も流行の先端に行く教会成長プログラムに遅れをとらないように、自分を合わせる状態だけを指すものではありません。同じことは、興奮した霊的環境でも起こり得るのです。彼らの場合は、霊的にも情緒的にも人々を操作したり、聖霊の賜物で惹きつけることによって「教会成長」を作り上げているのです。これもまた、あなたを困難な状況へと陥れます。なぜなら、もしあなたが霊的な賜物を宣伝して人々を惹きつけたり、それによる集客効果を狙ったりしたら、あなたはもう引き返すことのできない、もっと困難な道を下って行くしかないからです。おわかりでしょうか？ もしあなたが超自然な現象や見ごたえのあるショーによって人々を引き寄せられるなら、また、もしそれがあなたの得意分野とするならば、あなたはその分野でネタを仕込み続けなければならないのです。あなたが同種の現象によって引き寄せた観衆を、もっと刺激的な霊的体験によって彼らが去らないような工夫を続けなければならないのです。

飽きっぽいのが私たち人間の本性です。たとえそのときに旬のもの、流行しているものがどれだけ刺激的で魅惑的であったとしても、私たちはすぐに飽きてしまいます。そしてさらに新しい観点や切り口、さらに新しいパワーを売りにしたアトラクションを求めるのです。これはあたかも、もっとも刺激的な力を求めて、以前と同レベルの興奮と感動を守り続けるようなものです。

たとえば、私の趣味のひとつにモーターボートがあります。初心者頃はジョンソン製十二フィート(三・六メートル)のボートに二十五馬力のエンジンを積んでいました。最初は興奮しました。そのボートを使って、水上スキーも習い始めました。しかしそのボートは、誰かが船首に乗ってノーズを下げて、逆にスキーヤーのロープが下がらないよう工夫する必要がありました。それでも、このボートで水上スキーを習い始めたのです。初めてということもあって、その夏の水上スキー体験は素晴らしいものでした。その年の冬、私たちは流線型のファイバーグラス製のボートを購入してからそれを改造しました。それは、十四フィート(四・二メートル)の素晴らしいボートでした！しかし二十五馬力の小さなエンジンは、この競艇用ボートには小さすぎました。そこで、こんどはマーキュリー製五十五馬力のエンジンに積み替えたのです。これは二十五馬力よりもはるかに力がありました。これで誰も船首を下げるために、そこに座っている必要がなくなりました。しかしそ

の夏の終わりに、私たちのボートを追い越したボートがいたので、私たちは五十五馬力のエンジンから七十五馬力のエンジンに取り替えました。しかしこんどは十四フィートのボートが、七十五馬力のエンジンには不釣り合いになってしまいました。私は思いました。「そうだなあ、外付けエンジンもいいけど、船内発動機付きボートもいいよなあ……。」

そこで、私たちはシェビー社のモデル345を購入したのです。いつになったらストップするのでしょうか？ 幸いなことに、ここで私はストップしたのです。このように、私たちはもっともっと思うのです。例えば、もうちょっと大きいやつ、もうちょっとカッコイイやつ……と。

霊的な刺激によって動かされたアトラクションも、これとまったく同じことです。あなたがよく耳にする「主は、言われます……。」という典型的な仕掛けが、以前と同じインパクトや刺激を失うと、もっと新しい違ったもので仕掛け続けなければなりません。最終的に行きつくところは、笑いをコントロールできないどころか、犬やライオンのように吠えるところです。ある教会が、どんなに奇怪な行為や儀式、パフォーマンスを繰り返すかを見てください。これは、飽くことを知らない道です。これはあなたが正当な領域を出て、異常な状態に逆戻りするようなものです。あなたは人々を楽しませるために、いつも奇抜で奇怪な変化のある体験の場を提供することによって、彼らが求める霊的な刺激を満たし続けなければなりません。

カルバリー・チャペルでは、誇大なでっちあげはありません。私たちは肉の欲求を満足させる新しいプログラムや、人々に訴えかける誇大な「霊的材料」を追い求めはしないのです。私たちは神のことばに信頼し、これを教え、これに依存しているのです。これこそが、私たちが建て上げられる土台なのです。神のことばは無尽蔵です。これに虚脱状態という言葉は無縁です。これは、次から次へと前に進ませるのです。

だからこそ私たちはリラックスしていられますし、打ち解けた雰囲気の中で仕えることができるのです。そもそも、これは主の教会なので私たちがやらなければ……と、汗を流す必要はないのです。私たちはどのように教会を建て上げようかとか、ユーザーに親しみやすい教会をどうやって作ろうか、または教会成長五カ年発展計画などと銘打ってセミナーに走ることもないのです。そもそも、いったい誰が、今から五年後に生きているかがわかるというのでしょうか！ 今日のために仕えようではありませんか！

あるとき私は、フェニックスで開かれたリーダーシップセミナーで話すように頼まれました。私を招いたグループは「二十一世紀社会の潮流」と、それに対する「教会計画の展開」を研究している社会戦略研究家の人たちでした。何人かの有名な人たちが、この公開戦略討論会に招かれました。その討論のテーマとは「どのように将来の必要に備え、その目的にかなった教会戦略を編み出すか？」というものでした。

そのような雰囲気の中で、私は自らの発言によって司会者をうろたえさせてしまいました。私が次のように言ったからです。「私はこのような考え方をしています。『もし壊れていないのなら、直すことはない。』神がみことばを教えることを祝福され続けているのですから、教会は成長するでしょうし、主が人数を加えられるでしょう。主が『そうする』と言われたように、主はみことばに名誉を与えられています。神がみことばを祝福されている限り、私はこれからもみことばを教え続けるでしょう。私はそのことに満足を覚えているのです。なぜ、今になって変えなければならないのでしょうか

か？ なぜ、うまく機能しているものを改造しなければならないのでしょうか？ もしそれが機能しなくなる日が訪れたら、それは神のことばが役に立たなくなったということであり、そこで初めて教える必要もなくなるわけです。」

もちろん、その発言に対して司会者はとてもうろたえていました。その後、私たちはトゲのある言葉で応酬し合うことになりました。興味深いことに、私は二度とそのような素晴らしい(?)セミナー大会に講師として招かれることはなくなりました。

私が気づいたことは、旧約聖書全体を学び終えるまでに新約聖書を学びたいという飢え渇きが与えられて、新約聖書を学ぶ準備ができるということです。逆に、新約聖書全体を学び終えると、旧約聖書の創世記に戻りたいという思いに駆られるのです。これは、旧新約全体を学び通すたびに、その思いが強くなっていくものなのです。このように繰り返す中で、あなたが思う以上に学び、また多くを得るのです。これは決して古臭くならないし、マンネリ化にもなりません。このようにしていれば、あなたは「新しい仕掛け」や「新しい視点」や「新しい体験」を、決して無理してまで見つけ出さなくてもいいのです。これは、ただ神のみことばがあれば足りることです。神のことばは生きていて力強く、人々の内側の霊に仕えてくださるのです。

第五章 恵みの上に恵みを加えて

「恵みによって心を強めるのは良いことです。」(ヘブル 13 章 9 節)

カルバリー・チャペルは恵みというテーマに関して、他の教会と明確に区別できる立場を取っています。神の恵みなしには、誰にとってもチャンスは全くありません。私たちの人生には、神の恵みが必要です。それも毎日必要です。私たちは恵みを体験して、恵みによって個人的に救われるのです。さらに、私たちはその後も恵みの上に立ち続けるのです。私たちは、死んだような状態の者を回復させようと探し求めている神の愛と恵みを信じているのです。

ある教会は、深刻なほど神の恵みに欠けています。それらの教会は、しばしばとても辛辣で融通がきかず、厳格にルールを守る律法主義によって、悔い改めたり回復させる余地さえ潰しているのです。私がつまずいて倒れた人々を回復させようと助けるときに、その思いに反対する激しい非難には驚きを覚えます。神に仕える才能豊かな人が、敵の仕掛けにかかって倒れるのを見るとき、私はサタンに対して憤りを覚えます。悪魔は、最も素晴らしい働き人たちを引き裂こうと狙っているからです。

私たちは、しっかりと恵みに立つ態度を取り続けてきました。私たちは、聖書が「神は恵み深い方である」と教えていると信じています。恵みこそが、人間と関わる時に神が示される最も大いなる特徴です。もし主が恵みの神でなければ、誰にもチャンスはありません。どんなときでも、私が祈るとき—他人のことを祈る以外—には、処罰を願ったことはありません。自分のことになると、いつも「恵みを与えてください！」とか「主よ、私をあわれんでください！」とか「私に対して悪いことをしたやつを罰してください。けれども、私にはあわれみを与えてください。」と祈るのです。

興味深いことは、私たちがあわれみを受け取るたび、また恵みを受け取るたびに、主が「そのあわれみと恵みを他の者に向かって示しなさい。」と、はっきり語られることです。「あわれみ深い

者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるから。」(マタイ 5 章 7 節)

これも興味深いことですが、イエスは、私たちが自発的に他者を赦すことと、主が私たちを赦されることとを、同一視しておられるようです。このことは、私たちがよく引用している「主の祈り」に照らしても明らかなことです。この模範的祈りの後半において、主は赦しに関する願いの大切さを強調されています。「しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。」(マタイ 6 章 15 節)

イエスは、赦す必要性について、たとえ話をされました。マタイの福音書十八章を開くと、主人が彼のしもべが抱えていた十六億ドルの借金を赦してあげた話が出ています。しかしこのしもべは主人のもとを去ると、彼に十六ドルの借金を抱えた者を、債務者の刑務所に入れてしまいます。そこで、それを聞いた主人は彼を呼び出して言いました。「あなたは、どれほど私から借りていたか覚えているか？ それにも関わらず、私はあなたを赦したのではなかったか？ それなのに、どうしてあなたに借りのある仲間のしもべを赦さずに刑務所に入れてしまったのか？」主人は彼を叱って、彼に向かって最後のセントを払い終えるまで、刑務所に入っているように命じました。(マタイ 18 章 23—35 節参照)

もしそれほどまでに私たちが赦されたのなら、当然私たちも赦すべきです！ 神の恵みを受けた者として、私たちはつまずいて倒れた者たちに神の恵みを示すべきです。日々、私は神の恵みを必要としています。私は神の恵みの上に立っているのです。私は自分の働きによってではなく、恵みによって救われたのです。神ご自身がしてくださったことです。すべての栄光は神に帰するのです。私は自分がやったことを誇ることはできないのです。私は何一つしていないのです。自分が何かやったことで義と認められるのではなく、神の恵みによって私たちは救われるのです。

新約聖書全体を通してこのテーマが流れています。だからこそ私たちはこのテーマを強調するのです。ローマ人への手紙とガラテヤ人への手紙がとても重要な理由は、これらの手紙が神の恵みと信仰によって義と認められることを明らかにしているからです。この対極にあるのが、律法の行ないによって獲得する自己義認です。

私たちは、つまずいて倒れた者の回復に努めることを信条としています。パウロはガラテヤ人への手紙で次のように教えています。「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。」(ガラテヤ 6 章 1 節) 私は神から受け取った恵みのゆえに、また日々与えられている恵みのゆえに、主に感謝しています。私はその恵みが他者の上にまで広がることを求めているのです。

私は、賜物が豊かに与えられた牧師が倒れたことを耳にすると、サタンに対して怒りを覚えるのです。主のための豊かな能力と才能を持っている人は、特にサタンの攻撃目標だったのでしょうか。私はただ指をくわえてサタンが勝利するのを見物するつもりはありません。私は神の国のために倒れた人々が再び生かされることを求めるのです。そうすれば、彼らに与えられた才能を再び主のために使うことができるからです。

私は、私の人生において多くの復元作業を行ってきました。なぜだかわかりませんが私はこれが好きなのです。どうやら私は古びて壊れたのを持ってきて、魅力的なものに作り変えることが

好きなようです。私はフォード社製の五七年モデル・スカイライナーを持っています。さて、もしあなたが最初に私がこの車を持ってきたときの状態を見たら「こりゃ廃車置き場行きだ。」と思うことでしょう。しかし車体を解体してヤスリをかけて磨き、さびを落として塗装し直し、それから再び元通りに組み立てるのです。そのとき初めて、廃車同然だったものが、美しく魅力的なものに生まれ変わります。そこには喜びと満足感があります。私は車だけでなく、家も同様に修復するのが好きです。私の娘は、いつも修理が必要な中古住宅を買っては「パパ来てちょうだい。」と言うのです。私はそれらの住宅を、魅力的でモダンで美しいものに改造するのが大好きです。これは、サタンによって汚された人々の人生にも同様に言えることです。

私は本当に壊れていた者の人生を手にとって、育て、仕立て直し、組立て直すのが好きなのです。多くのカルバリー・チャペルの牧師を見てください！ 彼らの人生は本当に壊れていたのです。しかし、神がどのように彼らの人生を修復してくださったかを見てください。また、神が彼らの人生に与えられた価値と富を見てください。これは、今日における神の美しい御業です。世の中から見捨てられ希望のない人と見なされていた者が、尊い輝く器として生まれ変わります。

私たちは赦されたのですから、私たちも赦す必要があるのです。あわれみを受けたのですから、あわれみを示す必要があるのです。恵みを受けているのですから、私たちも恵み深くある必要があります。神の恵みを示し、恵みを広げることが、カルバリー・チャペルのミニストリーの中で重要な一部なのです。

ヨハネの福音書八章二節に、とても興味深い話があります。イエスが宮に入れ座って教え始められた、とあります。すると突然、ある騒動によってイエスの教えが中断されてしまいます。

そこには、ヒステリックな泣き声と叫び声とが響き渡るのです。「すると、律法学者とパリサイ人が、姦淫の場で捕えられたひとりの女を連れて来て、真ん中に置いてから、イエスに言った。『先生。この女は姦淫の現場でつかまえられたのです。』」(ヨハネ 8章 3—4 節)

キリストの敵たちは、常に主の教えをモーセの教えとぶつけて争わせようと試みたのです。一般的な人々は、モーセのことを、神の律法を受け取り人々に伝えた器として認めています。モーセの権威に対して、疑いを抱かせる点は何一つありませんでした。モーセは神の代理人でした。もし、イエスがモーセの律法と矛盾することを言ったなら、イエスは神から来た者とは言えなくなってしまいます。彼らがイエスにぶつけたのは離婚に関する問題です。彼らは、イエスに「人はその妻を、場合によっては離縁できるでしょうか？」と質問したのです。イエスは答えられました。「まことに、あなたがたに告げます。だれでも、不貞のためでなくて、その妻を離別し、別の女を妻にする者は姦淫を犯すのです。」(マタイ 19章 9 節)それに対して彼らは「モーセは、離縁状を書きさえすれば、離婚できると言ったはずです。」と応酬しました。この時点で、彼らはイエスを罠にはめることができたと思いました。すると、イエスはモーセよりもはるか以前のことを持ち出して言われました。「初めからそうだったわけではありません。モーセは人々の心がかたくなだからこそ、その相手の女性に離縁状を与えたのです。しかし、初めはそうではありませんでした。」

ですから、ここでも彼らはキリストをモーセの律法と戦わせようとしているのです。『モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。ところで、あなたは何と言われますか。』彼らはイエスをためしてこう言ったのである。それは、イエスを告発する理由を得るためであっ

た。」(ヨハネ 8 章 5—6 節)これは、彼らの動機が明らかにわかるケースです。しかし、イエスは何も言われませんでした。主は、あたかも彼らの声が聞こえないかのように、座ったまま指で何かを地面に書いておられたのです。

さて、イエスはいったい何を地面に書いておられたのでしょうか。私にはわかりません。もしかしたら、主は「いったい男のほうはどこにいるのか？」と書かれたのかも知りません。彼らは「この女は姦淫・不倫の現場で捉えられたのです。」と告発しました。しかし、姦淫・不倫の現場にいた男を捕えずに、彼女だけを捕えることはできないはずで、モーセの律法によれば、男女そろって石打ちの刑によって死ななければなりません。ですから、彼らがモーセの律法を守ることに本当に関心があるならば、男性のほうも引きずってきたはずで、もしかしたらその男性は彼らの友だちで、彼だけを逃がしたのかも知りません。これでは正義が泣いてしまいます。

イエスは敵を怒らせてしまいました。イエスは彼らのことを無視し続けるかのように、地面に書き続けたのです。そこで、彼らは質問に答えることを強要しました。ついに、イエスは立ち上がって彼らに言われました。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」(ヨハネ 8 章 7 節)そして、再び地面にかがまされると、何かを書き始められました。このとき主が何を書かれたか、私にはなんとなくわかるような気がします。イエスはそこで姦淫の女性に対して、有罪を宣告しようとしていた人々の氏名を年寄りから始めて地面に書いておられたのだと思います。おそらくイエスは、年寄りの犯した多くの罪を、例えば彼の以前の愛人やガールフレンドのこと、彼らのやっていた数々の行ないを詳しく書いておられたのだと思います。すると、この年寄りは「おお、そういえばうちの女房が、『父ちゃん、今日は早く帰っておいで。』と言っていたんだ。みんな、わしは帰る。」とか言い出します。その男が去ると、イエスは次の年寄りの男が去るまで、彼のやったことをいくつか書き連ねます。このように、ひとりひとり年寄りから若者まで書き続けると、しまいには誰もいなくなりました。すると、イエスは立ち上がり、女を見て言われました。「『婦人よ。あの人たちは今どこにいますか。あなたを罪に定める者はなかったのですか。』彼女は言った。『だれもいません。』そこで、イエスは言われた。『わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。』」(同 8 章 10—11 節)

なんとイエスの答えは美しいことでしょうか。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。」

ひどい交通事故が起きて何台もの車が衝突し、人々の身体は打ちつけられ、傷つき血が流れ路上に投げ出されるとき、そこには二種類の緊急車両が駆けつけて来ます。最初に現場に到着する緊急車両は、たいてい警察のパトカーです。到着してすぐに彼らが始める仕事は、一般車両が通行できるように交通整理をすることです。それから、事故現場を歩き回り事故車両の位置を確かめます。また彼らは、路上に残ったブレーキやスリップの痕跡を測定器具で計って、それから目撃者から事情聴取し始めます。

彼らの仕事は、誰が交通規則に違反したのかを調べることです。誰がこの悲惨な事故の責めを負うのか？ 彼らの最も重要な関心は、どの規則が破られ、誰の責任で事故が起こったのかを決めることなのです。

次の緊急車両は、医療目的の救急車です。彼らにとっては、誰が悪いのかということは問題で

はありません。血を流している人々が路上にいます。彼らの仕事は、路上で血を流している人々に仕えることです。負傷者の心拍数をチェックし、包帯を巻き、骨折箇所を調べ、担架に寝かせて救急車へ運ぶことが彼らの仕事なのです。彼らは、誰が悪くて事故が起きたのかを考えていません。誰かに責めを負わせるためにそこにはいません。彼らが事故現場にいるのは、傷ついた人々を助けるためです。

さて私が観察するのに、二種類のミニストリーがあります。まず、警察のような態度をとる人々がいます。彼らは悲劇の現場と負傷者のところにやって来て、交通規則の教本を取り出し、道路交通法を読み上げます。「あなたには、黙秘する権利があります。しかし、あなたの発言があなた自身を不利な立場に追い込むこともあります。」彼らは、法律をその現場に持ち込み、いったい誰のせいで事故が起きたのかを調べ、誰に責任を負わせるべきか、誰に法律を読み上げるべきかを調べようとするのです。

しかし一方で、あたかも救急隊員のように、誰が規則を破ったのかに気をとめるのではなく、どうしたら負傷者を救えるかを指して仕える人々がいます。どのように助けることができるのだろうか？ どうしたら壊れた体に、崩壊した人生に仕えることができるのだろうか？ どうしたら、元通りに回復するのだろうか？ どうしたら癒しをもたらすことができるのだろうか？

さて、ヨハネの八章における記事に登場するのはパリサイ人です。彼らは法典を取り出して「われわれの律法によれば、彼女は石打ちに処せられます。あなたは何と言いますか？」しかしイエスはこの女性を責める代わりに、彼女に仕えて助け、人生を回復させるほうに関心がありました。「わたしもあなたを罪に定めない。」主の願いは、彼女が再び人生を歩むことだったのです。

私たちは、傷ついた人々に仕えることに努めています。私たちの願いは彼らが回復し、自分の足で立ち上がり再び機能することです。ヨハネは私たちに語っています。「律法はモーセによってもたらされ、恵みと真理はイエスによってもたらされた。」もし私がイエス・キリストの使用人であれば、私たちは恵みを伝えなければならないのです。私たちが数々の教会を見渡すとき、また数々のミニストリーを見ると、多くの者たちが主としてモーセの説教者であることに気づくのです。彼らはとても辛辣で律法主義的です。律法・規則を破ったら、彼らはあなたに律法がなんと言っているか正確に教えてくれます。しかしイエスはこう言われるのです。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。わたしもあなたを罪に定めない。」

律法や規則によって責められた多くの人々を回復させることができることは、私たちの喜びであり特権です。このことに関して私が特に信じていることは、彼らが回復する前には必ず真実な悔い改めがあるということです。私は、律法とは人々をイエス・キリストに導くための養育係であると信じています。主の御前に来もせず、悔い改めもしない者たちのためには、律法が必要です。ですから律法にも居場所があるのです。律法が適切に用いられるならば、律法も聖く、正しく、善良なものになり得るのです。しかし、ときどき私たちは行き過ぎてしまって、人々が悔い改めたにも関わらず、厳しく彼らを罰してしまうのです。このとき、私たちは人々が回復することを快く助けてはいないのです。イエスは恵みと真理の味方です。私たちは、どんなときでも回復を探し求めなければなりません。しかし決して忘れてはならないのは、そのためには悔い改めが必要なことです。

以前に崩壊して傷ついた人生が、再び神の国のために実を結ぶようになるのを見るのは素晴

らしいことです。しかし恵みにはリスクが伴うことがあります。私が判断を誤って赦してしまい、ある人々に恵みを示してしまうこともあります。それは、彼らの悔い改めが純粹ではない場合に起こることです。彼らが表面では悔い改めても、まだ彼らの内側に隠れた狙いや思惑を抱えている場合です。私はひそかに罪を犯し続けている人々に対して恵みを示した結果、後に私が損害を被ったこともあります。私は完全ではありません。私が判断を誤って、悪い行ないを真実に悔い改めない人々に対して恵みを示してしまったことがあります。

私がチャンスを活かして悔い改めたはずの人々を教会のスタッフにした後にも、彼らに悪い習慣が残っていることがあるのです。それは私の誤りです。また、将来同様の失敗をするかもしれません。しかし、私はあなたにこのことだけは言っておきます。もし私が誤りを犯すなら、さばきの方向で誤るのではなく、恵みの方向で誤ることを願っているのです。

エゼキエル書三四章を開くと、主が牧者たちを非難して語っておられます。彼ら牧者たちは羊たちが道に迷っているにも関わらず、失われて行く羊を捜しに行きませんでした。主は彼らに向かって、かなりきついことを言われました。彼らは羊たちを捜しに行き、羊たちを回復させることに関心を払わなかったのです。神は、神ご自身が赦し、恩赦を与えた者に向かって非難する誤りを犯すよりも、逆に私が恵みの方向において誤りを犯したときのほうが、はるかに寛大に私を取り扱ってくださると信じています。

聖書はいくつかの箇所、私たちにさばくことについて警告を与えています。「さばいてはいけません。さばかれないためです。」(マタイ 7 章 1 節) 私たちが、他者をさばくまさにその「さばき」が、自分をさばく基準になるのです。「あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。」(ローマ 14 章 4 節) 私は、ある人が真実に悔い改めたのにも関わらず、その人をさばいてしまう誤りを犯すのは嫌なのです。ですから繰り返しますが、私は恵みの方向で誤りを犯したいのです。なぜなら神は、私が人をさばく「誤り」を犯すよりも、私が恵みを示す方向で「誤り」を犯したときのほうが、恵み深くられるからです。そのようなことで、私は罪を犯したくないのです。

律法主義に陥ることは簡単なことです。私たちは、この誘惑に気づく必要があります。厳しい態度には気をつけましょう。私が気づいたことは、ある人が「改革派神学」に傾倒すると、ほとんどの場合、彼らはどっぷりと律法主義に傾倒してしまうのです。彼らは重箱の隅をつつくように、細かいところにまで間違いがないように気を配るのです。改革派神学にもよいポイント(強調点または針という意味)はありますが、針ならヤマアラシにもついています。無理をしてまである教義を信奉すれば、強調点は出来上がるものです。

ある人々は私に反対しています。なぜなら彼らは、私がある聖書箇所を飛ばして説明していると感じているからです。実は彼らは正しいのです。しかし、しばしば解釈の相違のゆえに論争になる聖書箇所は、私は意図的に飛ばしています。なぜなら、聖書のメッセージには両極面があるからです。私が気づいたことは、分裂を避けることが大切だということです。なぜなら、人々が聖書のメッセージの両極面のどちらか一極に傾いた瞬間、分裂が起こるからです。

聖書のメッセージにおける両極面の典型的な例は「神の主権」と「人間の責任」に言及する箇所

と言えるでしょう。聖書は以上の両面を教えています。しかし人間の理解では、両者は互いに相容れない矛盾したものと映るのです。どちらか一極に偏重する人々は「私たちは、両者ともに信じるのができない」と言うのです。なぜなら、もし「神の主権」を極端に強調すると、対極にある「人間の責任」を排除してしまうからというわけです。同じように「人間の責任」を極端に強調すると、対極にある「神の主権」を排除してしまうことになるからと言うのです。このような思い違いは、ある人がある学説や教理を採用して論理的な結論を導き出そうとするとときに起こります。人間の理論によって「神の主権」というテーマを論理的に結論づけようとする自体、人間から選択肢を奪っているのです。

それでは、私たちはどのように「神の主権」と「人間の責任」についてのみことばを割り切れればいいのでしょうか？ 私たちは、その両者を信仰によって信じるのです。なぜなら、私の理解では両者のバランスを保つことはできないからです。私は、どのように両者が調和するのか理解できません。しかし、私は両者ともに信じているのです。神が絶対であることを信じています。また、私は神に対して責任があり、神も私が選択することに対して責任を与えておられると信じています。私は、これら聖書の両極の主張は真実であると素朴に信頼しているのです。

最近ある牧師が、カルヴァン主義についての記事を掲載していました。その表紙には天秤のイラストが載っていました。天秤の両側にある二つの皿の一つにはジャン・カルヴァンが、もう一方にはヨハネの福音書三章十六節が載っていたのです。あなたはどちらを支持しますか？

人々を煽^{あお}って、もう一方と対立させることはやめましょう。人々が、どちらか一方に偏るのを見逃ごしてはなりません。あなたがそれを許した途端に、半分の会衆を失うことになります。なぜなら「神の主権」と「人間の責任」に関する問題においては、人々は半々に分かれてしまうからです。もし、あなたが聖書のメッセージの両極のうちどちらか一極を煽^{あお}るのなら、あなたは半数の会衆を失うことになるのです。あなたは本当に五十パーセントの会衆を失うことを願っているのですか？

カルバリー・チャペルと呼ばれる美しさを知っていますか？ それはあなたが実際どの立場をとっているか、人々にはわからないところにあるのです。あなたが「バプテスト」と名乗った途端、人々はあなたがどの神学的立場に立っているかがわかるので、その立場に含まれない半数の人々は決して来ることはありません。なぜならそこがバプテスト教会だからです。また、あなたが「長老派教会」と名乗った途端、人々はあなたがどの神学的立場に立っているかがわかるので、その立場に含まれない半数の人々は決して来ることはありません。なぜなら、彼らは長老派教会が何を信じているかを知っているからです。あなたが「ナザレン教会」と名乗った途端、彼らは特定の分類に入れてしまいます。彼らはあなたがどのような立場かを知っているのです。彼らはそこには行くことはないのです。

しかしカルバリー・チャペルでは、以上のことに関して一種の神秘的雰囲気を持っています。「これらの人々は何を信じているのですか？」という質問に対し「私にはわかりません。何を信じているか調べてみましょう。」すると、その領域は私たちの領域になるのです。あなたは今までに見つけることもできなかったほど大きな池で、釣りをしたいはずですが、あなたが市場調査をするならば、できるだけ大きな市場を求めるとは思いませんか。ですから、市場を分割してから「さて、私たちはこの小さな市場で釣りをするか。」とってはならないのです。市場は広くしておくのです。大

きな池で釣りをしましょう。さかなが餌に食いついてくるところで釣りをしましょう。

第六章 神のことばが優先される

「私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えとに専念しなさい。」(I テモテ 4 章 13 節)

カルバリー・チャペルが他の教会と区別されるもう一つのことばは、神の計画の全体を人々に宣べ伝えようと努めていることです。私たちは、この原則を使徒の働き二十章に見つけることができます。パウロが、エペソの長老たちに会って話したときのことです。彼らが、エペソの海岸沿い、エーゲ海に面したミルトスという町で会ったときに、パウロは長老たちに向かって言いました。「私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。」なぜなら「私は、神のご計画(英語では the whole counsel of God)の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」(使徒 20 章 26—27 節)

さて、どのようにしたら「私は、神のみことばの全体を宣べ伝えた」と言うことができるのでしょうか？ そのように会衆に宣言できる唯一の方法は、その人が聖書全体、つまり創世記からヨハネの黙示録までを会衆に教えることにほかなりません。あなたが聖書全体を会衆とに学び通したのなら、あなたは「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせた。」と言えるのです。

これはテーマ別説教によっては、決して達成されないものなのです。テーマ別説教は適切に用いさえすれば、それはそれで良いものです。しかしあなたがテーマ別説教をする場合、あなたを含めて誰もがその人の好きなテーマだけを選んでしまう傾向性があります。聖書の中には、人々にインスピレーションを与えるとは言えないテーマがあります。人々を感動させることができないテーマではあるのですが、人々に伝える必要があります。しかし人間の傾向性のゆえに、このようなテーマは避けてしまいがちです。あなたがテーマ別説教に専念しているのなら、あなたは神学的な論争が起きる聖書箇所や、説明するのに難しさを感じる箇所を避ける傾向があるので、人々はバランスのある神の真理の考え方を身につけることができないのです。聖書の全体を、最初から最後まで目を通すのが大切です。そうすれば次のように言うことができるからです。「神のご計画のすべてを、あなたがたに知らせた。」

さて、私はコスタメサのカルバリー・チャペルの人々に関して、次のように言うことができます。「私は、神のご計画の全体を宣べ伝えました。」なぜなら、私たちは七回にわたって創世記からヨハネの黙示録までを理解できるように説明したからです。最近、私たちは八回目の創世記からヨハネの黙示録に至るラウンドに突入しました。私たちはどの聖書箇所も飛ばしたりしません。ですから大多数のカルバリー・チャペルにおいて、また特に成功しているカルバリー・チャペルにおいて言えることですが、そこでは神のみことばの全体(表紙から裏表紙まで)を組織立てて教えています。

通常、聖書を詳しく教えるのがカルバリー・チャペルのスタイルです。だからといって、私たちが必要に応じてふさわしいテーマ、または論題別メッセージを提供しないという意味ではありません。私たちは、論題別メッセージは間違っていると、悪いものだと言っているのでもありません。論題

別メッセージにも居場所があるのです。私たちは、厳格な律法主義にはまって、すべてのメッセージが説教学的見地から正しいかどうか、また適切に解説できているかどうかを調べたりしません。しかしほとんどの場合、イザヤが示した模範から学ぼうとしています。彼は次のように言いました。「戒め(行動と考え方の指針)に戒め、戒めに戒め、規則に規則、規則に規則、ここに少し、あそこに少し。」(イザヤ28章13節)(英訳では以下の意味に近い。「主のことばは、教訓に教訓、指針に指針、一行に一行を加え、一行に一行を加え、ここに少し、あそこに少し。」)以上のことばは、イザヤの教えのスタイルに対して、人々が反応したものを描写したものです。

彼らは、イザヤの教え方を物笑いのたねにしたのです。しかし、彼のとった方法はとても効果的に機能しました。一方、彼らはイザヤについて不満を口にしました。彼らはあざけて言いました。「イザヤは帰って、幼子に教えればいい。なぜって彼の教え方きたら、『戒め(行動と考え方の指針)に戒め、戒めに戒め、規則に規則、規則に規則、ここに少し、あそこに少し。』ってやつだからな。」彼らは、悪意に満ちてあざけて言ったのです。しかし、人々とともに聖書全体を通して学ぶことはとても大切なことです。一行一行、教訓に教訓というように、私たちがそのように聖書全体を学ぶなら、神のみことばの全体を人々に伝えることになるのです。

また、神のみことばの全体を教えるとき、他にも好都合なことがあります。それはあなたがある人の問題や教会の問題に対処しなければならないときでも、聖書をストレートに語るができるのです。つまり、メッセージを聞いている人々が「ああ、今日あの牧師は私に向けて語っているな。」と思われることについて、私たちは心配する必要がないからです。会衆は、たまたまその日にその聖書箇所を学ぶに過ぎないことを知っています。ですから「なんと、牧師は私をいびっている。」といった受け取り方はできないのです。なぜなら、会衆はあなたがある論題から違う論題へと飛び移るのではなく、素朴に聖書全体を通して教えることを知っているからです。

私たちは神のことばの全体を素朴に学び通すのです。

ネヘミヤ記八章八節を開くと、イスラエルの子らが捕囚から帰還してエルサレムの町を再建する様子が描かれています。彼らのリーダーたちは人々を招集して小さな演壇を作りました。早朝、彼らは集まって神のことばを人々に読んで聞かせたのです。ネヘミヤ記八章八節では「彼らが神の律法の書をはっきりと読んで説明したので、民は読まれたことを理解した。」と宣言しています。私は、これこそが「解説」という言葉の意味ある定義だと信じています。「みことばを読むこと、思慮分別の感覚を与えること、それゆえにみことばの意味を理解するようになること。」私自身、あるみことばを五十回から六十回読んで、はじめて理解に至るといったケースがよくあります。突然、自分の思考回路のスイッチが入って、その箇所に関する全体像が見えてくるのです。私は、よい注解書(個人やグループが聖書を説明している本)を使用することは、聖書箇所を理解することの助けになると信じています。私は、神が他の人々にそれぞれの聖書箇所についての洞察を与えてくださっていることを感謝しています。私は注解書を感謝して読んでいることを述べた上で言いますが、注解書のページをめくってもめくっても、私が見えるものがまったく見つからないこともしばしばあります。ある聖書箇所について七冊の注解書を読んでいると、読み始める前よりもさらに混乱してしまうことさえあります。なぜなら、それぞれの注解書には、特定の聖書箇所について多くの異なる着想や考え方があるからです。ですから、聖書こそが聖書自体の最良の注解書であると、

私は信じています。

覚えておかなければならないことは、カルバリー・チャペルでは、一夜にして見ごたえのある結果を出すといったことは、通常起こらないということです。人々が神のことばに対して、渴きを覚えるには時間がかかるものです。人々が成長するのにも時間がかかるのです。ほとんどの場合、新しい地域でカルバリー・チャペルの土台ができるまで、少なくとも数年間の時間がかかります。土台を据えてその土地を整備し、堅い地面を耕し土壌を整えるために働き、そして肥えた土地に種を蒔くのです。それから、さらにあなたは待たなければなりません。種は一夜にして実を結ぶことはありません。種は成長して発育する必要があります。しかし、ゆっくりですがしっかりと実を結び始めるのです。

私が観察する限り、種を蒔きに出かけて行ったほとんどの男たちが、二年の終わりに差しかかる頃に危機を迎えます。彼らは落胆するのです。彼らが行った土地では、何も起こらないと感じます。「この土地の人々は、きっと他の土地の人々とは違うんだ。」と思い「きっと何も起こりはしない。」と信じ始めるのです。あなたは驚くかも知れませんが、彼らが出かけて二年が過ぎる頃、彼らのなんと多くが私に電話をかけてきて「もうだめです。この土地を去るしかないんです。だって、何も起こらないんですから。」と言うことでしょう。私は、彼らに「もう六カ月くらいそこにいてごらん。」と励まします。そして「なあ、考えてもごらん、おまえさんはいちばん困難な段階を終えたんだ。耕作の過程を終えたんだよ。土壌を耕したんだ。土台を据えたんだよ。だからもうちょっと待って、実を結ぶかどうか見ていてごらん。」と、彼らに言うのです。一般的に言って、三年目で人々の心の中に蒔かれた神のことばが実を結ぶことを見るようになります。「別の種は良い地に落ちて、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結んだ。」(マタイ 13 章 8 節)しかし、これは決して一夜にして起こることではないのです。

これは派手に燃え立たせて、大勢の人々を引き寄せることができると考えていた者たちにとっては、がっかりするやり方かも知れませんが、人々が奇蹟を見るために、また感情を煽るショーを見るために群がっているのに、一方であなたはコツコツと働いているのです。あなたは目に見える成果や成長を見ることはできません。一方で、人々が群がっているところで働く男たちは、インスタントに成功しているように見えます。しかし、主はダニエルに向かって言われました。「思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。」(ダニエル 12 章 3 節)

アメリカ合衆国の独立記念日に、花火が打ち上げられるのを見るのは楽しいものです。打上げ花火のきらめく閃光や、色とりどりの光が夜空を埋めます。観衆は「ワー」とか「キヤー」とか叫んでいますが、それもつかの間のことで花火はいずれ終了します。言うまでもなく、使用された花火はただの灰にすぎません。大きな感動をもたらす閃光かも知れませんが、それでもすぐに散ってしまうのです。多くの牧師たちが、それと同じように感動するほど大きな閃光を放ってから散っていくのです。あなたはどのように空で輝きたいのかを決めなくてはなりません。あなたは星のごとく永遠に輝きたいのでしょうか？ それとも、突然閃光がひらめいてドラマチックに舞台上に登場しても、そこにとどまる力もなく散ってしまうようになりたいのでしょうか？

第七章 イエス・キリストはすべての中心

「私たちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝えます。」

(Ⅱコリント 4章 5節)

カルバリー・チャペルの重要な特色の一つに、イエス・キリストを中心とする礼拝があります。私たちは、イエスに焦点を当てることを妨げるような行為や態度をそのままにさせてはおきません。例えば、人々が賛美しているときに、誰かが個人的に立ち上がることを許可しません。ある人が立ち上がったその瞬間、その人の周りの人々は彼に目をやって「どうして彼は立っているんだろう？」と思い始めるからです。イエスに焦点が当てられるはずが、代わりにその会衆の中で立ち上がった人に焦点が移ってしまうのです。

視線というのは興味深いものです。なぜなら、視線は動くものをキャッチするからです。多くの場合、私が観察するところによると、会衆賛美の中で立ち上がる人々は、自分が望むほど注目されていないという結論に達すると、手を上げたり体を揺さぶり始めたりするようです。そして、人々の目はその動きをキャッチするのです。しかし、同時にその動きは、人々の注意を散漫にさせてしまいます。他の人々は「なぜ、あの人たちはあそこで立ち上がっているのだろうか？」と、そちらに思いがそれてしまうからです。「彼らは、いったい何を考えているのだろうか？ 彼らは、自分たちが注意を引いていることに気がついているのだろうか？ 何やってるんだろう？」私はこのような類いの行為や態度は、放っておかずに対処したほうがいいと信じています。なぜならこのような人目を引く行為は、教会に集う可能性のある人を失う原因となるからです。もし私がある教会を訪れて、そのようなことを目撃したら「説教はとても良かったけど、他のことではついていけないなあ」と思うでしょう。

ずいぶん前のことですが、カルバリー・チャペルにおいても、人々を思うがままに立たせておいたことがあります。不幸なことですが、ある人たちがやることを他の人たちもやるのです。その当時、会衆の中に一人の男性がいて、毎晩のように最前列を陣取って、ただ単に席を立つということ以上のことをしていました。彼は、文字通り踊っていたのです。この男性が正気でなかったのは明らかです。彼がある心理的な欲求を満たそうとしていたのは、疑いのないことです。彼は、奇妙な行為を披露できる、また、その行為を受けとってくれる環境を見出したのです。しかし、それは人々を極度に注意散漫にさせる行為だったのです。私は当時の牧師に、その件について話をしました。しかし、その牧師はその行為を擁護しました。そこで、私は「今のところは、私は黙っているよ。」と思ったものです。

もし、コスタメサのカルバリー・チャペルにおいて、誰かが席を立ち上がったなら、席の案内係が近づいて行って、最後部の外のロビーに招きます。そこでは、牧師の一人が彼らに優しく愛をもって話をします。通常、牧師たちは以下のように対応します。「私たちは、このような行為を実践してはいません。なぜなら私たちはこのような行為は、人々の注意を礼拝する対象からそらしてしまうことに気がついたからです。もちろん、あなたは人々の注意をイエス・キリストから、あなたのほうに奪うことを望んではいませんか？ そうでしょう？」

私たちは彼らに対して、彼ら自身が注目を引いていることと、人々が意識を集中させている中

心はイエス・キリストなのに、人々が集中力を失ってしまうことを伝えるのです。私たちは愛をもって彼らに語りかけて、彼らの行為を止めるように促します。そこでもし彼らがいらだったり怒ったりするなら、それは彼らが「肉」を出発点としていたことが露呈したわけです。もし彼らが聖霊によって歩んでいるのなら、引き続き御霊に従って歩むことでしょうから、彼らは御霊によってアドバイスを受け入れるはずです。彼らは「えっ、そんなこととは気がつきませんでした。ごめんなさい。」と言うはずですが、しかし、もし彼らがいらだつのなら、彼らは肉の中にいたことがわかるのです。

イエスは言われました。「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。」(マタイ 6 章 1 節)それから主は、彼らが正しいとする行為を礼拝の中で演じるとき、どうにかして自分自身に注意を引こうとしている姿に光を当てられました。あなたが好むと好まざるとに関わらず、みなが座っているときにあなたが立ち上がり体を揺らすなら、あなたは注目されてしまうのです。

私が、あるカルバリー・チャペルの礼拝に出席したときのことで、会堂の講壇の前には、おばあさんが着るようなコスチュームに身を包み、大きな縁のある帽子をかぶっている女性たちがいました。彼女たちは、礼拝賛美のコーラスに合わせて「解釈ダンス」というべきものを踊っているのです。もしその場で私の注意をそらすものがあるとすれば、そのダンス以外のなにものでもありませんでした。その踊りに関して言えば、洗練されたダンスの動きを表現できていたかも知れません。しかしその晩、私は礼拝賛美から何も得ていないことに気がついたのです。私はただ彼女たちの洗練されたダンスの動きを眺めて、彼女たちが賛美の歌を解釈して感じ取った動作を理解しようとしました。そこで再び集会の後に、そのカルバリー・チャペルの牧師とそのことで話をしました。すると彼は私の意図を理解して、その「解釈ダンス」はそれ以来取りやめとなったのです。そのダンスが人々の注意をそらすことに気がついたのです。

以前、私たちのグループの中には、スイスのバジル地方でカルバリー・チャペルに加入した教会がありました。これはおそらくヨーロッパの中では、一番魅力的なことが起こっている教会だったのです。将来の可能性においてもそこで起こっていることについても、その当時ヨーロッパのプロテスタント教会の中で、一番大きな教会であったと私は思います。毎年、私はバジルまで出かけて、そのフェローシップの中で話をしました。これは、本当にわくわくする体験でした。彼らは、カルバリー・チャペルのビジョンをすべてキャッチしていたのです。彼らにはコーラスがあり、賛美バンドのグループがあり、みことばを教えていました。毎週日曜の晩になると、美しいゴシック建築の教会に、何百人もの若者が集まっていました。国の公立教会は、彼らにその建物を使う許可を与えていました。公立教会は日曜日の朝のみ、その建物を使っていたのです。たった六人のお年寄りしかその教会を使用していなかったため、公立教会の監督がカルバリー・チャペルに夜の時間を割り当ててくれたのです。ここでは、二階席まで若者で溢れていて、力強い伝道の働きが行なわれていました。彼らは、カフェまで開いて素晴らしいプログラムを展開していました。彼らはヒッピーや、麻薬づけになった若者に接していました。その教会は、麻薬がはびこっている町の中心部に位置していたのです。そのような状態から救われた若者には住居が必要だったので、教会は救われた若者に住居をも提供していました。また教会はクラフトなど多種にわたって、斬新なみやげ品を作る工房を立ち上げました。この事業も成功したのです。若者たちはその工房に雇われました。芸

術的センスをもった若者は、彼らの能力を活かせる場を得たのです。すべては加速してうまくいってました。

最後に私がそこを訪れたとき、レオタードを着た数人の女の子たちが例の「解釈ダンス」をしていました。彼らは、以前ペンテコステのグループにいた副牧師を連れて来ていたのです。そこで、彼らの中にも「立ち上がる行為」が導入されたのです。この牧師はこの問題に対して対処できるほど強くはありませんでした。私はこの牧師に、集会の後に話しかけました。「こういった行為はやめたほうがいい。これらはあなたを潰しかねないよ。」実際には、この牧師は集会をコントロールできていなかったのです。私がそれに気がついたのは、私が紹介されて話す番になったときでした。ダンスをした女の子たちが、この牧師の耳にひそひそと話したと思うと、彼女らはもう一度歌い始めて「解釈ダンス」を演じ始めたのです。このダンサーたちがこのミーティングをコントロールしていたのであって、牧師ではありませんでした。そこで、私は彼にそのことについて話しかけました。しかし、彼はその問題に直面することをためらっていたのです。その結果どうなったかと言うと、今日バジルにはもはやカルバリー・チャペルはありません。その牧師は去り、ペンテコステの人々に引き継がれました。すると、こんどはペンテコステ教会がその人々を追い出したので、今日そこには何の働きも存在しません。

ですから、イエス・キリストを中心に据えて、すべての人が彼に注目するようにしなければなりません。できる限りそのことを妨げる機会を減らすのです。注意をそらす行為が発生したら、それに対処するのです。必要とあれば、そのことについてオープンに話すのです。

私が、まだ聖書学校に在籍しているときのことで。集会になると、いつも最前列に陣取って座る男性がいました。聖霊が人々の心に話しかけて、礼拝の中で最も力強く働いてくださるそのときに必ずと言っていいほど、この男性はまず床に体を傾けたと思うと、その姿勢からこんどは立ち上がって、腕を天井に向かって伸ばし叫ぶのです。「ハー・レー・ルー・ヤー」と。すると、人々は笑うのです。しかし、人々の注意はこの男性の「ハー・レー・ルー・ヤー」に向けられるので、メッセージの要点が見失われてしまうのです。彼は、彼の行為によって多くのメッセージを台無しにしました。そこで、私は彼を阻止することに決めたのです。私は彼のすぐ後ろに座って、彼が床に身をかがめようとするその瞬間、彼の両肩を強くつかんで、床に押さえつけたのです。他の誰も彼を止める勇気を持ち合わせていませんでした。彼らは、ただこの男性を好きにさせていたに過ぎません。しかし、この男性の行為がどれほど人々の注意をそらしたことでしょう！

数年前に、コロラドスプリングスで開かれた修養会でのことです。最前列に変な男性がいました。あなたがみただけで、そうとわかるほどです。私たちがみなで礼拝賛美を歌っていると、この男性は会場内の通路を行ったり来たりして踊っているのです。私は、その牧師に尋ねました。

「なんであんなことを許しているんですか？」彼は「だって、彼らにも自由が必要だから……。」と答えました。私はそれに対して「ちょっと待ってください。そんなものは『自由』と言える代物ではないでしょう。もし私が生まれて初めてあなたの教会を訪れて、あそこにいる男性を見たら、二度と戻ってこないでしょうね。私なら、あなたたちの集会は気味悪いと思いますよ。」

私たちは、以上のような人々を阻止する勇気がないために、間違っていることでも受け入れてしまう立場に立つことがあります。私たちは、聖霊を消してしまうという非難を受けることを恐れるの

です。私が消すのは、奇妙な霊です！ 聖霊ではなく、自分自身に注意を引こうとする霊を消すのです。主を礼拝しようとしている人々の意識をそらす霊を消すのです。

過去に、(これから分かち合うことは、カルバリー・チャペルでは長期間にわたり起こったことがなかったのですが……)ある人々が礼拝中に立ち上がって異言で語り始めたのです。ここでも席の案内係が近づいて行って、この状況をコントロールしました。彼らは、その人々をロビーに案内して、何人かの牧者たちが、私たちカルバリー・チャペルではカリスマ系の教会や、ペンテコステ系の教会とは違って、公の場での異言や預言を許可してはいないことを説明しました。私は講壇から会衆に向かって、異言の賜物は新約聖書に記載されていて正当なものであること、適切に用いられればよいものであることを説明しました。私はパウロが実際に味わった体験をもとに「私は、教会の中にいるときには、理解できない一万の異言を語るよりも、知性で理解できる五つのことばを語りたい。」と指摘したことを説明しました。しかし、パウロは誰よりも多く異言を語ることを感謝しています。あなたの個人的なディポジションにおいては、異言で語ることは徳を高める体験につながります。つまり、これは神をたたえ、礼拝するための手段の一つなのです。しかし、カルバリー・チャペルの教会のサイズになると、ある人々は異言の解釈を全く聞くことはできません。この異言の解釈という聖霊の賜物でさえ、全体で集まっているときには以上の理由から、互いの徳を高めることはできないのです。互いの徳が高まらないだけでなく、全体にとって利便性の面から考えて、私たちは全体で集まっているときには、異言と異言の解釈はしないのです。私たちは、全体集会ではそれらを行なうことを許可はしませんが、個人に対して、彼らの個人的な祈りの中で、聖霊から与えられた賜物を使って訓練することを励ましています。

小グループの信仰者が主を祈り求めて集まるときには、異言の賜物を使用することが許されません。ただしその場合、解釈が伴わなければなりません。しかし、私はもしそこにキリストを信じていない人がいる場合、その人にはただ混乱と疑問だけを植え付けることになると信じています。

それゆえに異言と解釈を求める場合は、信仰者が集まって、特に主を待ち望むときだけに限定したほうがよいのです。私たちの場合は、全体でバイブル・スタディをした後に、主を待ち望むための賛美と黙想の小集会を開いています。そのようなときには、みな徳を高めるので差し支えありません。人々が素朴に主と聖霊の満たしを求めている状況では、それは差し支えないのです。

パウロは、コリント人への手紙第一の中で言いました。「神の御前でだれをも誇らせないためです。」(英語欽定訳では No flesh should glory in His presence.) (I コリント 1 章 29 節) 私たちは、主の御前で人々の注意を自分のほうに引き寄せることが、どれだけ重大な問題であるかに気づいているでしょうか？ 私たちの中に、人々の意識をイエス・キリストに集中させる代わりに、自分たち自身のほうに引き寄せることを本当に考えている者がいるのでしょうか？ 私はこれは重大問題であり、非常に無礼なことだと考えています。とにかく私はこの件に関する限り、決してその罪を犯したいとは思いません。

旧約聖書を開くと、どれだけそれが重大なことを示した興味深いケースを見ることができます。イスラエルが幕屋自体を完成させ、すべての調度品を整え終わったときに、これを神に捧げるために全会衆は集まっていけにえを捧げ始めました。イスラエルの全会衆が出揃って、各々が各自の持ち場につきました。神の御計画に従ってアロンは祭司の服をまとい、彼の子どもたちも祭司

の服をまとい、すべてが秩序正しく行なわれていました。人々が行事が始まるのを待っているときに、突然天から神の火が下って、祭壇の上にある焚き木が燃え上がったのです。火が自ら燃え上がったのです。すべての人々は、神がおられるというしるしを見て、大声で叫び出しました。あらゆる場所で、人々は非常な興奮に巻き込まれていました。神の民のただ中に神がともにおられると人々は気づいたので、彼らの内の感情は際限なく高まりました。そのとき、アロンの子ナダブとアビフはおのおの自分の火皿を取り、その中に火を入れ、その上に香を盛り、主が彼らに命じなかった異なった火を主の前にささげたのです。すると、主の前から火が出て彼らを焼き尽くし彼らは主の前で死んだ、と聖書は告げています。(レビ記 10 章)

私は、この二人は感情が高まり、興奮のつぼの中で雰囲気には捕えられてしまったと信じています。彼らは自分たちの祭司としての立場と、また、自分たちがどれだけ重要なのかを見せびらかしたかったのだと思います。その結果、彼らは焼き尽くされてしまいました。

私は異なる火に対して、とても用心深くしています。あなた自身も、そのような「変わった火」に対して用心深くする必要があります。神ご自身を軸としていない感情や、神ご自身から発していない「礼拝」には十分に気をつける必要があります。これらは主ご自身よりも、その道具にすぎない人間に注意を引こうとするもくろみです。

同様のケースは、初代教会にも起こりました。アナニヤとサツピラです。彼らも賞賛と栄光を、人間である個人に引き寄せようと試みたのです。アナニヤとサツピラは、自分たちの所有地を売却してその代金の一部を教会に捧げたのですが、あたかも代金の全額を教会に収めたように見せかけたのです。私はこのケースも、人々の関心と賞賛を手に入れたくて始めたものだと思っています。彼らは、人々から「見て。あの人たちは、すべてを神に捧げたのよ！」と言って欲しかったのです。しかし、実際のところ彼らはすべてを捧げてはいなかったのです。

私たちはすべて、人から注目されることが好きです。人々に、私たちのことを「霊的」だと思って欲しいのです。気をつけてください！ 私たちの「肉」は、徹底的に腐っているのです。私には、自分が霊的に深みがある人物として知られたいという欲求があります。私の肉は等身大の自分よりも霊的な人物として、人々から見られることを大いに楽しむのです。ときどき、私たちは意図して霊的だという印象を人々に与えようとします。私はこれが教会にとっての一つの呪いだと考えています。ある牧師たちは、実際にはありもしないのに、霊的に深みがある印象を人々に与えようとしています。

以上のような狙いは、彼らの動作にも影響を与えます。彼らはその喋り方まで、あたかも聖なる声であるがごとくに工夫します。彼らの手は特別なポーズを作り出します。そして彼らは言うのです。「親愛なる姉妹よ。すべて話してごらん。」彼らは態度や物腰を一瞬にして変えて、あたかも彼らが聖なる人物であるかのような印象を与えようとするのです。彼らは、そう思われることが大好きなのです。人々に霊的な巨人と見られたいのです。彼らは、自分たちがみことばを知っていると認められ、彼らのようになりたいたいと思って欲しいのです。また、一日に何時間もかけて祈っていると人々に思われたいのです。そして彼らは微笑んで言うのです。「このようになるにはねえ、大きなコミットメント(献身)が必要だったんだよ。わかるかい？」

私たちは以上のような雰囲気(オーラ)をかもし出すことや、人々からの賛辞を受けることを楽し

むことに対して、用心する必要があります。アナニヤとサツピラの場合、彼らは殺されてしまいました。なぜなら、本来は主に帰すべき栄光を、自分たちに引き寄せようとしたからです。

そのために、非常に高い代価を支払わなければならなかったのです。神は、ご自身の栄光を人間の誰とも分かち合えないのです。気をつけてください！それが何であれ、神から注意をそらすことを許してはなりません。私たちは、イエスご自身を人々の注目の的にしたいと願っているのです。イエス・キリストを常に礼拝の中心とすることが、何よりも大切なのです。

第八章 キリストのからだ「教会」は、天にまで昇る

「祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望む……」(テス 2 章 13 節)

携挙は、イエスが再び来られるときを指し示しています。警告もなく、この地上からキリストのからだである教会が引き上げられるのです。キリストのからだは引き上げられた後に、神である主は、罪深い世界の上に主の御怒りを注がれます。多くの牧師たちが携挙について、無知から生まれる主張を繰り返しています。また彼らは「携挙が、大患難の前に起こるかは定かではない。」と言ったりします。彼らは「このことに関しては、どの立場をとったらよいかかわからない。」と言います。私はこの件に関しては「どの立場にも立たない。」といった言い訳ができないと思います。私たちに聖書があります。また、私たちは調べようと思えば、この件に関して徹底的に調べることができます。私はあなたの携挙に対する見方が、あなたのミニストリーの成功を大きく左右すると信じています。

まず最初に私たちが知っていることは、イエスは再び戻って来られると約束されたことです。ヨハネの福音書十四章を開くと「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」(ヨハネ 14 章 1—3 節)と書いてあるように、主は再び来られることと、主の弟子たちを迎えに来て、主のいる所に私たちをもおらせると約束されました。

パウロはコリントの人々に対し、手紙の中で以下のように宣言しました。「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。」(I コリント 15 章 51 節)新約聖書における奥義とは、まだ神によって啓示されていないものを意味しています。それらは「神ご自身について」「神の目的」「人間に対するご計画」を段階的に明らかにするのです。

たとえばパウロは、コロサイの人々に対して以下のように語りました。「神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあつてどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」(コロサイ 1 章 27 節)旧約の時代に生きていた預言者は「救い主キリストが私たちの内におられる。」という意味を理解していませんでした。「それは御使いたちもはっきり見たいと願っていることなのです。」(I ペテロ 1 章 12 節)コリント人への手紙第一、十五章五一節を見ると、以下の真理が啓示される以前には、

このことに関して、どのような啓示も示されていないことがわかります。「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな、眠ることになるのではなく変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。」(I コリント 15 章 51—52 節前半)

聖書が宣言している「(私たちは)みな、……変えられる」という意味は、からだの組織や器官に著しい変化が起こることです。「朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。」(I コリント 15 章

53 節) イエス・キリストが、主のからだである教会のために来られるときに、すべての信仰者は栄光の姿に変えられる体験をするのです。

テサロニケの人々は、このテーマを理解するのに困難を覚えていました。パウロはテサロニケにおいて数週間ほど彼らに仕えたにすぎませんが、そこでパウロは、人々に多くのことについて教えました。彼は特に大切なこととして、キリストのからだである教会が天にまで引き上げられる「携挙」について教えました。テサロニケの信仰者たちは、神の国が来ることを待ち望んでいたのです。

私は、それぞれの時代において「私たちこそ最後の教会の世代であるに違いない。」と、人々が信じるように、神が意図されたのだと確認しています。また、神の緻密で完全な計画によれば、それぞれの時代において主のからだである教会が、今すぐにでも主が戻って来られることを期待するようにされたことを信じているのです。イエスは、主の再臨について次のように言われました。「主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。」(マタイ 24 章 46 節)

初代教会では、すぐにイエスが御国を建て上げてくださると信じていました。使徒の働き一章を開くと、弟子たちが主に質問しています。「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興して下さるのですか。」(使徒 1 章 6 節)「数日すれば、私たちもそこにいるのでしょうか？」彼らは、興奮していました。なぜなら、彼らは、主がすぐにでも御国を建て上げてくださると期待していたからです。

イエスは、その質問に答えて言われました。「いつか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています。しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。」(使徒 1 章 7—8 節)

初代教会において、ある噂が飛び交っていました。その噂とは、ヨハネが死ぬ前に主は戻って来られるというものでした。ヨハネが風邪をひいたり、のどに痛みを覚えたりするたびに、教会全体が盛り上がるのです。そこでヨハネは福音書の中で、主が何と言われたかを明確に示しました。イエスがペテロに向かって、彼がどんな死に方をするかを告げたときに、ペテロがいつもの調子で主に尋ねました。「『主よ。この人はどうですか。』」イエスはペテロに言われた。「わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」(ヨハネ 21 章 22 節)この点についてヨハネは以下のように書き記しています。イエスはペテロに、その弟子が「死なない」と言われたのではなく「望むとしても」と言われたことを示して「ヨハネが死ぬ前にイエスが来られる。」という噂の間違いを修正しています。

テサロニケの人々は、主が戻って来られることを待ち望んでいました。しかし、何人かの親愛なる兄弟たちは、主が戻って来られる前に死んでしまいました。彼らは、その兄弟たちが死んだので、

栄光に満ちた御国に入れないと思い込んでしまったのです。テサロニケ人への手紙第一、四章を開くと、パウロは彼らの「もし、イエスが戻って来られる前にある兄弟が死んだら、その人は御国に入れぬ。」という誤解を修正しています。「眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。」(Ⅰテサロニケ 4 章 13 節)パウロは続けて言いました。「私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずで、私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。」(Ⅰテサロニケ 4 章 14—15 節)

パウロは、主が再び戻って来られるときまで、生きて地上にとどまっていると信じていたのです。パウロは、すでに死んで眠っている者たちよりも、彼が優先されることはないことを強調しています。「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。」(Ⅰテサロニケ 4 章 16—18 節)

ある人々は、以下のように言います。「携挙なんて信じられない。」なぜなら彼らは聖書を読むのですが、決して「携挙」ということばを見つけることはないからです。しかしテサロニケ人への手紙第一には「次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。」と書いてあるのです。

「一挙に引き上げられる」という言葉は、原文のギリシャ語では「ハルパゾー」といい「力づくで取り上げる」という意味です。通常この言葉は「捕虜にする」という軍事用語として使用されています。ラテン語の聖書では、ハルパゾーを【raptuse】と翻訳されていて、そこから英語の【rapture(ラプチャー)】が派生しました。イエスは、彼のからだである教会を、一挙に引き上げるために戻って来られるのです。それが最初に起こる出来事です。

二番目に起こる出来事は、イエス・キリストの再臨です。主が再び戻って来られるとき、この地上に主の御国をお建てになるのです。携挙はイエス・キリストの再臨とは区別される必要があります。聖書には以下のように書かれています。「見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。」(黙示録 1 章 7 節)また、次のようにも書かれています。「私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。」(コロサイ 3 章 4 節)イエスが再臨されるのは、この地上に神の国を建て上げるためです。しかし、この再臨に先だって起こることは、主のからだである教会が一挙に引き上げられて、主とともにいるようになることです。この出来事の中で、私が一番好きなのは以下のことです。「このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。」(Ⅰテサロニケ 4 章 17 節)

「イエスが、彼のからだである教会のために来られる」と「イエスが彼のからだである教会と

ともに来られる」という両者の間には、はっきりとした違いがあります。主が、彼のからだである教会のために来られるときは、携拳のときです。しかし、イエスが再臨されるときには、彼は彼のからだである教会とともに来られるのです。「私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。」(コロサイ 3 章 4 節)

ユダの手紙十四節は、再臨のときに起こることについて語っています。「アダムから七代目のエノクも、彼らについて預言してこう言っています。『見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。』」ゼカリヤも、再臨について以下のように語りました。「その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山は、その真ん中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ移り、他の半分は南へ移る。山々の谷がアツアルにまで達するので、あなたがたは、わたしの山々の谷に逃げよう。ユダの王ウジヤの時、地震を避けて逃げたように、あなたがたは逃げよう。私の神、主が来られる。すべての聖徒たちも主とともに来る。」(ゼカリヤ 14 章 4—5 節)

携拳は、今この瞬間にも起こり得ることです。携拳が起こる前に、成就しなければならない預言など何一つありません。それは、あなたがこの章を読んでいる最中にでも起こり得ることを示唆したのです。もしそれが起こったなら、私たちは震えるほどに感激するのです。

イエスが再び来られる前に、成就しなければならない預言はいくつかあります。まず反キリストが現われなければなりません。そして、この地上は大患難と審判を通過しなければならないのです。これらの預言は、特にイエスの再臨に関わることです。ルカの福音書二一章二八節で、イエスは彼の再臨について語られました。「これらのことが起こり始めたなら、からだをまっすぐにし、頭を上を上げなさい。贖いが近づいたのです。」(ルカ 21 章 28 節)

去年の十月下旬、ハロウィンも間近のことです。私は南カリフォルニアでも有数の大手ショッピングモールを通りかかりました。そこで私が見たものは、サンタクロースとトナカイとクリスマスの飾り付けでした。しかし、それはまだ十月のことだったのです。私は妻に向かって「あれを見てごらん！ このショッピングセンターでは、もうクリスマスの飾り付けをしてるよ！ すごいね……。それにしても、私は感謝祭が大好きだよ！」それに対して妻が言いました。「あれは感謝祭の飾り付けとは違うわ！ クリスマスの飾り付けでしょう！」私はそれに答えて「そんなことぐらい知っているよ。感謝祭のほうがクリスマスよりも前にやって来ることぐらい知っているさ。でもクリスマスの飾り付けを見たら、感謝祭が近いということもわかるんだ！」と言いました。それと同じように、再臨のしるしを見たのなら携拳も近いと知るのです。

イエスは、彼の弟子たちの質問に答えて、再臨のときにどのようなしるしが起こるのかを示されました。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」(マタイ 24 章 3 節)イエスが、弟子たちとともに神殿の中を歩いて通り抜けられたとき、弟子たちは神殿の石材が大きいことに驚いていました。イエスは、弟子たちに言われました。「ここでは、石がくずされずに、積みたまま残ることは決してありません。」(マタイ 24 章 2 節)オリーブ山の上にたどり着いたとき、彼らはイエスに質問しました。「あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」弟子たちは一つの出来事についての「しるし」について尋ねたわけではありません。つまり彼らが尋ねたのは、神殿の倒壊における

「しるし」と、人間が統治しているこの世の終焉における「しるし」と、神の国の到来についてでした。

彼らは、キリストのからだである教会が一挙に引き上げられることについては、質問しなかったでしょうし、おそらく彼らは携拳を理解してもいなかったでしょう。しかしイエスは、弟子たちには神殿の倒壊における「しるし」と、彼の再臨における「しるし」を示したのです。主が、再臨における「しるし」について語ったとき、主は当然のように大患難について話されました。「そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。」(マタイ 24 章 21 節) イエスは、彼らに警告しました。「それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、(読者はよく読み取るように。)(マタイ 24 章 15 節)あなたが、憎むべき者が聖なる所に立つのを見るとき、あなたがエルサレムから脱出して、荒野に向かって逃げるときが訪れたことを知るのです。「……これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。」(マタイ 24 章 29—30 節)

再臨より前に、多くの預言が成就しなければなりません。反キリストの出現と、大患難においてサタンの帝国が最大限にまで構築されることは、必ず起こらなければなりません。これらの出来事は、イエスの再臨前に起こらなければならないのです。しかし、キリストのからだである教会が一挙に引き上げられる前には、何も起こりません。だからこそ、私たちは目を覚まして準備しているように言われたのです。「だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。」それゆえに「主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。」(マタイ 24 章 44、46 節)

それから、イエスはたとえ話のシリーズを語り始められました。それぞれのたとえ話の要点は、どんなときでも主の再臨に備えて、目をさましていなさいというものです。「携拳は差し迫っている」「携拳はいつでも起こり得る」ことに焦点を当てています。

十人の娘のたとえ話を読むと「そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。」(マタイ 25 章 2 節)

と書いてあります。「用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。そのあとで、ほかの娘たちも来て、『ご主人さま、ご主人さま。あけてください。』と言った。しかし、彼は答えて、『確かなところ、私はあなたがたを知りません。』と言った。だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。」(マタイ 25 章 10—13 節)ここで一貫して強調されていることは「目をさましていること」と「準備していること」です。なぜならあなたには、いつ主が彼の使用人のために来られるのかわからないからです。

マタイの福音書二四章四二節から四四節を開くと「だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れはしなかったでしょう。だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。」と書いてあります。

私は、キリストのからだである教会は、大患難を通過しないと堅く信じています。ルカの福音書二一章で、イエスは、大患難について以下のように言われました。「しかし、あなたがたは、やがて起ころうとしているこれらすべてのことからのがれ、人の子の前に立つことができるように、いつも油断せずに祈っていなさい。」(ルカ 21 章 36 節)さて、もしイエスが私に向かって、何かのために「祈りなさい」と言われるのならもちろんやります！ 私は祈ります。「主よ。私は、この地上に臨もうとしていることから逃れるために、それにふさわしい者とされたいです。」この祈りは、大患難が起きるからこそ与えられるのです。

ヨハネの黙示録一章十九節を読むと、黙示録は三つの部分に分けられています。「あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書きしるせ。」(黙示録 1 章 19 節)黙示録一章で、ヨハネは以下のように言いました。「あなたの見た事……を書きしるせ。」そして、彼はビジョンを見ました。彼はキリストが七つの燭台の真ん中を、七つの星を右手に持って歩いておられる姿を見たのです。ヨハネは、イエスが栄光に輝いているすばらしい姿を描写しました。

ヨハネの黙示録二章と三章で、彼は「今ある事」について書いています。これはアジアの七つの教会に対するイエスのメッセージです。それら七つの教会は、その当時、確かに存在していたと私は信じています。しかし、それらはキリスト教会史における七つの区分された時代についても言及しており、今日においても見受けられる教会のあり方であるとも信じています。

今日、初めの愛から離れてしまった教会があります。また、ニコライ派の教え(特別階級権威主義)を取り入れている教会があります。また一方で、現在でも苦しんでいるスミルナのような教会が世界中にあります。苦しい迫害を受けている教会は、中国やスーダン、他の地域に存在します。ある教会は、テアテラの教会のようにマリア崇拝の教えを具体的に取り込んでいると、私は確信しています。私たちはサルデスの教会の中に、死んだプロテスタント主義の教会を投影した原型を見ることができます。「あなたは、生きてるとされているが、実は死んでいる。」(黙示録 3 章 1 節)

私は、フィラデルフィアのような教会こそが、みことばに忠実にとどまっていたのだと信じています。力はそれほどなかったかも知れませんが、しかし神に感謝すべきことは「わたしは、だれも閉じることのできない門を、あなたの前に開いておいた。なぜなら、あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかったからである。」(黙示録 3 章 8 節)と主が言われたことです。私たちは大きくないかも知れませんが、地を揺るがすこともないかも知れませんが、しかし神に感謝すべきことは、私たちが多少なりともそのような影響を与えていることです！

しかし、一方でラオデキヤの教会は、主イエスを教会の外へ追い出してしまったのです。主はドアの外に立ってノックして言われます。「だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」(黙示録 3 章 20 節)

以上のことから、私は七つの教会に対するメッセージの中には、三重に適用できるものがあると信じています。主イエスが教会に対するメッセージを終えた後に、黙示録四章一節で、主は新しい段落を【メトウタ＝それらのことの後に】というギリシャ語から始めておられます。これは黙示録一章十九節でも使用されていることばです。私たちは「いったい何の後に？」と質問する必要があります。黙示録二章と三章で書かれたことについての「後」です。二章と三章で書かれている「事」は、教会のことです。ですから「教会に直接に関係あること」の後に、私たちは以下のように書か

れているのを読むのです。「その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。また、先にラッパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声があった。『ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう。』」(黙示録 4 章 1 節)

この命令の後、ヨハネは言いました。「たちまち私は御霊に感じた。すると見よ。天に一つの御座があり、その御座に着いている方があり……」それからヨハネは、神の御座にはエメラルドの虹が掛かっている様子と、ケルビムが礼拝している様子を描写しています。またヨハネが見たのは、その御座の下方に長老たちが座っている二十四の座があること、また目を凝らして観察したのは、神の永遠に変わらないご性質と、本質、聖さについて宣言し続けているケルビムの天における礼拝のあり方です。「彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。』」(黙示録 4 章 8 節)ケルビムたちが神の聖さを宣言し続けているとき、二十四人の長老たちは彼らの冠を脱いでガラスの海の上に身を投げ出してひれ伏し、宣言しました。「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」(黙示録 4 章 11 節)

それからヨハネは、七つの封印で閉じられ、外側にも内側にも文字が書いてある巻き物に注意を引かれます。ある御使いが、大きな声ではっきりと言います。「巻き物を開いて、封印を解くのにふさわしい者はだれか。」(黙示録 5 章 2 節)それに対して、ヨハネはこう書いています。「巻き物を開くにも、見るのにも、ふさわしい者がだれも見つからなかったのです、私は激しく泣いていた。」(黙示録 5 章 4 節)ユダヤの贖いの律法によれば、この巻き物は地上の「権利証書」であると、私は確信しています。この巻き物には、権利が剥奪されたものを買戻すことができる「時」と、失った財産を買戻すために要求されたすべてを実行しなければならない「時」が定められていました。私たちは以上のことを、ルツの物語に見出すのです。ポアズがルツを花嫁として迎えるために、エリメレクが所有している土地を買戻したときの話です。また主イエスが、教会という花嫁を得るために犠牲を払ってこの世を獲得され、代価を支払ってこの世を買戻された事実の中にも見出すことができるのです。

さて、話を「天」に戻しましょう。以上のことから、ヨハネが泣いていた理由は、ユダヤの律法の中に見つけることができます。その律法によれば、もし定められた時に土地を買戻さなければ、その土地は永久に新しい所有者のものになるのです。あなたには一回のチャンスがありますが、その機会を逃すと、その土地は永久に戻らなくなってしまうのです。サタンの方と支配の下にあるこの世を思うとき、ヨハネはどうしたらよいかわからなくなり、長老のひとりが以下のように言うまで、激しくむせび泣き始めます。「泣いてはいけません。見なさい。ユダ族から出た獅子(ライオン)、ダビデの根が勝利を得たので、その巻き物を開いて、七つの封印を解くことができます。」(黙示録 5 章 5 節)ヨハネは、彼が見た方はユダ族のライオンではなく、ほふられた小羊のようであったと言っています。イザヤは言いました。「彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。……しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」(イザヤ

53 章 2、5 節)

ヨハネの黙示録五章を開くと、次のように書いてあります。「小羊は近づいて、御座にすわる方の右の手から、巻き物を受け取った。彼が巻き物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老は、おのおの、立琴と、香のいっぱいはいった金の鉢とを持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒たちの祈りである。彼らは、新しい歌を歌って言った。『あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。』」(黙示録 5 章 7—10 節)

あなたが、以上の歌詞を注意深く読めば気がつくことですが、この歌詞は、キリストのからだである教会だけが歌うことができるのです。つまり、主イエスが天で地上の「権利証書」を受け取るとき、私たちが天にいて、主イエスが御座に座る方の右の手からこの巻き物を受け取るのを見ることになるのです。私たちが、この栄光に満ちた合唱に参加して次のように歌うのです。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、……」(黙示録 5 章 9 節) ルカの福音書二一章で、イエスは彼の弟子たちに、この世が終わる前に起こる主イエスの再臨と大患難に際しての「しるし」について語られました。それから、主は次のように言われました。「あなたがたは、やがて起ころうとしているこれらすべてのことからのがれ、人の子の前に立つことができるように、いつも油断せずに祈っていなさい。」(ルカ 21 章 36 節)

私は、大患難が地上に起こるときには、人の子の御前に立って「小羊こそふさわしい方である」と歌うことを期待しています。キリストのからだである教会だけが、贖いの歌(買い戻される歌)を歌うことができるのです。黙示録六章では、巻物が開かれた後に地上に大患難が起きると書かれています。五章にはそれよりも前に、キリストのからだである教会が贖いの歌を歌っているのがわかります。私たちは、ここに贖いの歌が歌われるタイミングを見ることができるのです。再び次のように書いてあります。「(主が)ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」(黙示録 5 章 9—10 節) 私たちは、教会が人の子の御前に立っているのを見ます。そして、イエスが大患難について語られるのです。「あなたがたは、やがて起ころうとしているこれらすべてのことからのがれ、人の子の前に立つことができるように(原文ではそれにふさわしい者として数えられるように)、いつも油断せずに祈っていなさい。」(ルカ 21 章 36 節) 私は心から言いますが、私もそのとき、天で人の子の御前に立つ仲間の中にいたいと心から願っています!

ヨハネの黙示録六章は、大患難の記述から始まります。主が巻き物を閉じているひとつひとつの封印を開くたびに、それに呼応したさばきが地の上に下るのです。最初の封印が開かれたとき、ヨハネは以下のように書いています。「見よ。白い馬であった。それに乗っている者は弓を持っていた。彼は冠を与えられ、勝利の上にさらに勝利を得ようとして出て行った。」(黙示録 6 章 2 節)

私は、これが反キリストの啓示だと信じています。ある人たちは、この騎手が白い馬にまたがったイエス・キリストだと信じています! しかし、この次の箇所をよく読んでみると「戦争」「飢饉」「流

血」「地上の四分の一の人々が殺戮されること」が続いて記されています。以上のような響きは、神の国と主の栄光ある訪れにふさわしくありません。

私が信じていることは、現在、反キリストの勢いと力がこの世の中に存在することと、逆に彼らがこの世を乗っ取ることを妨げている唯一の存在は、キリストのからだである教会だということです。私たちに大きな力はなく、わずかな力しかありません。しかし闇の勢力が、この世を完全にコントロールすることを制止するには十分な力です。私は、キリストのからだである教会が取り去られるまでは、反キリストがこの地上を乗っ取ることはできないと信じています。パウロは、テサロニケ人への手紙第二、二章で次のように私たちに言っています。「不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があって、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。その時になると、不法の人が現われますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。」(Ⅱテサロニケ 2 章 7—8 節) 以上の記事は、黙示録六章で「イエスが巻き物を手に取られるときに、キリストのからだである教会は天にいる」という記事を支持しています。イエスが巻き物を解き始めると、それに応じたさばきである神の御怒りが地上に下る時が訪れるのです。

ローマ人への手紙五章九節を開くと、パウロが私たちに以下のように語っています。「ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」彼は、テサロニケ人への手紙第一、五章九節でも同じことを繰り返し語っています。「神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになったからです。」

私たちキリストのからだである教会は「御怒りに会うように定められた」のではありません。ローマ人への手紙一章で、パウロは以下のように書いています。「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。」(ローマ 1 章 18 節) 正しい者を悪い者とともにさばかれることは、神のご性質にまったく矛盾しません。

さて、この世においてクリスチャンには患難があるのは事実です。この世は、私たちを憎んでいます。ですから、私たちは迫害があるからといって驚くべきではありません。イエスは言われました。「もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。」(ヨハネ 15 章 18 節) そして「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」(ヨハネ 16 章 33 節) ですからこの世において、あなたには患難があるのです。しかし、教会に対する患難の原因は何でしょうか？ それは神ではありません！ サタンこそが患難の原因です。

患難をもたらす者がサタンであるならば、神の子たちが迫害されることになると考えられます。しかし、神がさばきをもたらすのであれば、話は別です。神は私たちの罪を、イエス・キリストの十字架で、すでにさばかれたのです。イエスが私たちすべての罪に対するさばきの責めを負ってくださったのです。

御使いたちが、ソドムを滅ぼしに向かう途中で何をしたか覚えていますか？ 彼らはアブラハムのところに立ち寄ったのです。彼らは言いました。「私たちが何をするのか、アブラハムに告げるべ

きではないか？」そこで彼らは「そうしよう」と言って、彼らがすることをアブラハムに告げたのです。「ソドムの罪が天にまで立ち昇って来たので、私たちはそれが事実かどうかを調べた後に、この町を滅ぼしに行くところです。」

アブラハムは「ちょっと待ってください。」と願いました。なぜなら、彼の甥ロトがその町に住んでいるからです。彼は言いました。「『あなたはほんとうに、正しい者を、悪い者といっしょに滅ぼし尽くされるのですか。もしや、その町の中に五十人の正しい者がいるかもしれません。』

ほんとうに滅ぼしてしまわれるのですか。その中にいる五十人の正しい者のために、その町をお赦しにはならないのですか。……』主は答えられた。「『もしソドムで、わたしが五十人の正しい者を町の中に見つけたら、その人たちのために、その町全部を赦そう。』アブラハムは答えて言った。「『……もしや五十人の正しい者に五人不足しているかもしれません。その五人のために、あなたは町の全部を滅ぼされるでしょうか。』主は仰せられた。「『滅ぼすまい。もしそこにわたしが四十五人を見つけたら。』そこで、再び尋ねて申し上げた。「『もしやそこに四十人見つかるかもしれません。』すると仰せられた。「『滅ぼすまい。その四十人のために。』また彼は言った。「『主よ。どうかお怒りにならないで、私に言わせてください。もしやそこに三十人見つかるかもしれません。』主は仰せられた。「『滅ぼすまい。もしそこにわたしが三十人を見つけたら。』彼は言った。「『私があえて、主に申し上げるのをお許しください。もしやそこに二十人見つかるかもしれません。』すると仰せられた。「『滅ぼすまい。その二十人のために。』彼はまた言った。「『主よ。どうかお怒りにならないで、今一度だけ私に言わせてください。もしやそこに十人見つかるかもしれません。』すると主は仰せられた。「『滅ぼすまい。その十人のために。』」(創世記 18 章 23—32 節)

その結果どうなったのでしょうか？ 御使いたちがソドムの町に来たとき、彼らは町の門のところに座っていた一人の義人ロトを見つけ出しました。ロトは、ソドムの人々がどのような人間かを知っていました。ペテロは、「ロトの内側にある正しい霊は、そこに住む人々の生き方によって悩まされていた。」と言っています。ロトは、その人たちが御使いであると知らずに家に招き入れました。その夜、ソドムの男たちが来てロトの家のドアを激しく叩きながら言いました。「今夜お前のところにやって来た男たちはどこにいるのか。ここに連れ出せ。彼らをよく知りたいのだ。」(創世記 19 章 5 節) 彼らは、文字通りその男たちをレイプしたかったのです。ロトは答えました。「兄弟たちよ。どうか悪いことはしないでください。」(創世記 19 章 7 節)

再び群衆がドアを激しく叩き始めたとき、御使いたちはロトを部屋に引き戻しました。それから、御使いたちは男たちにつぶしをくらわせたので、彼らは目が見えなくなりました。聖書には「男たちが一晩中ドアを探しても見つからないので疲れ果てた。」とあります。翌朝になると、御使いたちはロトをソドムから連れ出しました。なぜなら、ロトがその町を去るまで、彼らはそこを滅ぼすことができなかったからです。

ロトは、救い出される教会のひな型です。ペテロは、私たちに以下のように述べています。「(主は)無節操な者たちの好色なふるまいによって悩まされていた義人ロトを救い出されました。というのは、この義人は、彼らの間に住んでいましたが、不法な行ないを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたからです。これらのことでわかるように、主は、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、不義な者どもを、さばきの日まで、懲罰のもとに置くことを心得ておられるのです。」(Ⅱペテロ 2 章 7

—9 節) 神は、義人を救い出されると同時に、不義な者どもをさばきの日のためにとどめておかれるのです。

基本的な原則は、この地上の主は義なる方であるということです。彼は公正であり、義人たちを悪者とともに滅ぼすようなことはなさいません。神がさばきの出発点であるならば、神が義人たちをさばきから救われるでしょう。その昔、神がこの世を大洪水によって滅ぼされたのは、その時代の人々が邪悪であったからです。「主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。」(創世記6章5節)しかし、この世のすべての悪者の中に、ノアというひとりの義人がいました。そして神はさばきを激しく下したときに、ノアを守り保護してくださいました。ノアは神によって印を押され、その大洪水の中を無事に抜け出したのです。それは、ヨハネの黙示録七章に出てくる「十四万四千人」とまったく同じことです。この人々は、大患難の中でも危害に遭わないために、神によって印を押されたのです。ノアは、印を押され、さばきの中を通過して救われる「十四万四千人」のひな型です。

ノアと同時期に生きていた人の中に、もうひとりの義人エノクがいました。「エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。」(創世記5章24節)エノクは、興味深いことに教会を表わしています。彼は移動させられた、言い換えれば一挙に引き上げられたのです。

私はキリストのからだである教会が、大患難を通過するとは信じていません。しかし、ある人々は、教会が大患難の最中にもこの地上に残っていることを証明しようと、いくつかの聖書箇所を利用します。ひとつの論争的的は「最後のラッパ」の解釈に関することです。コリント人への手紙第一、十五章で、パウロは携挙について語っています。「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな、眠ることになるのではなく変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」(I コリント 15 章 51—52 節)ある人々は、このラッパを黙示録のさばきのときに鳴る七つのラッパと結びつけようとしています。また、彼らは「七つ目のラッパが最後のラッパだ。」と言うのです。以上の主張に従って「これは、終わりのラッパが吹き鳴らされるまでは起こらないことの証明だ。」と、彼らは、それが最後のさばきのことだと考えているのです。

私はこの主張の中に、いくつかの問題を見るのです。最初に黙示録に出てくる「七つのラッパのさばき」は、七人の御使いたちが吹き鳴らすために与えられ、それに応じて地上にさばきが下るのです。誰がラッパを吹いているのかを詳しく見てみると、彼らはすべて御使いです。テサロニケ人への手紙第一、四章十六節で、パウロは携挙について語っています。「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、……」(I テサロニケ 4 章 16 節)携挙のラッパは、御使いのラッパではないのです。これは神のラッパなのです！

四番目の御使いがラッパを吹き鳴らした後に、ある声が「わざわいが来る。わざわいが、わざわいが来る。地に住む人々に。あと三人の御使いがラッパを吹き鳴らそうとしている。」(黙示録 8 章 13 節)と叫ぶのです。また、五番目のラッパが鳴った後に、その声が「第一のわざわいは過ぎ去った。見よ。この後なお二つのわざわいが来る。」(黙示録 9 章 12 節)と言うのです。以上からも明らかのように、わざわいの宣告は地上にいる人々に対して下るのです。しかし、私たちが包まれるの

はわざわざではありません。私たちは栄光に包まれるのです。

また、しばしば議論されることは、黙示録二十章に書かれている出来事に関することです。つまり、ヨハネが見た天にいるいくつかのグループについてのことです。四節から始まる出来事を読むと「また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行う権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかった。これが第一の復活である。」(黙示録 20 章 4—5 節)彼らが主張しているのは「第一の復活のときに、ヨハネが見ているのは、イエスの証しをしたために首をはねられた人々であり、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった者たちである。」というものです。その人たちが、千年間にわたり生きてキリストとともに治めることになると言うのです。ある人々は、以上をもって「だから、教会は患難と迫害によって殉教者を出す状況に遭遇することになる。それが、確固たる証拠だ。」と信じています。

しかし、私たちはテキストをもう一度さかのぼって読む必要があります。四節に「多くの座」と書いてあり、そして「その座に着いている者たちにさばきを行なう権威が与えられた」とあります。「勝利を得た者たち」とは誰なのかを、もう一度調べてみましょう。勝利を得た者たちに宛てたメッセージは、教会に宛てたものです。「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」(黙示録 3 章 21 節)と書いてあります。ヨハネは、第一の復活の中に、キリストのからだである教会も加わっているのを見ているのです。それから大患難の期間に、獣の刻印を押されるのを拒んで殉教した者たちを見ているのです。「おびたしい数の者たち」を、黙示録七章で見つけることができます。それに言及して長老たちは言いました。「『白い衣を着ているこの人たちは、いったいだれですか。どこから来たのですか。』」と言った。そこで、私は、『主よ。あなたこそ、ご存じです。』と言った。すると、彼は私にこう言った。「『彼らは、大きな患難から抜け出て来た者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。』」(黙示録 7 章 13—14 節)

しかし彼らは主の聖なる宮において、昼も夜も主に仕えていることに気づいてください。キリストのからだである教会は、キリストの花嫁なのです。イエスは言われました。「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」(ヨハネ 15 章 15 節)ですから、この第二のグループが大患難時代に迫害されて殉教した聖徒らと同じグループを構成しているのです。彼らも、神の国の部分を構成するのです。しかし、教会はすでに一挙に引き上げられているのです。そのほうが大患難時代に迫害を通過するより、はるかによいではありませんか！

ヨハネの黙示録十章七節を開くと、七番目のラッパについてさらに詳しく知ることができます。「第七の御使いが吹き鳴らそうとしているラッパの音が響くその日には、神の奥義は、神がご自身のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する。」(黙示録 10 章 7 節)「その日」は、複数で書かれています。しかし、携拳は一瞬にして起こるのです。ですから、私たちは「最後のラッ

パ」を「七番目のラッパ」と関連づけることができないのです。黙示録に出てくる七番目のラッパは、七番目のラッパが鳴る「日々」に起こることです。一方、神のラッパが鳴るときは、私たちは一瞬にして変えられるのです。

マタイの福音書の中で、イエスは言われました。「だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。」(マタイ 24 章 29—31 節)これらの大患難の日々のすぐ後に私たちが見るのは、イエスが全世界に現われることです。

それから風が四方で吹くところから、天下のすみずみから主によって選ばれる者たちが集められるのです。しかし、ある人は「教会が選ばれたのではないのか？」と言います。その通りです。

教会は選ばれた者たちの集まりです。しかし、イスラエルも同じく選ばれたのです。この箇所は、イスラエルのことに言及しているのです。あなたはこれと同様な出来事が告げられている旧約聖書の箇所を、いくつか参照することができます。神は世界中からユダヤ人をお集めになります。以上の聖書箇所においてイエスは、彼の選びの民、つまりユダヤ人を指して言及されたのであって、教会について言われたものではありません。イザヤは言いました。「主は、国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。」(イザヤ 11 章 12 節)イスラエルは再び集められるのです。

それでは、反キリストが聖徒に対して戦いをいどむことについて、言及している聖書箇所はどうなるのでしょうか？ そのことについてダニエルは、ダニエル書七章二節で私たちに以下のように語っています。「私が見ていると、その角(反キリスト)は、聖徒たちに戦いをいどんで、彼らに打ち勝った。」ヨハネの黙示録十三章七節を読むと「彼(反キリスト)はまた聖徒たちに戦いをいどんで打ち勝つことが許され、また、あらゆる部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。」と書いてあります。「聖徒たち」とは誰でしょう？ 彼らが、教会ということはありません。なぜなら、イエスはペテロに向かって以下のように言われたからです。「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。」(マタイ 16 章 18 節)「反キリストが聖徒たちに戦いをいどんで打ち勝つことが許された」という「聖徒たち」とは、教会ではなくユダヤ人の聖徒たちのことを指すのです。

私は、教会が地上に残って、反キリストが地上で力を持つことを目撃するとは信じていません。現在の世界の国々のリーダーの中にすでに反キリストがいたとしても、私は驚きません。しかし、教会がこの地上に残って反キリストが暗躍するのを目撃するとは、信じていないのです。

テサロニケの手紙第二、二章で、パウロはこの「不法の人」「滅びの子」について語っています。パウロは以下のように宣言しています。「あなたがたが知っているとおりに、彼がその定められた時に現われるようにと、いま引き止めているものがあるのです。不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があって、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。」(Ⅱテサロニケ 2 章 6—7 節)

私は、キリストのからだである教会が地上にとどまっているのに、反キリストが地上に対する支配と権威を獲得するとは信じていません。教会におられる聖霊は、闇の力が世界をすべて呑み込んだり、制圧することを引き止めておられると私は信じています。しかし、キリストのからだである教会が引き上げられた瞬間、地上において闇の力を妨げるものも、または闇の力が完全に地上を制圧することを引き止めるものも、何もなくなるのです。この「引き止めるもの」が一挙に引き上げられるまで、闇の力を引き止めることになるのです。それから不法の人、滅びの子が現われるのです。だからこそ、私は誰が反キリストなのかを調べることに、時間を使おうとは思っていないのです。これは、サタンが仕掛ける数ある巧妙な惑わしの一つです。人々が反キリストを待ち受けるように欺き、キリストを待ち望むようにさせないのが、サタンの手口なのです。

ある人々が、預言が実現する過程を混乱させてしまうのは、過度に霊的解釈を施して「キリストのからだである教会」を「イスラエル」と混同してしまうからなのです。そのような人々がよく口にするのは「神はイスラエルの国と関係を断ったはずだ。なぜなら、彼らはメシアを拒絶したからだ。」というものです。彼らが信じているのは「神はイスラエルを見捨てて、キリストのからだである教会を後継者としたので、現在では教会が『神のイスラエル』である。」といったものです。彼らは、イスラエルに言及している預言を利用して「教会」に当てはめているのです。そんなことをしたら、預言が示す全体像を混乱させることになります。

今朝、太陽が昇るときにも、神のイスラエルに対する契約は不動なのです。主は言われました。「日が昇る限り、わたしのイスラエルに対する契約は変わりはない。」神は、イスラエルを見捨てられたのではないのです。ホセア書で、神は言われました。「彼女のところに戻り、彼女を迎え入れなさい。彼女を洗って整えて再び迎えなさい。」ダニエル書九章では「それでも神は、直接イスラエルを取り扱われるときに、彼らに対して『七年の約束』を満たされる。」と書いてあります。

携拳は、旧約聖書の中にも記述されています。大洪水以前に生きていたエノクは、生きたまま天に昇った者であり、彼は教会のひな型なのです。私は、ダニエルも教会のひな型であると信じています。覚えているでしょうか。ネブカデネザルが大きな自分の像を建立させて、人々にそれを拝むことを強制したときのことを……。私は、この大きな像は、反キリストが作って神殿の中に据え、人々に拝むことを強制する像に相当すると信じています。ネブカデネザルは音楽を流すときに、すべての者たちに大きな自分の像を拝むことを命じたのです。そこで、音楽が流れると人々はひざまずきました。しかし、シャデラクとメシャクとアベデ・ネゴはその命令を無視したのです。あるカルデア人たちは、そのことをネブカデネザルに報告しました。「ちょっと聞いてください。頭を下げない三人のヘブル人の若造がいます。音楽が流れても、彼らは立ったままです。」

そこでネブカデネザルは、三人のヘブル人の青年たちを呼び出して言いました。「私が聞いたことは事実か？ お前たちは頭を下げなかったのか？ もう一度チャンスをやろう。けれども、そのとき頭を下げなかったなら、お前たちを火の燃え盛る炉に投げ込むぞ。」それに対して彼らは言いました。「王様。この件に関しては、あなたにお答えする必要もありません。なぜなら私たちが仕えている神には、あなたの『火が燃え盛る炉』の中から救うことができるからです。たとえ、神が救われなかったとしても、私たちは頭を下げはしません。」私は彼らの「気骨」が大好きです！ このような者たちを止めることができるものは、何もありません！

ネブカデネザルはひどく怒り、炉の温度をそれまでの七倍も熱くしました。三人のヘブル人は、高温の炉に投げ込まれました。そのとき、彼らを投げ込んだ役人たちは、炉の温度があまりにも高いので近づいただけで死んでしまったのです！しかし、シャデラクとメシャクとアベデ・ネゴに関しては、カルデア人が彼らを縛ったロープだけが焼かれたのです。ネブカデネザルは炉の中を見て尋ねました。「お前たちは、何人を炉の中に投げ込んだのか？」役人たちは答えました。「王様。三人です。」すると王は言いました。「では、なぜ私には四人に見えるのか？ 彼らは、炉の中を歩き回っているのではないか！ 四人目のひとは、神の子のように見えるぞ。シャデラクとメシャクとアベデ・ネゴ、そこから出てきなさい！」

彼らがそこから出てきたとき、髪の毛一本も焦げてはいませんでした。煙の臭いさえしなかったのです！ みな非常に驚きました。そこでネブカデネザルは、次のように宣言しました。「私は宣言する。シャデラクとメシャクとアベデ・ネゴを、火の燃え盛る炉から救い出すことのできる神は、この神を除いてこの地上には存在しない！」

しかしこの事件が起こったとき、いったいダニエルはどこにいたのでしょうか？ ダニエルが、ネブカデネザルの像に頭を下げるのが考えられるのでしょうか？ もしあなたがダニエルが頭を下げたと考えるなら、そのダニエルは私の知っているダニエルとは違います！ ダニエル書一章を思い出してください。ダニエルは、王から与えられる食事によって彼自身を汚すことのないように心に決めていたのです。私は、このように心に決めていた者が頭を下げるとは信じられません。おそらくダニエルは、このとき王の仕事で遠方に出かけていたのでしょう。ダニエルは、教会のひな型です。彼は、反キリストが神殿の中に自分の像を据えて、すべての人たちに拝むことを強制する前に取り去られる、教会のひな型なのです。私たち教会はそれ以外の場所で、つまり天において成すべきことを行なう存在なのです。

大患難は、神ご自身によってもたらされることにあなたが気づくなら、神が前もって神の民を大患難から除かれることは明らかです。神が、正しい者を悪い者とともにさばかれるということは正しくありませんし、神のご性質に矛盾します。

ペテロは言いました。「(神は) 昔の世界を赦さず、義を宣べ伝えたノアたち八人の者を保護し、不敬虔な世界に洪水を起こされました。」(Ⅱペテロ2章5節) 神は義人を救い出し、神を恐れない悪者の上に大洪水を下されました。これがさばきというものです。さばきは、神を恐れない悪者を対象としているのです。「また、ソドムとゴモラの町を破滅に定めて灰にし、以後の不敬虔な者へのみせしめとされました。」(Ⅱペテロ2章6節)しかし「(神は、) 無節操な者たちの好色なふるまいによって悩まされていた義人ロトを救い出されました。というのは、この義人は、彼らの間に住んでいましたが、不法な行ないを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたからです。これらのことでわかるように、主は、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、不義な者どもを、さばきの日まで、懲罰のもとに置くことを心得ておられるのです。」(Ⅱペテロ2章7—9節)これは神の目的をはっきりと示しています。

私は以下のように信じています。旧約聖書の中に登場するロト、ノア、エノク、ダニエルに共通することは、大患難のときに教会は地上に存在しないという真理を示しているということです。

みことばは素朴に述べています。「神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではな

く、主イエス・キリストにあつて救いを得るようにお定めになったからです。)(I テサロニケ 5 章 9 節)「ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。)(ローマ 5 章 9 節)そして「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。)(ローマ 1 章 18 節)しかし、これは神の子のことを記述しているのではないのです。

神がどの時代の教会にも「今が終わりのときだ。」と受け取るように願っておられると、私は信じています。これを信じることは三重の効果があります。まず第一に、福音を告げる働きに切迫感を与えます。私たちにはあまり時間がありません。ですから「いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。)(ヘブル 12 章 1 節)私たちは、神からやるように呼ばれたことに対して、すみやかに行動に移す必要があります。私たちの働きは急を要するのです。私たちは、良き知らせのメッセージを伝える必要があります。なぜなら、あまり時間がないからです。主はすぐにもどって来られるのです！

第二に、終わりの時代だと信じることは物質的なものに対して、正しい視点を与えてくれます。物質的な世界は、いつか燃えてなくなるのです。私たちは、物質主義の世の中にすべてのものを投資したとしても、それらすべてを失うこととなるのです。「自分の宝は、天にたくわえなさい。)(マタイ 6 章 20 節)主が言われたのは「富という不正のものを、永遠の目的に従って使いなさい。」ということです。もし、神があなたを経済的に祝福されるなら、それは素晴らしいことです。しかし、あなたが祝福されたものを永遠の目的に従って使う必要があります。イエスが今にも戻って来られるという認識は、霊的な事柄と物質的な世の中との正しいバランスを与えてくれます。私たちは、物質世界はすみやかに過ぎ去ってしまい、永遠に関わる事柄だけが永続することを認識しています。私たちの一度限りの人生はあっという間に過ぎ去ることと、この地上でキリストのためにしたことだけが永続することを知っておかなければならないのです。以上のことが、私たちに物事を正しく見る観点を与えてくれるのです。

第三に、なぜイエスは、どの時代の人々にも「この時代こそが終わりの時代だ。」と信じて欲しいのでしょうか。それは、そのように信じるのが人々の人生の中に聖さを持続させるからだ、私は確信しています。イエスは言われました。「主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。)(マタイ 24 章 46 節)私は、主イエスが戻って来られるときに、私がポルノ映画を見ているところや、インターネットのアダルト系サイトを覗き見しているところを、主に見られたいとは思いません。想像力を働かせてみてください！ イエスがいつ戻って来られてもおかしくないことを信じるのが、私たちの人生を聖く持続させるのです。主は、今日にでも戻って来られます！ 「主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。)(ヨハネは言いました。「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。)(I ヨハネ 3 章 2—3 節)以上の知らせは、私たちに清くなる望みを与えるのです。ですから私は、イエス・キリストがすぐにも戻って来られるということ、一歩も譲歩せずに信じる姿勢を持続させることが大切である

と信じているのです。

天の主が、私をそばに置いてくださるために戻って来られ、私を一挙に運び去ってくださることを、私は待ち望んでいます。主は次のように言われたのですから。「あなたがたは、やがて起ころうとしているこれらすべてのことからのがれ、人の子の前に立つことができるように、いつも油断せずに祈っていなさい。」(ルカ 21 章 36 節)これが私の祈りであり、私の希望です。そして、何よりも私をわくわくさせるのは、いつそのことが起こってもおかしくないということです！

どの時代の教会にも、主は以上のように予期してほしいと願っておられると信じています。

そして、私が信じることは、私たちの偉大なる神と、救い主イエス・キリストが栄光のうちに現われるという望みが、どの時代の教会に対してもリバイバルの導火線になったということです。

私たちにはあまり時間が残されていないという事実が、今日のリバイバルの引き金になるのです。

主はすぐに戻って来られます。私たちは、時代の崖っぷちに生きているのです。パウロは、次のように言いました。「あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行いなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。」(ローマ 13 章 11 節)

神が、この祝福された望みを持ち続けることと、この希望をすべての人々(民族)にもたらすために、私たちを助けてくださいますように。

この希望を、すべての民族にもたらす目的は、

- ①彼らが、以上の切迫した状況を知って、イエス・キリストのために、完全に生きるため。
- ②彼らが、神と逆方向に心を捕えて引っ張る世の中に対して、優先順位を正しく保つため。
- ③彼らが、聖く生きるため。
- ④彼らが、イエス・キリストは今すぐにも来られることを知ることで、彼らが心と人生を聖く保ち、主に仕えるため。

私は、いつイエス・キリストが来られてもいいように、主にお会いする準備を注意深く整えていたいのです。逆に何事であれ、私自身を引き下げることや、神と逆方向に進むようなことはしたいと思いません。私は主のために準備をしたいのです！

私は、携挙についての教えを宣べ伝えることが、とても大切であると確信しています。それによって人々が日々の生活の中で希望をもって、また注意深く生きるようになるからです。この世の中に、これらの希望以外にいったい希望と呼べるものがあるのでしょうか？ 私たちは「もっと良い日が来る」という真理に、人々の意識を向けさせる必要があります。準備をしましょう！

主はご自分の民のために戻って来られます。そして主は私たちを、主ご自身のそばに置くために引き上げてくださるのです。

第九章 聖霊によって始まった

「何事かを自分のしたことと考える資格が私たち自身にあるというわけではありません。私たちの資格は神からのものです。神は私たちに、新しい契約に仕える者となる資格を下さいました。文字に仕える者ではなく、御霊に仕える者です。」(Ⅱコリント 3章 5—6節)

カルバリー・チャペルは、聖霊によって始められた働きです。神が行なわれたすべての偉大な働きは、聖霊によって生まれたものです。

私たちがキリスト教会の歴史と、さまざまな偉大な神のムーブメントを吟味するとき、それらすべての良きものは神の霊によって生まれたことがわかります。しかし歴史をたどってみると、神が行なわれた偉大な働きは聖霊によって生まれたにも関わらず、結局は肉によって完成される場所へ向かう傾向にあります。これは、キリスト教会史の中で何度も繰り返されてきたように思えます。かつて聖霊によって起こされたムーブメントは、形式主義によって死に至るのです。

形式主義とは、決まりきった考え方を引きずって出来た車輪の跡のようなものです。車輪の跡も墓場も、ともにいのちのないものです。違いといえば、その長さと深さだけです。その車輪の跡は、死にゆく体を延命装置によって辛うじて生かしているようなものです。それと同様に、教会にも車輪の跡(形式主義)を守ることにエネルギーを浪費している姿が重なります。すべての目的を、そのムーブメントが死なないことに集中させてきたかのようです。もしそのプログラムがそれ自体によって生き残ることができないなら、最も憐れみ深い選択肢はそのプログラムを死ぬままにさせておくことだと、私たちは信じています。

士師記を開くと、何度も神に対して背信を繰り返すイスラエルの姿が登場します。イスラエルの子どもたち(民)が、主の目に悪いことを行ない、そのたびに主が彼らを敵に渡されるのを見るとうんざりします。彼らは敵に隷属するようになり、その後四十年も経つと彼らは主に叫ぶのです。神が彼らの叫びを聞かれ、彼らを解放する者を遣わされると、その後しばらくはうまく行きますが、イスラエルの民が主の目に悪いことを再び行ない、その結果として彼らは敵に隷属することになるのです。私たちもこれと同じようなサイクルを、自分自身の人生に見出すのです。物事がうまく行き始めると、私たちは怠慢になる傾向があります。そして、私たちが再び問題の中に落ちると、主を呼び求めるのです。私が士師記を読むたびに、わたしはイスラエルの民に対して腹が立ちます。私は心の中でこう言います。「なんでおまえたちは、主に背を向けることができるんだ？ 自分の周りの状況が見えないのか？ 同じことの繰り返しが起こっていることに気がつかないのか？」

私が教会史を調べるとき、これと同様なことを発見します。神はある新しいムーブメントを起こされます。これは、聖霊によって生まれるのです。そこには興奮するものがあり、信仰を再び覚醒させるものがあります。力強く聖霊が働いておられるのです。近代のいくつかのムーブメントのことを考えてみてください。そのムーブメントでは、神は、ジョン・ウェスレーやマルチン・ルターなどのような人々をお使いになりました。彼らの人生の上に、聖霊の油注ぎがあったのは明らかなことです。しかし、今日におけるメソジスト教会やルーテル教会を見てみると、いくつかの例外を除いて、近代主義(現代科学に基づいて聖書を解釈する試み)を取り入れています。

聖霊の「飢饉」があるだけでなく、聖霊の力と賜物を否定する場合さえあります。しかし、ム一

ブメントは聖霊によって生まれたのです。そのようにして教会の歴史は進んでいくのです。神は、新しい働きを起こされ、新しいムーブメントを始められます。カルバリー・チャペルでは、先に述べたサイクルの始めの段階にあります。神の霊は過去も今も働いておられ、さらに新しい働きも起こされています。これは聖霊によって始められたことです。主がゼカリヤに言われた通りです。「『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の主は仰せられる。」(ゼカリヤ 4 章 6 節)

パウロは、聖霊によって始められたガラテヤ地方にある複数の教会に向けて、彼らをたしなめるために、次のように書きました。「御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。」(ガラテヤ 3 章 3 節) 神に選ばれた者たちが自分の力や知恵に頼らずに聖霊に頼るようにと、主は長い時間をかけてそれを確かなものにされるのです。神が成長させた上で使っておられる人が、他の人々を主に導くのはとても興味深いことです。

モーセはひとつの見本です。あなたは燃える柴の話を覚えているでしょう。神が彼を呼ばれたとき、モーセは冒頭から否定して言いました。「私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行ってイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならないとは。」(出エジプト 3 章 11 節) つまり、モーセは「主よ。私には自信がありません。私は何者でしょうか？ 私はこの荒野に四十年間もいるのです。」と言っているのです。私は、モーセは残りの生涯を、羊の世話をして簡素に過ごすつもりだったと思います。彼は、それが自分の宿命だと思っていたのです。ですから主が彼を呼ばれたとき、彼は答えて言いました。「私が何者だと言うのですか？ 主よ。私には、自信がありません。」

モーセがエジプトにいた頃、彼は自信に満ちて主に仕えようとしたのですが、主は彼を打ちのめされたのです。エジプトにいた頃のモーセが、神の導きを自覚していたことも興味深いことです。

ステパノは次のように言っています。「彼(モーセ)は、自分の手によって神が兄弟たちに救いを与えようとしておられることを、みな(イスラエル)が理解してくれるものと思っていましたが、彼らは、二回目の機会が訪れるまで理解しませんでした。」(使徒 7 章) これは、肉による働きと、聖霊による働きの違いを説明するためには格好の材料です。はじめにモーセは、神の働きを彼の肉の力で成し遂げようと真剣に務めました。けれども、彼自身の力で成し遂げたことと言えば、一人のエジプト人を葬ることに成功したくらいのことです。しかし、モーセが聖霊によって導かれたとき、イスラエルはエジプトの全軍隊を葬り去ることができました。

モーセの体験は、私たちほとんどの者にとって馴染みのあるものだと思います。私たちは、なんと多くの機会を肉で始めてしまうことでしょうか。私たちの人生で、神から呼ばれたと感じたことを肉で成し遂げようとするのです。しばしば私たちは肉で始めてから、うまくいかない自分に気がつくのです。ある人が肉で失敗すると、多くの場合、その人は荒野に向かって歩き出してミニストリーから離れてしまうのです。そして、彼は二度と戻っては来ないのです。彼はがっかりして打ちのめされてしまいます。なぜなら、彼は肉の力に頼って、心に感じた神の呼びかけを成し遂げようとするからです。

モーセも、まったく同じことをしました。彼は神の呼びかけを心に感じたのです。彼は、神がある目的のために彼を任命したことを知っていました。しかし、それから彼は気がつくやうに四十年間にわたって荒野にいたのです。この間、彼は「自分の存在価値」を見失いました。またモーセは、神が彼を通して何かできることがあるという自信も失いました。彼が、すべての原因は自分の側にある

と思っていたとき、彼は失敗したのです。しかし、モーセが神に対して否定的なことを言ったとき、神は次のように言われました。「(確かに、)わたしはあなたとともにいる。」(出エジプト3章12節)これは、私にとって光り輝くように素晴らしいことです！「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」(ローマ8章31節)

それで、モーセは主に答えて言いました。「ですが、彼らは私を信ぜず、また私の声に耳を傾けないでしょう。『主はあなたに現われなかった。』と言うでしょうから。」(出エジプト4章1節)つまり、彼は次のように言っているのです。「主よ。私は彼らに信頼されていません。彼らは、私のことを信じません。彼らは『主が、おまえに話すわけがないだろう。』と言うだけです。」この異議に対して、主は次のように言われました。「おまえが手にしているのは何だ？」モーセは答えました。「杖です。」神は言われました。「それを地に投げてみよ。」それからいくつものしるしを通して、主は彼とともにおられることを約束してくださいました。

出エジプト記四章十節で、モーセは主に言いました。「ああ主よ。私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。」つまりモーセは、次のように申し立てているのです。「私には能力がありません。上手く話せないし、口が重く、舌も重いのです。」この異議に対して、主は言われました。「だれが人に口をつけたのか。だれが話す能力を与えるのか？」神には、私たちの「能力のなさ」を乗り越えることができになります。そもそも主が、私たちの口を創造されたのですから。

そして、同じ章の十三節で彼は言いました。「ああ主よ。どうかほかの人を遣わしてください。」つまり、モーセは以下のように言っているのです。「主よ。だれか他の人を見つけて、その仕事をやらせてください。私にはそのような願望がありません。私はやりたくないのです。だれか他の人を見つけてください。」ここで、ついに主がモーセに対して怒り始めます。そして、主は代わりの案を示されました。神は、アロンをモーセの代弁者として使われました。しかし、これはあくまでも神の「代案」であったのです。これは悲しいことです。しかし、私たちもしばしば神のベストを受け損ねて、神にベストではない案を選ぶことを強制させてしまうのです。

私が信じていることは、神には「積極的な意志」と「仕方なく許可される意志」との両者があるということです。私は以下のように信じています。神は、私たちが同意さえすれば、私たちを最高の基準にまで引き上げてくださいます。神ご自身がその基準に引き上げるために、ベストを尽くしてくださるのです。しかし、私はこうも思います。しばしば私たちは、神の基準にまで昇るのではなく、逆に、神に私たちの基準を押しつけることがあるということです。私たちは、神を私たちが決めた基準に妥協するよう引き下げてしまうのです。

自信もなく神に対する信頼もなく、能力も意欲もなかったモーセという人間を得るために、神がつき合ったプロセスを思い出してください。しかし彼は、神の民を救い出すために、神によって選ばれたのです。

士師記を開くとわかるように、イスラエルの民は主の御前に悪を行ない、偽の神々を拝み始めました。そこで神は、彼らをミデヤン人の手に渡されました。ミデヤン人は、イナゴの大群のように地を覆っていました。イスラエルの民が植えた作物の収穫のときが来るやいなや、ミデヤン人は作物を奪ってしまうのでした。そこでイスラエルの民は、ミデヤン人のとりこになり下がっている惨め

な状態を嘆いて、主に向かって泣き叫び始めました。主は御使いをギデオンに遣わしました。そのとき彼は、ミデヤン人から隠れて酒ぶねの中で小麦を打っていました。主の御使いがギデオンに言いました。「あなたのその力で行き、イスラエルをミデヤン人の手から救え。わたしがあなたを遣わすのではないか。」(士師記 6 章 14 節)するとギデオンは答えました。「ああ、主よ。私にどのようにしてイスラエルを救うことができますよう。ご存じのように、私の分団はマナセのうちで最も弱く、私は父の家で一番若いのです。」(士師記 6 章 15 節)「主よ。あなたは、酒樽の底からクズを掻き出しているようなものです。私の家族は貧しく、私は家族の中で一番小さな者なのですから。」

彼は、自分には何の資格もないと思っていました。しかし現実には、彼は自分自身に資格を与えていたのです。なぜなら、神はそのような者を捜しておられたからです。神が使いたいと願われるのは、国を救う能力も器量もないと知っている者です。神に頼らなければ何ひとつできないことを知っている者を使いたいと願われるのです。神は、モーセをこれにふさわしい段階に導かれました。それは、神が彼を使うことができるためです。

私たちが自分の力に自信がないときに、もし何かの働きが成されるのなら、それは主によって成されたと知るのであります。私が神からミニストリーに呼び出されたと感じたとき、私はバイブルカレッジに行って準備をしました。バイブルカレッジの四年生のときに、学年委員長と自治会の会長をしました。私は学校のために運動競技のプログラムをつくり、多くのものを学校に与えることができたと感じていたのであります。その後、私がミニストリーを始めたときには、どこに行っても、成功に彩られた教会を建てるだけの資格と経験が、私にはあると確信していました。

私には、大いなる確信があったのです。しかし、主は私を搾り取るように徹底的に訓練されました。十七年間にわたり、成功が何もないという苦しみを味わうことを許されました。私は社会一般の仕事をして、家族を養わなければなりませんでした。それもこれも、ミニストリーを続けるためでした。もし私の人生の上に、主から呼び出されたという自覚がなければ、私はやめてしまっていたでしょう。実際に何度か、私は牧師としての働きから去ろうと試みたことがあります。しかし、主が私をミニストリーに戻されたのです。自分自身の能力に自信をもっていたので、主がこうしたことを起こされたのです。

私が主に与えるものは、本当に何もないというところに達するまで、私の人生の初期に失敗を重ねることを、主はお許しになりました。そして、私は素朴に聖霊に依存し、神に頼り始めたのです。それから、私は聖霊によって神が働かれるのを見ることができるようになりました。神の栄光を奪いたくなることもなくなりました。神は私を十字架に導かれ、そこで自分自身と私の野望をともに空っぽにされました。神が聖霊によって働かれるとき、神が何をなさるのかを眺めていることが喜びに変わり、スリルに変わるのです。

多くの場合、以上のような「空っぽにされる」過程が必要です。ギデオンが「私の分団はマナセのうちで最も弱く、私は父の家で一番若いのです。」と言ったとき、実は自分を資格のない者としていたのではなく、神が捜しておられた人間であることがはっきりしたのです。自分が勝利の手柄や栄光を取ることのない人、それだけではなく、神に栄光を帰する人を神は捜しているのです。

神がギデオンを使い、ミデヤン人を追い散らしやっつけたときに起こったある事件は、とても興味深いものです。民はギデオンのところへやって来て言いました。「『私たちを治めてください。』…

…しかしギデオンは彼らに言った。『私はあなたがたを治めません。また、私の息子もあなたがたを治めません。主があなたがたを治められます。』(士師記8章22—23節)このような者を神は探し求めておられるのです。

私は、神がダビデの周りに集められた男たちに注目します。彼ら全員が困窮して負債があり、不満を持っていたのです。彼らはダビデの周りに集まってきました。そして、ダビデは彼らのキャプテンになりました。彼らは四百人あまりの不満分子の集まりであり、敗者でした。しかし、神はこれらの男たちから強靱な軍隊を起こしたのです。

私は、神が私の周りに集められた男たちに目をとめます。そして神が使っておられる男たちを見て、気分良くクスクスと笑うのです。彼らは、ダビデの周辺にいた男たちのようです。彼らのある者は浮浪者や社会から相手にされない者でしたが、神が何をしてくださったかに注目してください。

神がエレミヤを呼び出したとき、彼は応答して言いました。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」(エレミヤ1章6節)イエスが彼の弟子たちを呼び出したとき、漁師や取税人をお選びになりました。主は、エルサレムにあるヘブライ大学に行って「さてガマリエル、あなたの頭の切れる最優秀生徒たちはどこかね？」とは言われませんでした。主は、ガリラヤ湖で漁師をしている男たちのところへ行かれたのです。

ですからカルバリー・チャペルは、神が社会から相手にされない者たちを使って素晴らしい働きをなさった最初の教会ではないのです。しかし悲しいことに、神が私たちを使い始められると、私たちは「神が自分を使われた理由」を自分自身の内側に探し始めるのです。私たちは肉で完成しようと試みるのです。

パウロはコリントの町に住む信仰者に宛てて書いた手紙の中で、以下のように言っています。「兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらん下さい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。」(Iコリント1章26節)パウロが神から選ばれた者たちのことを思い出してみたら、神が選ばれたのは、この世で資格があるとされる賢い人々、肉に従っている人々、権力がある人々、身分の高い人々ではないということに気がついたのです。パウロは続けて言いました。「しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものがない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。」(Iコリント1章27—28節)

彼は、コリント人への手紙第一、一章二九節にその理由を述べています。「これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。」神のすべての目的は、この世では評価されない資格のない者を選び、その者たちに聖霊によって油を注ぐことです。その結果がやがて現われると、この世にとっては驚きとなるわけです。神は、神の御前でたとえどんな者であっても誇ることを許されないのです。

ルカの福音書十章では、神の偉大なる働きが弟子たちを通して行なわれるのを見て、彼らが興奮して主のもとに戻ってきたことが書かれています。ちょうど弟子たちがそのことを話しているとき、イエスは霊によって喜ばれました。そして主は言われました。「天地の主であられる父よ。あな

たをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現わしてくださいました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。」(ルカ 10 章 21 節) イエスは、これらのことを賢い者や分別のある者から隠して、代わりに素朴な人々に現わして下さったことを、父に感謝しました。なぜなら、これが神の目にかなったことだからです。

私たちが聖霊で始まったものを、多くの場合、肉で完成しようと追い求めてしまうのは興味深いことです。カルバリー・チャペルの何人かの牧師たちは学校へ戻りました。いくつかの学校は、それらの牧師を迎えることを切に願っています。なぜなら、彼らがミニストリーにおいて成功しているからです。学校側としては、その学校のプログラム終了証書を牧師たちに受領してもらって、彼らを広告塔として使うことを願っているのです。そして、その牧師たちのミニストリーにおける成功の提携者になりたいのです。学校は彼らを得たいと切に願っています。そこで彼ら(牧師)に人生経験を単位として認定したのです。

牧師たちは授業を受けて、人生経験を単位として学位を取得できたのです。その学校は典型的な成功を取めている卒業生の中に、これらの牧師がいることを誇示するのです。何人かの牧師たちが学位を取得するためになぜ学校に入ったかと言うと、常々「どのような学位をあなたは取得したのですか？」と聞かれて困り「いいえ、何の学位も持っていません。」というのが恥ずかしいからです。

「どの神学校に行かれたのですか？」

「私は、神学校に行っていません。」

「どの大学に行ったのですか？」

「いいえ、高校も中退なのです。」

あなたが、何の教育の背景もないことを認めるのは恥ずかしいことです。「人名年鑑」が、あなたをある年の号に載せるとき、彼らは「あなたが在籍した大学で、どのような資格を得たかを知らせて欲しい」という手紙を送ってきます。なぜなら、人間というものは「ねえ見て。この人は博士号を持っているよ。」と言うのを望む傾向にあるからです。なぜか、私たちは自分で完全になれる、肉にあって自分を整えることができるとしてしまうのです。私たちが聖霊によって始まったのなら、御霊によって歩み続けることでしか成功する道はないのです。

マタイの福音書十一章二五節で「イエスはこう言われた。『天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現わしてくださいました。』」興味深いことは、私たちが自分の賢さや分別によって神の真理の啓示を理解できるという態度が、私たちの資格を逆に奪ってしまうことです。イエスは、父が賢い者や、分別がある者に真理を現わしたのではなく、幼子に現わしたことを喜ばれました。それは、神が栄光をお受けになるためです。

ギデオンが、ミデヤン人に打ちかかって行く準備ができたとき、数の上では負けていました。そこには、少なくとも十三万五千人以上のミデヤン人がいました。それに対して、ギデオンが最初に召集した人々は三万二千人でした。しかし、神は言われました。「あなたといっしょにいる民は多すぎるから、わたしはミデヤン人を彼らの手に渡さない。イスラエルが『自分の手で自分を救った。』と言って、わたしに向かって誇るといけないから。」(士師記 7 章 2 節) 主が言われたのは、三万二

千人ではギデオンは敵と戦うことはできないということでした。神は人を通して働かれないのです。働かれたことに関する栄光はご自分のものとされたいということです。この世の素朴な人々を使って、この世の賢い者を当惑させたいのです。人々はただ眺めて頭を振って言います。「理解できないなあ。でも神の油注ぎは彼らの上にある。神は確かに彼らを使っておられる。」神は素朴な人々を見つけることができないために、ご自分のなさりたい働きを何度妨げられたことでしょうか。そこで神の手元にあるのは、博士号の群れだけなのです。

さて、私は知性が足りない者として批判されてきました。カルバリー・チャペルでさえ、知性が足りない者の集まりという烙印を押されています。その責任は私にあるのでしょうか。しかし、私は謝りません。私は教育が必要だと信じています。私自身の人生を見ても学習の連続でした。聖書はこう言っています。「あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励み(学び)なさい。」(Ⅱテモテ 2 章 15 節)私が信じるのは、神は人間という道具を使われるということ、そして、使われる道具を整えられるということです。私は、神のことばによって整えられることが大切だと信じています。しかし、単に人間の能力によってそれがなると言っているではありません。本当の教育は、この世の知恵によってなされるのではなく、聖霊から与えられる導きや知恵によってなされるものです。

弟子たちが、宗教議会の場に立たされたとき、指導者たちは弟子の聖書の理解力に驚きました。

彼らは、弟子たちがイエスとともにいたことに気がつきました。それと同じように、私たちがみことばを読む中でイエスとともに時間を過ごしたら、礼拝やミニストリーにふさわしい者としての必要をすべて得ることでしょう。あなたには四年間の修士神学コースや博士号は必要ないのです。多くの場合、そのような資格は祝福の代わりに邪魔になります。私は「博士・先生」という肩書きは、人々とあなたの間を壁をつくってしまうと思います。それは、あなたが彼らに効果的に仕えることを邪魔します。人々があなたのことを「先生」と呼んだ途端、あなたは、あなた自身を特殊な人として、彼らの上に祭り上げられてしまうことになり、彼らは劣等感を味わうのです。あなたは彼らの心を開きにくくしてしまい、仕えることができない状況に身を置くことになるのです。

一年に一度、私たちは牧師のカンファレンスのためにミーティングを開きます。そこには、ラウル・リース、マイク・マッキントッシュ、グレッグ・ローリー、スキップ・ハイザック、その他数名の牧師が集まります。ラウルとマイクが博士号を取得した後のミーティングでのことですが、他の出席者が彼らのタイトルをからかいました。「ラウル・リース博士先生とマイク・マッキントッシュ博士先生」。私たちは、彼らをわざと困らせたのです。そのとき、出席者のひとりが言いました。「おまえさんたちが、それ相応の学校に行くことができ、十分な教育を受けることができれば、おまえさんたちの教会のサイズも管理しやすいものに縮小できるんじゃないかなあ。」

私は、このコメントは最高なものだと思いました。なぜなら聖霊によって始められたのに、肉によって完成を目指そうとするなら、あなたは神がそれまでになさったことだけではなく、そのときなさろうとすることさえも妨げてしまうからです。唯一の道は、御霊にあって従い続けることなのです。**聖霊によって始められたのですから、聖霊によって続けましょう！** 神に感謝できることは、ラウルは今もラウルですし、マイクは今もマイクのままだということです。彼らは、自分たちの限界も無力

さも知った上で、全面的に聖霊に頼っている者たちです。

主はエレミヤに言われました。「知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな。富む者は自分の富を誇るな。誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。」(エレミヤ 9 章 23—24 節) つまるところ主を知ることだけが大切なことなのです。

「わたしは主であって、地に恵みと公義と正義を行なう者であり、わたしがこれらのことを喜ぶからだ。——主の御告げ。——」(エレミヤ 9 章 24 節)

だからこそ、神は私たちのような、どう見ても資格のない者たちを選ばれ、聖霊で満たされるのです。そして、私たちを通して力強い働きをなさって、この世に驚きを与え、この世を当惑させるのです。私たちは、神が私たちを使われた理由を自分の中に探すような愚かさにはまってはならないのです。もし、その愚かさの中にとどまるなら、神がしてくださったことを誇るよりも、自分自身を誇ることになってしまうからです。

パウロは、コリントの人々に宛てた手紙の中で次のように言いました。「いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」(I コリント 4 章 7 節) あなたが他の人よりも、何かをもっと多く持っているとも言えるのでしょうか？ あなたが持っているすべてのものは、神から賜物として受けたものなのです。もし、あなたが神からそれを受けたのなら、なぜ誇ろうとするのですか？ あたかも自分は特別で、神から何も受け取っていないかのように……。

第十章 愛が最優先される

「もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」(ヨハネ 13 章 35 節)

愛がなくては、すべての賜物や聖霊の力は無意味になり、価値のないものになってしまいます。

「たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいドラや、うるさいシンバルと同じです。」(I コリント 13 章 1 節) パウロがここで言っているのは、異言を語ることに強調点を置いて、その賜物が聖霊のバプテスマや、聖霊の満たしを受けた、最も大切な証拠と見なす人々がいるということです。しかし、もしその人たちが愛を持っていないのなら、異言を語ることはシンバルやトライアングルから生じる騒音と同じぐらいの意味しかなく、雑音以外のなにものでもないのです。異言は何かの証明でも、何かの証拠でもありません。それは聖霊の臨在の証明である、最も大切なものを持っているという可能性を示唆したとしても、愛がないのなら全く何も証明することにはならないのです。それは、ただのやかましいドラやうるさいシンバルと同じなのです。雑音以外のなにものでもなく、何も証明しえないのです。

すべての正統派の教義や聖書の理解は、愛がなければ全く価値のないものです。たとえ私が「三位一体」「神の主権」「人間の責任」などの偉大な奥義を理解したとしても、愛がなければ、それらの理解は役に立たないのです。もし私が、人々に取り入って自分を売り込み、自分に引き込むのなら、私の純粋な教義は何の益ももたらしません。すべてのことは、愛がなければ虚しいので

す。

私は以下のような結論に至りました。私が正しい態度を持っているほうが、正しい答えを持っているよりも重要であるという結論です。もし私の答えが間違っているとしても、神は主の真理によって一瞬のうちにその答えを変えることができます。しかし多くの場合、ある態度を変えるのには一生かかるのです。「正しい態度」と「間違った答え」の組み合わせのほうが「正しい答え」と「間違った態度」の組み合わせよりも優れているのです。このことを覚えておいてください。特にあなたが近い将来、誰かと教義の立場やトピックなどで議論になったときに、覚えておいて欲しいのです。

私たちに対する神の最高の願いは、私たちが神の愛を体験し、その愛を他の人々に分かち合うことです。イエスは言われました。「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」(ヨハネ 13 章 34 節)これが、最も大切な命令なのです。それから、主は言われました。「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現わします。」(ヨハネ 14 章 21 節)ヨハネは言いました。「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。」(Iヨハネ 4 章 20 節)そして、彼は以下のように質問しています。「どうして神の愛がとどまっているでしょう。」(Iヨハネ 3 章 17 節)

ヨハネは、彼の最初の手紙で神の命令を守ることについて、多くのことを語っています。私たちが神から聞いた命令とは何でしょうか？ それは私たちが互いに愛し合うことです。

私たちが、信仰者の交わりやグループに仕えるとき、それが家庭集会であろうと一万人の教会であろうと、私たちの大きなテーマのひとつは互いに愛し合うことです。その愛は、私たち自身の行動や態度や人生によって表明される必要があります。すべての人々が、私たちの内にあるキリストの愛が表わされる場所を見ますように。パウロは、テモテに言いました。「ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい。」(Iテモテ 4 章 12 節)常に他者を理解することと、深い思いやりとを探し求め、イエス・キリストの思いやりを通して人々を見るようにしましょう。

私は、思いやりへの鍵は理解することだとわかりました。エゼキエルが言いました。「彼らの中にとどまっていた。(新欽定訳では I sat where they sat. = 私は彼らが座しているところに座る。)」(エゼキエル 3 章 15 節)これを実行してみようとする、少なくともあなたの思いの中でやってみることは、とてもよいことだと確信しています。あなた自身がその人の立場になってみるのです。その人の人生の状況にあなた自身をすりあわせるのです。その人の目線に自分の目線を合わせるのです。彼の立場から物事を見るのです。私たちは、常に自分のサイドからしか物事を見ないものです。しかし、その人のサイドからものを見ることを試みるのです。

ときどき私たちを苛立たせる人々がいます。なぜなら彼らの態度やキャラクターが、私たちを不快な思いにさせるからです。私は、ジェームス・ドブソン博士が、以前に次のように言っているのを聞きました。彼が通っていた学校に大嫌いなヤツがいたそうです。そして、その人も若きドブソン博士のことが大嫌いでした。卒業するまで互いに我慢のならない間柄でした。それからしばらくして、ドブソン博士はある大会で、例のいやなヤツを見かけました。彼はその人に臆せず直向きなけ

ればならないことを悟りました。そこで、彼はその人が自分を苛立たせたところと、嫌いなところを一つ一つ書き出しました。博士がその人に出会ったときに言いました。「実は、告白しなければならないことがあるんだけど……、学校に通っている間、おまえさんのことが大嫌いだったんだ。この紙に書いたのがその理由だよ。」すると、彼はそのメモに書いてある嫌いな理由に目を通してから言いました。「あのねえ。まったく同じ理由で、俺もおまえさんのことが嫌いだったんだ！」ドブソン博士は、もう一度自分が書いた「嫌いな理由」を見つめて、自分の鏡を見ていたことに気がつきました。私も、以上のことが真実であることに気がついていました。そしてこれは大変面白いことでもあります。

私たちのうちにある嫌いな特性は、私たちが忌み嫌う他人のうちにある特性でもあるのです。その嫌いな特性が、自分のうちにあることには寛大ですが、嫌いな特性を他人のうちに見つけると我慢できなくなるのです。彼らは私たちが苛立たせ、私たちの神経を逆なでします。ですから、理解するということは、思いやりのとても大切な一部なのです。

何年もの間、私は青少年キャンプを指導するために、私の休暇を消化してきました。これは、私の人生における大好きな体験のひとつです。それらは、私が望むことができる最高に素晴らしいときでした。私の家族も同行するのが常でした。彼らも、田舎の素晴らしさを楽しむ機会を持ちました。ケイは私によく言ったものです。「でも、あなた……これでは、あなたの休暇がないじゃないの。」それに対して、私はこう言ったものです。「いやいや、私は十分に休んだよ。」

さて、青少年キャンプを指導するときに、人をイライラさせる子どもたちがいるものです。もしあなたが彼らに「座りなさい。」と言えれば彼らは立ち上がり、あなたが「立ちなさい。」と言えれば、彼らは席についたままです。もし、あなたが「木に向かって石を投げないようにね。木の皮に傷がつくと、そこからてんとう虫が入り込んでしまうからね。」と言えれば、きまって以上のようなタイプの子どもたちを捕まえる結果になります。彼らは必ず逆らうのです。あるとき、私のもとにキャンプのカウンセラーたちが来て言いました。「チャック、この子を他のカウンセラーに変えてくれませんか。もう私は責任を持ってません。このままだと、私がこの子に何をかわかりませんよ。たぶんぶっ飛ばすかもね。もう、こいつには我慢できないんです。」

そこで、私は言ったものです。「私のもとに連れて来なさい。」もちろん若いカウンセラーたちは、その子の首根っこを押さえて意気揚々と連れて来て言います。「この子が、私たちが話していた張本人です。」私は言いました。「何を飲みたい？ コーラか、セブンアップか、オレンジソーダか、何がいい？」私は彼をスナックの売店に連れて行き、飲み物と彼の大好きなキャンディバーをあげるのです。最初、彼が連れて来られたとき、彼の中にある反抗的態度は「けっして何も言うものか。」といったものでした。そこで、私は彼の防御システムを壊し始めるのです。これは驚くべきことですが、キャンディバーと摂取された糖分は、その防御システムを分解するのです。私は、彼がずっと積み重ねてきた壁を壊すのと同時に、彼に興味を示し始めます。そのやり取りは、こんな感じで行なわれます。

「ねえきみ。どこから来たの？」

「ブラック・キャニオンだよ。」

「ブラック・キャニオンってどこにあるの？ それって、バーデ川のそばかい？」

「そうだよ。」

「そうか、そうか。学校には行ってるかい？」

「うん。」

「ねえ。きみの家族についてちょっと教えてくれるかな。お父さんは、どこにいるの？」

「ぼくには、お父さんはいないよ。」

「えっ。何かあったのかい？」

「ぼくにはよくわからないけど、ぼくにはお父さんはいないのさ。」

「そうか……それは、きっとつらいだろうね。」

あなたが耳を傾け始めると、彼の母親がバーで働いていることや、毎晩彼女が見知らぬ男を家に迎えていることや、この子がほったらかされていることなどを知ることになります。家に来る男たちは彼に親切ではありません。そこで、この子は彼らのじゃまをしないことを学習してしまうのです。彼の母親も、自分の子どもに興味を示さないのです。この子の背景が明るみになるにしたがって、あなたの心は深い思いやりを持つようになります。この可哀想な小さな子には、何のチャンスもないのです。彼は、彼を取り巻く世界に対して、憤りを積み上げて怒っているのです。それらの壁を積み上げることを学んできたのです。誰かが彼に近寄ることなどけっしてさせません。自分で自分を守らなければならないのです。彼のために気を遣ってくれる存在は、彼自身しかいません。これであなたには理解できたことでしょう。彼がなぜあのように応答し、反応していたかに気づくのです。

それから、私はキャンプのカウンセラーのところに戻って、彼と腰掛けてからこの小さな子どもの人生に何が起きているかを分かち合います。私はこのカウンセラーに「思いやり」を与えたいのです。私はしばしばカウンセラーにこのような子を助けるため、そばにいてあげるようにアドバイスしたものです。また、この子に責任を与え、彼を見守ってあげるように伝え、十分にサポートするようにアドバイスしました。これは驚くべきことなのですが、たった一週間の深い思いやりで、その子は変わることができたのです。

あなたも牧師として、会衆の中に同じように感じる人々がいるはずですが、あなたは、できれば彼らを消し去りたいと思っています。しかし思いやりが必要なのです。彼らと知り合うのです。どこにトゲがあるのかを理解し、何が彼らをいらつかせるのかを理解するのです。もしあなたが彼らを理解することを求めるならば、あなたは思いやりを持ちます。あなたは彼らに真実に仕えることができます。心から思いやりを持ってない相手に仕えることはできません。聖書の中で、あなたは何回読んだでしょう？ イエスが人々の必要を見て取られたとき「そしてイエスは、かわいそうに思われた。」と書いてあることを……イエスは(人々の)必要を理解しておられました。主は誰からも証言してもらう必要がありませんでした。なぜなら、主は人の中にあるものを知っておられたからです。ただ、主は思いやりを持っておられたから「人々をかわいそうに思われた。」のです。ですから、理解することを追い求めましょう。

イエスは、彼の弟子たちに言いました。「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るため……」(ヨハネ 15 章 16 節) 聖霊の実は、愛です。主が、あなたをお

選びになったのは、実を結ぶためです。ヨハネの福音書十三章三四節で、イエスが弟子たちに、ご自分が愛したように互いに愛し合うように言われたすぐ後に、以下のように言われました。「あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。」(ヨハネ 15 章 8—9 節)ですから、私たちは神の愛の絶大な力をはっきりと見る事ができるのです。

第十一章 バランスを求める

「あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。」(Ⅱテモテ 2 章 15 節)

カルバリー・チャペルフェローシップ(群れ)の大切な特徴のひとつに「あまり重要でない事柄で、神の民を分裂させたくない。」というものがあります。だからといって、私たちに強い確信がないというわけではありません。聖書が明らかに語っていることは、私たちも実行しなくてはなりません。しかしそれ以外の事柄では、私たちは(神学的に)異なる両陣営の主張に対して、霊的な正当性を認めようと努めます。また、両陣営のどちらかの主張を無視したり、えこひいきをしないように努めています。

この種のすべての立場を取り込む方法の例として、聖霊の働きに関する論議があります。私たちは、典型的なペンテコステ派のような見方をしません。また、典型的なバプテスト派のような見方もしません。あなたが、どちらかの陣営の見方を採用した瞬間に、あなたは半分の会衆を失うこととなります。なぜ、あなたは半分の会衆を失いたいのですか？ 私たちは、なるべく広く多くの異なったグループの人々に仕えたいと願っています。どんなことでも基本的な事柄以外で強硬路線に立った瞬間、私たちは会衆の中のある人々を疎外してしまいます。本質的な信仰に関する教義については、私たちは堅く立たなければなりません。しかし本質的な教え以外では、人々が違う見解を持つこともあることを受け入れます。そのことを恵みの霊によって受け入れるのです。私たちが、違う意見があり得るという事実に同意できると同時に、それでもなお、一致と愛の霊を維持することもできる、と気がつくことはとても重要なことです。

私たちは、聖霊の賜物の正当性を信じています。そしてこれらの賜物は、今日でも表現されることはあり得るとも信じています。しかし聖霊の賜物を用いる時に、しばしばそれに伴う行き過ぎた行為までを信じてはいません。ですから私たちは論争になることは避けるのです。

もし人々が異言によって語ることを望むなら、彼らに主を求める私的な集まりの中で、彼らの愛、賛美、祈りを神に伝える助けのために用いることを励まします。私たちは、コリント人への手紙第一、十四章を聖書的な模範と捉えています。異言こそが聖霊のバプテスマの最も大切な証拠だと主張することはありません。異言よりも、もっと信頼できる証拠があると信じています。パウロは言いました。「たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。」(Ⅰコリント 13 章 1 節)私たちは、聖霊のバプテスマの一番大切な現われとして、異言を強調しませんが、御霊の実としての愛を求めています。私は次のように信じ

ています。私たちは確固たるみことばの基礎に立って、それを実践すると同時に、人々に異言の賜物を受けることを励ますこともできるということです。

パウロが説明したように、あなたが個人で祈るとき、主を求めるとき、そして主に向かって歌うときに異言を使ってよいのです。「もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈るが、私の知性は実を結ばないのです。ではどうすればよいのでしょうか。私は霊において祈り、また知性においても祈りましょう。霊において賛美し、また知性においても賛美しましょう。そうでないと、あなたが霊において祝福しても、異言を知らない人々の座席に着いている人は、あなたの言っていることがわからないのですから、あなたの感謝について、どうしてアーメンと言えるでしょう。」(I コリント 14 章 14—16 節)もし、あなたが公の会衆の集まる場に居合わせ、異言の解釈もなかったとします。そして、誰かが異言で語り始めるのです。そうしたら、どうしてその場に座っている初心の者が理解できるでしょうか？ あなたは神を賛美することになるかも知れませんが、他の人々の徳は高まりません。私たちは、すべてのことを適切に秩序をもって行なう必要があります。

この分野では、私たちはペンテコステの分類には当てはまりませんし、また、今日における聖霊の賜物を確かに体験することを否定する、セシオニストたちの分類にも入らないのです。

(神学的に)異なる両陣営の討論に対してバランスを保つためのもう一つの例は、カルヴァン主義に対するものです。この分野では、人々は非常に感情的になります。私たちは、五つの要点をまとめたカルヴァン主義(選biを強調)でもなく、またアルメニアン(信仰を強調)でもありません。私たちは、信仰者に与えられる保証について強く信じます。私たちは、あなたが感情的にカッとしてしまったから、また、あなたが嘘をついてしまったからといって、救いを失うことになるとは信じていません。そして、それゆえに翌週の日曜日の夕拝で講壇のそばに進み出て悔い改めて、もう一度救われる必要があるとも信じていません。

私たちは、信仰者に与えられる保証について信じていますし、また同時に「聖徒たちの忍耐」についても信じています。私たちは、あなたが聖徒であるから必ず忍耐できるということ信じません。逆に「あなたは聖徒だからこそ、忍耐する必要があります。」ということ信じます。イエスは言われました。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。」(ヨハネ 8 章 31 節)「だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。**あなたがたがわたしにとどまり**、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」(ヨハネ 15 章 6—7 節)人間がキリストにとどまれない可能性があることを指摘したのは、キリストご自身なので、私たちは、片方だけに偏って五点に要約されたカルヴァン主義を強調するのではなく、バランスのとれた立場を選んで取ることを求めるのです。あなたが、以上のような根幹的ではない問題で頑固にこだわるのなら、あなたは教会からすべてのメソジストやナザレンや他のアルメニアンの影響を受けた人々を追い出してしまうことになるのです。そんなことを、あなたは望みますか？

信仰者の「永遠の保証」は、最善に解釈しても議論の余地ある事柄です。聖書の中には、両者とも書いてあります。あなたは、ヨハネの福音書三章十六節が与えられています。「だれでも、彼を信じる者は……」とはどういう意味でしょうか？ これは、つまりだれでも救われるという意味でしょ

うか？ 私にはそのような意味であると思われます。ですから、私たちは「イエスはすべての人のために死なれたのではなく、ただ彼を信じた人たちのために死なれた。」とするカルヴァン主義の立場を取りません。私たちは、主を信じることは、完全に神の絶対なる主権によることで、人間の責任とは何の関係もない、といったことを受け入れません。この立場は、神はある者を救いに定め、他の者を滅びに定めることを言明しているのです。もし、神があなたを滅びるように定めたのであれば、あなたにはお気の毒なことです。私たちには、もうどうすることもできません。これでは、私たちの善悪に対する選択自体の否定につながります。代わりに神は、私たちに選択する能力を与えてくださったと、信じています。神が私たちに選択する能力をお与えになった理由は、神に対して表現される愛が意味あるもの、リアルなものになるためです。以上が、私たちが取るバランスある立場です。

ある人々は、いつもカルバリー・チャペルを狭く区分しようとします。あなたは、永遠の保証を信じますか？ 私はこう答えます。「はい。もちろん永遠の保証を信じています。私がキリストにとどまっている限りにおいて、私は永遠に保証されています。」さて、それについて議論しましょう。もしあなたがイエス・キリストから離れたら、保証を得ることができるでしょうか？

私は、イエス・キリスト以外のいかなる(救いの)保証も知りません。しかし主にとどまっている限り、彼は私をつまずかないように守り、傷のない者として大きな喜びをもって、栄光の御前に立たせてくださるのです。誰も主の御手から、私を引き下ろすことはできません。私はそれを信じています。そして、神からの心休まる保証を味わっているのです。

しばしば、これらの論議は言葉の解釈論争のような次元にまで引き下ろされてしまいます。人々は、あげくの果てに数少ない言葉の解釈を巡って分裂してしまうのです。カルバリー・チャペルの信仰の導きを助けるグループの中に、あるスタッフがいました。彼がここにいたときには、多くの人々をキリストに導きました。不幸にも、この人は、苦い思いを持って私たちのもとから離れて行きました。現在この人は「聖書原理主義にはまった人の救済団体」というグループに属しています。彼は今では人々に、聖書を土台としたイエス・キリストを信じる信仰を捨てるように、熱心に勧めています。

彼は救われているのでしょうか？ 実際には、彼はキリストの敵です。もし私がアルメニアンだったら「彼は不信仰に逆戻りした。」と言うことでしょうか。もし私がカルヴァン主義の立場にあれば「彼はもともと救われていなかった。」と言うことでしょうか。さて、私たちは、同一人物について説明しているのに、両者は彼について説明している言葉遣いによって分裂が生じているのです。

私たちは、この事実を認識しています。この人は、イエス・キリストに背を向けたのです。それは明らかなことです。彼は信仰から後退したのでしょうか？ それとも救われていなかったのでしょうか？ 問題は、もし私が「彼は救われていなかったんだ。」と言うなら、私の救いもどこで保証されるのでしょうか？ どのようにして、私が救われていることがわかるのでしょうか？ 彼には救われている目印がありました。主に仕えたいという強い願いがありました。彼は、他の人々をイエス・キリストに導くことを求めています。私も主に仕えたいという願いがあり、他の人々をイエス・キリストに導きたいと求めています。ということは、私も救われていないのかも知れません。ですから、そのようなことでは私にとって保証にはならないのです。

ということは、もうおわかりでしょう。これは、ただの言葉の解釈論争なのです。私たちは、どのように、ある人と主との関係について観察したことを説明できるでしょうか？ すべての分裂は、私が彼は信仰から後退したと説明するか、それとも彼は救われていなかったと言うかにかかっています。もし、私たちが立場を分けるならば、当然分裂してしまいます。私たちは、半分の人々を教会から追い出すことになるのです。なぜなら私が「彼の信仰は後退した。」と言うなら、次に発言する人が「彼は一度も救われていなかったんだ。」と言うからです。もし、私たちがこのような論議を戦わせるなら、教会は二分してしまいます。

だからこそ、私はこの件に関して、一方の教義を押しつける立場に立たないのです。なぜなら、聖書は「神の主権」と「人間の責任」の両面を教えていると信じているからです。もしあなたが、どちらかの立場に過度に傾けば、もう一方の立場を否定することになります。そうすると、あなたは深刻な問題を抱えることになります。なぜなら、聖書は両方とも教えているからです。しかしあなたはこう言うでしょう。「どうやって、両者を調和させることができるんだい？」私は、両者を調和させないのです。私が両者を調和させなくてはならないということはありません。神はそんなことを頼まれませんでした。神は、私にそれを信じるように求められています。もし私が、婚前交渉をしている人たちや、不倫をしている人たち、肉の欲求に従って生きている人たちにでくわして、彼が「なあ。心配ないって！俺は、子どもの頃にビリー・グラハムの伝道クルセードで救われたんだ。」と言ったとします。しかし、この男は酒浸りで、性的に不道德な人です。しかし、彼は言います。「俺は一度救われたんだから、いつでも救われているさ！だから、俺のことは心配しないでくれ。」私は、必ずこの男を徹底的に揺さぶります。私は、ガラテヤ人への手紙五章を開いて、聖書が肉の働きについて語っていることを彼に示します。肉の働きのリストの末尾で、聖書は次のように宣言しています。「前にもあらかじめ言ったように、私は今も

あなたがたにあらかじめ言うておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。」(ガラテヤ 5 章 21 節) 私は、彼にコリント人への手紙とエペソ人への手紙を指し示します。私は彼に対して、肉の欲求に従って生きている者たち、墮落した性質の欲求に従って生活している者たちが、神の国を受け継ぐことはないことを示します。

しかしもう一方で、私が非常に繊細な良心の持ち主である聖徒(信仰者)と話をしたとします。彼らは失敗する度、何かうまく行かないことが起こる度に、救いの保証を失うと感じています。私は彼らに、私たちに与えられた神の愛の確かさを示す聖書箇所を指し示します。どのようにキリストが彼らのことを支えているか、また、誰も彼らのことを父なる神の御手から奪うことはできないことを示します。彼らを救いの保証を与える聖句に連れて行くのです。

ですから、この件に関して取る立場は、私が語りかける人の状態によって異なるのです。私は両者どちらかの側に立って、いくらでも論じることができます。人々と両者の主張を交換することもできます。私はあなたにどちらの立場でも好きなほうを選んでもらい、あなたが選んだ後に残った「立場」に立つこともできます。私は、いくらでも聖書箇所を示すことができますし、また議論することができます。

ですから、議論が起こるような主張には必ず両面あるというのは本当のことなのです。もし、教えられた定義が明らかであれば議論は存在しません。もし、私たちに以下のように断言している

聖書箇所——「『来てください。』と言いなさい。渴く者は来なさい。(欽定訳では【誰でも】という表現が入っている)いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。」(黙示録 22 章 17 節)——
が与えられていなければ議論は起こらなかったはず。しかし実際には神によって、私たちに
選択肢が与えられているという明確な教えが存在するのは事実です。神は、私たちに選択するこ
とを望んでおられるのです。「あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい。」
(ヨシュア 24 章 15 節)「あなたがたは、いつまでどっちつかずによろめいているのか。もし、主が神
であれば、それに従い、もし、バアルが神であれば、それに従え。」(I 列王記 18 章 21 節)しかし、
イエスは彼の弟子たちに言われました。「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたし
があなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、その
あなたがたの実が残るためであり、……」(ヨハネ 15 章 16 節)この件に関しては、二つの側面があ
ります。大切なことは、私たちがどちらか一方を強調するあまり、他方を排除してはならないとい
うことです。なぜならそのことによって、事実上あなたの会衆は二つに分裂してしまうからです。

私も他の聖書学校の生徒たちと同様に、この問題に取り組みました。私はアーサー・W・ピンク
氏が書いた「神の主権」という本を読み、とても混乱しました。なぜなら、彼が「救いに関して、人間
には何の選択肢もない。」と書いていたからです。「すべては神によることです。そこには、人間の
責任は存在しません。」私は非常に混乱してこの本を取り上げ、部屋の反対側に向かって投げつ
けてしまいました。私は、インク壺をサタンに投げつけたマルチン・ルターのような心境でした。私
は言いました。「神よ。私には理解できません。」私は精神的にフラストレーションに陥っていました。
そのときです。神が私の心に語りかけてくださいました。「わたしは、あなたに理解してほしいと頼
んではない。わたしは、ただわたしのことばを信じることを願っているのだ。」

そのときから、私は心安らかにしています。いまだにこの二つの側面を、頭の中で合理化するこ
とはできません。私には問題をもたらす根源である二つを、一つにまとめることはできません。こ
れは、言うなれば「線路」みたいなものです。二本の線路は並行して置いてあって、もしそれらが
一つになるときは、あなたは問題を抱えることになるのです。ですから、私には頭の中で両面を
調和させることはできないにしても、両者それぞれを信じています。しかし、もはやそうする必要は
ないのです。もはや、私の狭い知性の中にその両者を無理やり押し込めたりせずに、ただそれを、
そのまま受け入れて信じることで満足しています。

自分の知性の中に神を押し込め限定しようとする、逆に深刻なフラストレーションを味わうこと
になります。永遠ということを理解しようと試みてください！ 無限ということを理解しようと試みてく
ださい！ 無限大の空間ということを理解しようと試みてください！ どこがこの宇宙の果ての境目
なのかを想像してみてください。あなたが「行き止まりです。これより先には何もありません。」とい
う交通標識に出会うまで、どれだけの距離を行かなければならないのでしょうか？ 私たちが覚え
ておかなくてはならないことは、神というお方は、人間には制限できないということです。私たちの
思いや理解を超えてはるかに偉大な方です。神は言われました。「『わたしの思いは、あなたがた
の思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。——主の御告げ。——天が地よ
りも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよ
りも高い。』」(イザヤ 55 章 8—9 節)さて、もし神ご自身が「神の道は、私たちの思いよりも高い。」

と言われるのであれば、それを調べることは無益なことです。それは、私たちが知り得ることをはるかに超えているのですから。

私たちは、神の無限性について受け入れる必要があります。以上の重大な点に向き合うとき、私の知性はすぐに行き詰まってしまいます。そのとき私は素朴に立ち上がり、私の理解に合わせて縮小することはできない偉大な神を礼拝するのです。

あなたが仕え始めるとき、あなたがみことばを学び続けるとき、あなたは神の主権について語っている聖句に出会うことでしょう。それらに出会ったなら、それを教えなさい。あなたが人間の責任について教えている聖句に出会ったなら、それについて教えなさい。このようにすれば、人々はバランスのとれた霊的な栄養を確実に摂取することができるのです。

第十二章 信仰によって冒険する

「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならぬのです。」(ヘブル 11 章 6 節)

神にチャンスを提供して働いていただくことは、どんなときでも胸がわくわくします。神はあなたに、神ご自身がなさっていることに参加して欲しいと願っておられるのです。神はご自分の働きを、途中で止めることを願ってはおられません。ですから私たちにとって重要なことは、神が何をなさりたいのかを見出すことです。私が気づいたことは、信仰によって冒険をするときに、神がどのように働かれるか知ることができるということです。踏み出してみても、主がどうなさるかを見る必要があります。しかし私たちが信仰によって踏み出すとき「そうなるだろう」という勝手な思い込みから守られる必要があります。神がどうされるのかを見極めようとする人々の多くが、深刻な失敗をする場合があります。つまり神の御手が、その中に入らないのは明らかなのに、人間の努力がそれにとって代わる事態に後退してしまうのです。ときには私たちは自分の評判が危険にさらされるので、何かに過度に関わってしまうことがあります。すると私たちは余分なエネルギーを、神が始められてもおられないプログラムに投入してしまうのです。

私は何度も冒険しましたが、あるときは神がそこにはおられなかったことに気がつきました。このようなとき、あなたはどうすればよいのでしょうか？ あなたは退却すればいいのです。何が私たちを問題に引きずり込むのでしょうか。それは私たちがうぬぼれて「これを成功させてみせるぞ。」と言うときです。私たちが、全エネルギーを費やして神が参加しておられないものを作り出そうとしたら、あなたは空中分解してしまいます。信仰によって踏み出して、もし成功したなら私は喜んで言います。「素晴らしい！ 主が私を導かれた。」もし成功しなければ、私は一歩さがって言います。「私には良い考えだと思えたのに、確かに空振りだったなあ。」そこで私は、信仰の冒険をする者が採用しなくてはならない、ある予防策があると考えています。

旧約聖書の中にサウルの話があります。彼の統治下で彼は軍隊を作りました。彼自身が、部隊の主要な部分の司令官を務め、ヨナタンは部隊の小規模な部分の司令官を務めました。これは決して大きな軍隊ではありませんでした。あるとき、ペリシテ人が完全にイスラエル人を駆逐しよう

として、彼らの土地に進攻して来ました。彼らは大軍勢と戦車を集めました。彼らがあまりにも大勢だったので、ほとんどのイスラエル兵たちは脅かされ、彼らの持ち場を離れてヨルダン川の対岸に逃げ出しました。そこには数人の男たちが残っていましたが、彼らも恐れていました。

ある晩ヨナタンは、思い煩いからか、興奮からか、目を覚ましてしまいました。もし神がイスラエルをペリシテ人の手から救い出したいと願っておられるのなら、神には全軍隊は必要ないのです。もし神が働きたいと思っておられるのなら、神にとっては十万人の男たちを通してだろうが、一人の男を通してだろうが、働くことができになるのです。

あなたが自分の論理的な観点に従って考えるのをやめるとき、それはまさに真実だとわかるでしょう。神は全軍隊を必要となさらないのです。神が必要とされているのは、神の目的のために調和した人です。神が必要とされるのは、たった一人の人なのです。これは神からのチャレンジであり、またわくわくするような考えでもあります。この考えはヨナタンの目を覚まし続け、ついに彼の道具持ちまで起こし、次のように言ったのです。「ペリシテ人の陣地に行ってみよう。そして神が今日という日に、イスラエルをペリシテ人から救いたいと思われているのかどうかを見てこよう。」

そこで、彼らは信仰によって冒険しました。これは、次のような考え方によります。「神が今日働かれるかどうか見に行こう。今日神が何を求めておられるか見てこよう。」つまりあなた自身を、神にとって使用可能な状態に置くだけなのです。しかしヨナタンは、予防策を練りました。彼らが、ペリシテ人の陣地に行く途中でヨナタンは言いました。「私たちは、この行動の中に、神がおられるかどうかを確かめなければならない。だから、私たちが敵の見張りに呼び止められるとき、もし彼らが『おい、お前たち！ ここで何をしているんだ？ そこに降りていくから待っている。痛い目に会わせてやるから。』と言ったのなら、今日のところは、神がペリシテ人から私たちを救いたいと思われていないことを知ることになる。しかし、もし彼らが、『おい、お前たち！ ここまで、登って来い。ちょっと、教えてやることもあるから。』と言えば、それによって神が、彼らを私たちの手にお与えになったことを知ることになるんだ。」

そこで、彼らは結論を出さずにおきました。彼らは、自分勝手にペリシテ人の陣営を襲うことはしませんでした。なぜなら次のように考えていたからです。「神が私たちとともにおられる。だからこそ、私たちは彼らをやっつけることができる。」そこには、ある程度の予防策があったのです。もし私が確かかどうかわからなければ、この予防策があるのはどんなときでも賢いことです。聖書は、信仰による冒険をした多くの人々の物語で溢れています。彼らは、神がなさろうとしていることに機会を提供したのです。彼らは、ただ、彼ら自身を神の御前に「使用可能な状態」にしたのです。

何年か前のことです。私たちはラジオ局「KWVE」が売り出されていることを耳にしました。そのころ私たちは「KYMS」を通して番組を放送していました。実際は、彼らに番組の運営資金と看板を提供して、番組をスタートさせました。そのラジオ局の社長は、オレンジ郡にクリスチャン番組を提供するため、その放送局を購入したのです。「The Word For Today」は、もともとその放送局の中心となる番組だったのです。しかし、新しいオーナーがこの放送局を買い取りました。彼らはコンテポラリー音楽を放送番組の基調にして、逆に聖書の教えのメッセージ番組を停止することに決めました。そこで、私たちは別の放送局「KBRT」に番組を移しましたが、彼らから非常に高額な放送料を取られました。

そのころ「KWVE」局が売りに出ていることを聞いたのです。私たちは以下のように決めました。「彼らに、こちらから金額を提示してみよう。そして主がどうなさるかを見てみよう。もし、主がこの放送局を与えたいと思っておられるなら、彼らは私たちが提示した金額を受理して、ものごとはいま行くだろう。」私たちは、神が働かれる機会を提供したのです。そして神に尋ねました。「あなたは、オレンジ郡に、賛美・礼拝音楽と聖書の教えのメッセージを放送するラジオ局を欲しいと思っ

ていらっしゃいますか？ そのことを強く望んでおられますか？」
これでいいのです。喜んで冒険してみて、神に機会を提供するのです。これは、ただ信仰による行動なのです。私たちは、値切ったり交渉したりしないことに決めました。彼らに対して、ただこちらの言い値を提示しました。すると彼らは言いました。「他の人たちも、購入に関心があるみたいです。」それに対して、私たちは答えました。「それでも構いません。」高度なセールスのテクニックも、主にあって決心しているときには通用しません。私たちは次のように祈りました。「どちらでも構いません。主がそれをお望みならそれは結構なことですし、また、それをお望みにならないのでしたら、それで構いません。」ついに、彼らは私たちが提示した金額を受け入れ、すべてがうまく行ったのです。このようにして、私たちは「KWVE」を所有するに至りました。この放送局を通して素晴らしいミニストリーが展開されています。興味深いことに、この放送局では利益までを生み出しているのです。それでも、私たちは宗教番組を放送している他局と比べると、三分の一の放送料しか請求していません。私たちは、パートナーである他のミニストリーの番組に、安価な放送とたくさんの聴衆を提供しています。神は「KWVE」を祝福してくださいました。しかし、それは私たちが一歩踏み出して、次のように言ったからです。「神よ。もしこれがあなたの願っておられることでしたら、私たちは信仰によって冒険します。そして、彼らに金額を提示します。」

しかしもう一方で、テレビ局が売りに出されていました。私たちはそこにも金額を提示しました。世間一般に定着している、常軌を逸したどうでもよいような番組ではなく、模範的なキリスト教を主のために放映する機会と捉えました。私たちの言い値は受け入れられませんでした。そこで私たちはそれ以上、その件については関わりませんでした。無理に押し進めたり、主よりも先走ったりはしませんでした。もし神が私たちにそれを所有させたいのなら、そのことを可能になさったことでしょう。もしそうでないのなら、私たちはあくせくと奮闘して交渉するような真似はしないのです。ですから信仰によって踏み出して「神がなさりたいことを見定めること」は「成り行きを見守ること」と言えるかも知れません。

数年前、私たちは当時ツイン・ピークスにあった私たちのバイブルカレッジよりも、もっと大きな施設が必要であることに気がつきました。ツイン・ピークスでは、学生のためにすべての施設をあてがう必要があったので、定期的に行なっていた私たちの集会を開くことができなくなりました。そのようなときに、ビスタという町にある「ロサンゼルス救急ミッション」が所有している広大な美しい牧場が売りに出されました。

私たちは手付金を払いましたが、その牧場の近くに住んでいる多くのビスタの町議たちが、メディアを通して、私たちが出て行くように反対運動を展開しました。私たちは「これに対しては争う必要はない。」と決め、この取引から退きました。ある不動産屋が新聞を読んで、私たちが手付金をキャンセルしたことを知り、電話をして来ました。そしてたまたま彼らの扱っているリストの中に、

まだ公に知られていない、マリエタ・ホットスプリングスの物件があることを告げられたのです。私たちはその土地を見に行った結果、そこに可能性を見出したのです。私たちは低い金額を提示して言いました。「もし主がこの買いつけの中におられるのなら、ここを購入することになるだろう。」そしてなんと、私たちはそこを手に入れたのです！

私たちはコスタメサのカルバリー・チャペルの敷地に隣接している施設を、長い間欲しいと思っていました。この六階建てのオフィスビルは、もともと千八百万ドルで売りに出されていました。

数年前に、私たちは一千万ドルの購入金額を提示したところ、彼らは「これは、もっと価値があるはずです。」と言いました。すると、ある人が現われ、大口のテナントを探し出し、この取引をまとめました。そこで、この不動産に八百九十万ドルという金額を提示して来ました。面白いことに、私たちは以前に提示した金額よりも百万ドル近い安値で、このビルを購入したのです！ 私たちはこのことの上に、本当に主の御手があることを見ました。

しかも興味深いことに、もし私たちが最初に隣接するビルを購入していたら、マリエタ・ホットスプリングスの物件を手に入れることは決してできなかったのです。マリエタを購入する態勢ではなかったはずで、ですから、私たちはこのすべての過程に神の御手があったことを見ることができます。神は、私たちにそれら両方の不動産を手に入れることを願っておられたのです。そして神は、私たちがすでにマリエタの不動産を獲得している頃、見送るには惜しいほどオフィスビルの値段が下がるように、タイミングをお膳立てしてくださいました。そして今では、私たちが欲しかった両方の不動産が手に入ったのです。

私たちは、赤ちゃんのような一歩を踏み出しました。すると主が、私たちに大きな一歩を踏んで欲しいと願われたのです。あなたは、ただ前進するのみです。主がその扉を開いてくださっている限り、あなたは前進するのです。どんなときでも信仰によって踏み出すときには、これでいいというような感覚があります。あなたは断固として踏み出して、主が何をされるかを見てみるのです。しかしもう一度言いますが、もし神がその一歩の中におられなかったら、私たちは神と争うことはしません。私たちは状況操作はしないのです。ものごとを無理に押し進めません。もし神がそこにおられないのなら、神がおられる道に行くだけです。そのほうが、ものごとが円滑に運びます。私たちは妥協する必要はないのです。

グレッグ・ローリーが、私たちが開いていた月曜日の夜のバイブル・スタディを引き継いだとき、神は彼と彼のミニストリーを大いに祝福されました。私たちは、毎週月曜の夜に若い人々がキリストを受け入れるために、講壇の前に進み出るのを見ました。私はグレッグに電話をして言いました。「グレッグ。この夏に、パシフィック野外円形劇場を一週間予約できるかどうかやってみないか。もっと人数が入る大きな施設を借りた場合に、神が何をされるのか見てみよう。私たちのやっている月曜の夜のバイブル・スタディは人が溢れていて、みんなが入ることができない。だから、パシフィック劇場で試してみたらいいと思うんだが？」

電話をしたのは四月のことでした。グレッグは、私たちにはそれをするために十分な時間がないと考えていました。彼は言いました。「今はできません。」私は「なぜできないんだい？ 彼らに一週間空いているかどうか確かめてみないか。もっと広い場所で神が何をされるかを見てみよう。」と言いました。

私たちは、パシフィック劇場に電話をしました。すると、夏期の間の一週間の空きがあったのです。このイベントを「ハーベスト・クルセード」と名づけました。本当に喜びに溢れました。なぜなら、その一週間というのは素晴らしいの一言につきたからです！ イベントの最終日には、あまりにも大勢の人々がつめかけたので、施設担当者たちがゲートを閉めなければならないほどでした。私たちは入場できなかった人々がメッセージや音楽を聞けるように、スピーカーを施設の外側に置きました。これは、わくわくするような出来事でした！ ハーベスト・クルセードは、そこからスタートし、発展してきたのです。しかし最初は、素朴な信仰によって、一步を踏み出したのです。「神が何をされるのか見てみよう。神が働かれるチャンスを提供してみよう。一步踏み出してみよう。」私たちは、幾ばくかのお金を失うリスクを背負うかも知れません。しかし、ことわざにもあるように「何も冒険しないのなら、何も得ることはない」のです。

他にも旧約聖書に、信仰によって踏み出した人々の古典的な事例が登場します。それは、サマリヤの町がアッシリアの軍隊によって包囲されたときに起こりました。サマリヤの戦況は最悪の状態にまで達しました。そこではロバの顎骨が銀六十五枚で取引され、鳩の糞一カブの四分の一が銀五枚で取引されていたのです。女性たちは「人食い」に走りました。ひとりの女性が、王に助けを願って叫びました。しかし彼は答えました。「どのようにお前を助けることができようか？ 私自身が食べるものがないというのに。」彼女は言いました。「この女と私で、私たちの赤ちゃんを食べることに決めました。それで私たちは、私の子どもを煮て食べました。でも、彼女は自分の子どもを隠してしまったのです。ですから、彼女に赤ん坊を差し出すように命じてください。そうすれば、私たちは食べることができるのですから。」それを聞いた王は、自分の服を裂いて言いました。「神よ。もし私が、エリシャの首を刎ねることができないのであれば、あなたがそのことを助けてください！」彼は自分の問題の責任を、神に転嫁しているのです。(Ⅱ列王記 6章 24—33節参照)

エリシャは、預言者としても人としても、とても興味深い人物です。彼には、驚くべき霊的な洞察力が備わっていました。また、彼は神と非常に親密な交わりを持っていたので、神が彼に物事を明らかにされないときには驚いたようです。さて、神はまれに私に物事を明らかに示してくださいませ。神が示してくださいるとき、私はいつも驚かされます。そして興奮するのです！ 人生の中で、こんなことは数回しか起こりません。しかし、エリシャは、いつも神が物事を明らかに示していたので、神が示してくださいさらないときに驚いたのです。私は神が示してくださいるときに驚きます。しかし、彼は神がお示しにならないときに驚くのです。

エリシャは友人たちと家にいたとき、「わあ、すごいな！ どうだ参ったかって感じだね。」と、独り言を言いました。そこで、彼の友人たちは尋ねました。「エリシャ、何かあったのかい？」すると、エリシャは答えました。「王が、私の首を刎ねるために、部下をここに送ったのさ。そこでだ。そいつがドアをノックしたら、君らがドアを開けて、その男をドアにしっかりと押しつけるんだ。気をつける！ そいつの主人の足音が、すぐ背後に聞こえるから。」すると、すぐにドアをノックする音が聞こえました。エリシャの友人たちはドアを開き、その男をドアに押しつけて捕まえました。すると、王が彼の宰相とともに乗りつけて来て言いました。「ついにお前をやっつけることができるぞ！ お前が、イスラエルに災難ばかりもたらした張本人だ。もうたぐさんだ。」エリシャは答えました。「私が、イスラエルに災難をもたらしたのではない。お前自身がバアルを拝むことによって、イスラエルに

災難をもたらしたんだ。責めるなら自分を責めろ！」

彼は続けて言いました。「心配することはない。明日の今ごろには、サマリヤの城門で、上等の小麦一セア(七・六リットル)が、銀一シェケル(十一・四グラム)で売られるようになる。」その宰相は、神の約束に対して次のようにわめきました。「たとい、主が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか。」(Ⅱ列王記7章2節)それに対して、エリシャは言いました。「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。」(Ⅱ列王記7章2節)

なぜ、その宰相は神の約束に対してためらったのでしょうか？ なぜなら彼は、神には可能なことを、人間のやり方によって理解しようと試みたからです。多くの場合、そこから私たちは混乱するのです。そして、神がどのように物事を可能になさるのかわかることができないのです。私たちは色々なことを試したり、あらゆる企画を立てたりした後に、これは不可能だと結論づけてしまうのです。私たちには、この宰相のように「たとい、主が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか？」と言う傾向性があります。エリシャは言いました。「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。」神は、ご自身の働きを続行されます。

しかし、あなたの不信仰のゆえに、あなたは神の働きから恩恵や利益を受け取ることはできないのです。

この話は四人のらい病人の登場とともに続きます。彼らは、サマリヤの町の外にあるゴミの山で暮らしていました。彼らはらい病人だったので、町に入ることが許されていませんでした。彼らは城壁の上から投げ捨てられるゴミをあさって生きていました。しかし、城内が食料不足に陥っていたので、彼らも飢え始めました。彼らの一人が、他の者を見て言いました。「私たちはどうして死ぬまでここにすわっていなければならないのだろうか。」(Ⅱ列王記7章3節)「町に入っても意味ないだろう。そこで今、シリアの陣営に行ってみよう。もし彼らが私たちをあわれんでくれるなら、パンくずをもらって私たちは生きのびるかも知れないし、もしかしたら殺されるかも知れない。でも、そのときはそれまでのことさ。どうせ、このままでも死ぬんだから。」彼らは、信仰によって冒険を始めました。もしかしたら、パンくずにありつけるかも知れないし、そうじゃないかも知れないという、小さな希望にかけた信仰による冒険をしたのです。

私は多くの教会が、このらい病人たちと同じ立場に立とうとしないことに驚かされます。教会に残された数少ない人々が、次のように言わないので驚くのです。「なあ、なんで死ぬまでこうやってただ座っているんだい？ 何かしてみよう。もしかしたらうまいくかも知れないし、うまいかないかも知れない。たとうまいかなかったとしても、それがどうしたって言うんだ。どうせ死ぬんだらう。だったら冒険してみよう。」

私は、歴史におけるすべての信仰による冒険は、以上のような仮定の上に成り立っていると考えます。神が何をされたいのか、誰にわかるのでしょうか？ それなら一歩踏み出してみましよう。神にチャンスを提供するのです。エリシャの話は、以下のような結末に至りました。シリアの兵隊たちは、エジプトの戦車軍団と勘違いしたのです。彼らは、サマリヤの王がエジプト兵を雇ったのだと思いついて、パニックを起こしました。四人のらい病人が最初のテントに到着するまでに、シリア軍は逃げ去っていました。彼らは、誰もいないテーブルの上に夕食が乗っているを見つけました。そこで、彼らは腹いっぱい食べて、そこにあったすべての貴重品を持ち出しました。次のテントに

入ると、そこでも同じ情景が待っていました。そこにも誰ひとりおらず、食べ物だけがたくさん並べてありました。

彼らは略奪品を持ち出して、それを地中に埋めて隠そうと試みているとき、一人のらい病人が言いました。「なあ、みんな！ 俺たちは、神が何をしてくださったかを、町の人に知らせたほうがいいんじゃないか。もし俺たちがこれを隠して、密かにため込むなら、俺たちの上に災害が来るぞ。」彼らが町に戻ったとき、彼らは城壁の上にいる番兵に向かって叫びました。「シリア軍の陣営はもぬけのからだぞ。そこには、町の全員が食べるのに十分な食料がある。今晚は空腹のまま眠らなくてもいいことを、王さまに知らせてくれ。」王がその知らせを聞いたとき、彼は言いました。「これは罠だ。悪賢いシリア人たちは、われわれがどれだけ腹ぺこか知って、町から出てそこへ押し寄せるのを待ち、物陰に潜んでいるんだ。そこでわれらを急襲して殺すのだ。誰も城外に出てはならない。町の門にかんぬきを掛けたままにしておけ。」

私は、この悲劇と不信仰による損失のことを考えます。それは、神が豊かに与えてくださるときに、私たちが参加することを阻むのです。私は、そのような考え方をする人々に出会ったことがあります。彼らは、いつも「それは罠のようなものだろう。」と言います。これが本当なら話が良すぎる、きっと企みがあるに違いない。神が働かれるときに、彼らは冒険することを恐れるのです。

長年にわたり、私にとってとても意味ある聖書箇所があります。それは第二歴代誌の中の十四章にあり、ユダのアサ王の統治の話から始まります。彼は王位に就いたとき、二十五歳の若さでした。彼が王位に就いて間もなく、エチオピアの軍勢が、同盟国と結託し百万人の軍隊と戦車隊とを集めて、ユダの領地に進攻して来ました。アサがこの大軍勢襲来の報告を受けたとき、彼は主に祈って言いました。「力の強い者を助けるのも、力のない者を助けるのも、あなたにあっては変わりはありません。私たちの神、主よ。私たちを助けてください。私たちはあなたに拠り頼み、御名によってこの大軍に当たります。主よ。あなたは私たちの神です。人間にすぎない者に、あなたに並ぶようなことはできないようにしてください。」(Ⅱ歴代誌 14 章 11 節)

私はこの話が大好きです。彼はこのようには言いませんでした。「神よ。私には計画があります。それで私は、あなたにこの計画を祝福していただきたいのです。」また、次のようにも言いませんでした。「さて神よ。私はすべてを計算しております。今このプログラムを祝福してください。」それは「神よ。私の側に立ってください。」ではなく、逆に「神よ。私はあなたの側に行きます。あなたの御名によって、私たちは彼らに立ち向かいます。人間にすぎない者に、あなたに勝つことができないようにしてください。彼らは、私たちに打ち勝つことはできないでしょう。私は、何も持っていません。私には力もありません。しかし、あなたにとっては、それは重要なことではありません。私は、あなたの御名によって出かけます。彼らは、たとえ私に打ち勝つことができても、あなたに打ち勝つことを許さないでください。」

これは、ヨナタンが述べたことに似ています。神は全軍隊を必要とされません。神が働きたいと思われたら、たったひとりの人を通して働くことができになります。パウロがローマ人への手紙八章三一節で言ったことは「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」ということでした。

神は、アサにエチオピア軍に対する勝利を与えられました。アサが帰還するときに、主の預言

者が来て彼に会いました。主は、その預言者を通して言われました。「アサおよび、すべてユダとベニヤミンの人々よ。私の言うことを聞きなさい。あなたがたが主とともにいる間は、主はあなたがたとともにおられます。もし、あなたがたがこの方を求めるなら、あなたがたにご自身を示してください。もし、あなたがたがこの方を捨て去るなら、この方はあなたがたを捨ててしまわれます。」(Ⅱ歴代誌 15 章 2 節) 彼がユダを統治し始めたとき、アサは主から偉大なことばを受けました。「あなたがたが主とともにいる限り、主はあなたがたとともにおられます。もし主を探し求めるなら、主はあなたがたにご自身を示してください。しかし、あなたが主を捨て去るなら、主もあなたを捨て去ってしまわれます。」

アサの統治下において、ユダ王国は繁栄し、人々は祝福されました。彼の晩年の統治においても、アサは豊かに繁栄し成功者となりました。しかしその頃、北イスラエル王国がユダ王国に進攻することを決めました。彼らは、エルサレム北部にいくつもの砦を築き始めました。ユダ王国に攻め込む前に、いくつもの包囲網の拠点を準備していたのです。

砦を築いている北イスラエル兵たちをアサが見たとき、彼は敵の計画に気がついて、神殿の宝物倉から貨幣を取り出しました。彼は、シリアの王ベン・ハダデのもとに金や銀を送り届けて、イスラエルの北部から攻めるようにシリア軍を雇ったのです。シリア軍は、ゴラン高原から南下して、イスラエルの北部を攻撃し始めました。すると北イスラエルの王は、ユダで砦を築いていた兵員を、シリア軍の攻撃に備えて北部の国境沿いへと配置換えしたのです。イスラエル兵が砦から去ったとき、ユダ兵は出て行って砦を解体してしまいました。

これらの出来事を外側から眺める分には、この戦略は成功したと思えます。確かにうまくいきました。アサは、自分が考え出した素晴らしい戦略にうめぼれて楽しんでいたに違いありません。十分な資金があれば何でもできると思いがっていたのです。あなたはシリア軍を雇うこともできます。彼ら傭兵によって、自分を守ることもできます。なんとうまい戦略なのでしょう！

するとハナニという予見者がアサのもとに来て言いました。「あなたはアラムの王に拠り頼み、あなたの神、主に拠り頼みませんでした。それゆえ、アラム王の軍勢はあなたの手からのがれ出たのです。あのクシュ人とルブ人は大軍勢ではなかったでしょうか。戦車と騎兵は非常におびただしかったではありませんか。しかし、あなたが主に拠り頼んだとき、主は彼らをあなたの手に渡されたのです。」(Ⅱ歴代誌 16 章 7—8 節) あなたが、まだ小さい存在にすぎなくて力もないとき、エチオピアの大軍勢が押し寄せるような状況に直面したときに、あなたは主に拠り頼み、主はあなたを助け出されたのです。あなたは、主に信頼していたではありませんか。しかし今、あなたは力を増し強くなり、あなた自身の策略に頼りました。あなたは知らないのですか「主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心のご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてください。」(Ⅱ歴代誌 16 章 9 節) これこそが鍵なのです。主の御目は全地を巡り、主の心と調和している心の持ち主を捜します。それは彼らを支持して、神ご自身の力を現わされるためです。

この予見者は「神には、ご自分がなさりたい働きがある。」と、言っているのです。神は常に「働きたい」と願っておられるのです。神には、ご自分がなさりたい働きがあるのです。そして、神はただご自分の願いと調和している人を捜しておられるのです。それは彼らを支持して、力強い神ご自身を現わされるためなのです。その手がかりは、神がなさりたいことを発見することにあります。私

が見出した一番よい方法は、ただ踏み出してみることです。やったあとでどうなるか見てみましょう。もしかしたら、神が働かれるかも知れません。もしかしたら、神は働かれないかも知れません。神にチャンスを提供してみましょう。しかし、もう一度言いますが「もうまくいかないのなら、無理やり押し進めない」という態度が必要です。プロジェクトから、いつでも立ち去ることができる柔軟性を維持するのです。もしそれがうまくいかないのが明らかな場合、さらに押し進めて、努力して成功させようとするのしないようにしましょう。

私たちは、同じ考え方をエステルのお話の中に見ることができます。モルデカイが彼女に向かって、王のところに行って会うように告げたときのことです。彼女は言いました。「行きさえすれば、王に会えるというものではありません。王から呼び出されなければならないのです。もし王から呼び出されていないのに行くなら、命を賭けることになります。」モルデカイは答えました。「法令が布告されても、あなたは逃げられると思っているのか？ もしかしたら、神はこのよくなときのために、あなたを立てたのかも知れない。もしあなたが立ち上がらないのなら、別のところから、助けと救いがユダヤ人のために起ころう。」

言い換えれば、神はご自身の働きを続けられるということです。神は、ご自身の目的を完成されるのです。イスラエルの国が、消えてなくなるなどあり得ません。なぜなら、この民族を通してメシアが来られるからです。あなたは、神の目的は必ず実現に至ることを信頼しなければなりません。あなたが失敗したとしても、別のところから救いが起こるのです。そのようにして、神は働きを続けられます。しかし私たちの前には、神が私たちを通して働かれる器となる機会が置かれているのです。私は、しばしばそれが実際に起こっていると信じています。神は、ご自分が望んでおられる働きを続けて来られたのです。主はそれをなさりたいのです。そしてあなたは、そこに参加するかどうかを選ぶことができるのです。もし、あなたが思い切って踏み出すなら、あなたは神に使われる器になれるのです。エステルの場合、王に呼ばれてもいないのに王の御前に行くのは、彼女が思い切って踏み出したことを物語っています。もし、王が金の笏を差し伸ばさなければ、即座に彼女は殺されることになるからです。

数年前に「福音の飛行船」と呼ばれる本が出版されました。これはありきたりな教会成長プログラムで、教会の出席人員の増加を狙って考案されたものでした。人々に受けがいい教会成長プログラム、アイデアの数々、事業計画を見るのは、まさに驚きに値します。そのアイデアは、単に小さな飛行船を購入して教会の上に飛ばすというものでした。周辺の人々に、教会がそこにあることを知ってもらおうという考えです。それだけでなく、彼らは「イエスはあなたを愛している。」というメッセージを小さな飛行船に書き込んだそうです。

彼らが、その小飛行船を飛ばし続けるという取り組みは、笑えないような結末になりました。ある日、嵐が到来したので、人々は必死にその飛ばされそうな飛行船を捕まえようとしていました。彼らは、そのことで激しく争うこととなったのです。そして、このことを通して半数の人々が怒って教会から去ってしまい、教会は分裂してしまいました。これは悲しいことですが、人間の頑張りはその程度のものだという真実を物語っています！ 彼らは教会に何かをもたらす代わりに、損害をもたらしたのです。先ほどの話に戻りますが、その飛行船がうまく機能しないことがわかると、「なんてことだ。この飛行船に千五百ドルも払ったんじゃないやなかったのか。それならこれは空に浮かばせておか

なければならないぞ。」と、彼らは言いました。しかし「これは間違いだった」と言うべきだったので、こんなものは忘れて、風に流されるままにしておけばよかったのです。神が吹き飛ばそうと思っておられるものに、しがみつかないようにしましょう。

何年か前のことですが、私はサザン・バプテスト教会でメッセージをするために、テキサス州にあるラブボック市に行きました。その牧師が「私たちは、人間が作り出す教会プログラムを採用しないことに決めました。」と言いました。言い換えれば、彼らは延命装置を動かすようなことをして、死にかけているものを生かすようなことはしない、と言っているのです。

教会がよく犯す失敗例があります。神は、特定の種類のプログラムを使われるときもあるのですが、それは時とともに過ぎ去るものです。不幸なことに、それを無理に活性化しようとする試みが慣習となってしまいました。そのような人々は、延命装置を投入して、死んでいるものを生かそうと試みるのです。それでは、自然死を迎えるべきものを、人工的な処置で延命させることになってしまいます。むしろ、神の助けによってそのまま死なせることを学べますように。

過去にさかのぼり、神がすでになされたことを語り出すときは、あなたが退化したしるしです。それよりも「今日、神が何をしてくださっているかを見てください。」と言うべきです。ただ神が何をされたかを耳にするよりも、私たち自身が、神の力強い働きの一部になることのほうが大切です。私たち自身が体験し、神の働きを目撃する必要があります。そうでなければ、それ以上先には行けません。神の働きを体験することに限って言えば、最初の世代が体験を通して学んだように、後に続く世代にも個人的な体験を通して学ばせる必要があるのです。このやり方だと、継続することができるのです。しかし、私たちが記念碑を建立して、以下のように言い始めるなら……「神が以前にしてくださったこと、また、どのように神があの人を使ったかに注目してくれないか。知っているかい。神が、どんなにあの人を祝福されたことか！」注意してください。私たちが、過去に神が何をしてくださったかを思い出させるために記念碑を建てるとき、それはどんなときでも悲しむべき日となります。なぜなら私たちは、それぞれ人生において「今」というときに、生き生きとした新鮮な神の働きを体験する必要があるからです。

あるとき、神がカルバリー・チャペルの土曜の夜のコンサートを、まさに栄光に満ちたやり方で使われたのです。土曜の晩のコンサートは、その当時私たちにとって素晴らしい伝道的手段でした。コンサートはいつも満員でした。毎週土曜になるとたくさんのバンドが来て、何百人という若者がイエス・キリストを受け入れました。もし、南カリフォルニアのどこで人々が救われたかを調査するなら、あなたは、その多くはカルバリー・チャペルの土曜の夜のコンサートであることに気がつくでしょう。神がそれらのコンサートに使われた時期があったのです。しかし、そのような時期は過ぎ去ったのです。何年か前、土曜の晩のコンサートをもう一度やりたいという人たちがいました。そこで私は「いいだろう。やってみなさい。」と言いました。しかし、その「シーズン」は過ぎ去っていたのです。しばらくの間、彼らはそれを続けようと頑張っていました。しかし、それはあたかも神が「もうその時は過ぎ去った。」とされているような有様でした。そのときが決して二度と訪れないという意味ではありません。最もよい方法は、そのいのちが消え入るまで頑張って続行するのではなく、むしろそれをキャンセルすることです。それを手放すのです。死ぬに任せるのです。頑張って、活動を持ちこたえさせるのはやめましょう。

信仰によって一歩踏み出し、もしそれがうまくいけば喜びましょう。もしうまくいかないのなら、他の何かを探しましょう。神に機会を提供しましょう。私は、神に機会を提供することの意義を強く信じています。うまくいくなら、それは光栄なことです！しかし、うまくいかなかったときには、深くのめり込まないようにしましょう。そうすれば、それから立ち去ることができます。そして次のように言うことができます。「あーあ、いい考えだと思ったのになあ。そうだろう!？」その考えにとらわれて、そこから立ち去れないほど深くのめり込まないようにしましょう。

聖霊によって導かれましょう。聖霊の導きに従うことを恐れなくてください。また、聖霊によって導かれたのなら、肉によってそれを完成させようとしないことです。私たちの働き of 初期に、ともにいた何人かの男たちにとってさえ、これはやっかいな問題だったと思います。神ははじめの頃、彼らのミニストリーを祝福されました。しかし不幸なことに、彼らは初期に比べ、はるかに組織立ててすべてを運営するようになったのです。彼らは、こんどはプログラムを指導するようになり、それによって活気を失うことになったのです。聖霊によって始めたのなら、肉によって完成することを追い求めないようにしましょう。どんなときでもそれは誤りです。

神が私に与えてくださった牧師たちは、信仰によって素朴に冒険するというビジョンを持っています。私はそのことを神に感謝しています。彼らが信仰によって冒険するのを私は見えています。私たちがあえて一歩を踏み出すときに、神が祝福してくださるのを見るのは、わくわくするものです。神は、ご自分がおやりになりたいと思われることは、何でもおできになります。そのことを踏まえて、私たちが自分自身を道具として差し出すとき、みこころに従って、主はその人を使うことができになります。重要なことは、私たち自身を神にとって使用可能な状態に置くことです。そうすれば、主の御目は全地を見渡し、主と心が調和している者たちを助けて、彼らに対してご自分を力強く現わしてくださるのです。神の願いを見つけ出し、それに没頭しましょう。神の心と自分の心を調和させましょう。そうすれば、あなたがたは神が何をなさり、どれほど祝福されるかを見て驚くことでしょう。